第20表　遺物観察表（古代・中世 4/8）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量(cm) ※( )推定値 口径	底径	器高	調整・技法等 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
354	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(7.55)	－	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	灰白　橙	浅黄橙	4㎜以下の褐色粒	
355	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(6.0)	－	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	3㎜以下のにぶい橙色・灰褐色・にぶい褐色・褐色粒	
356	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(7.2)	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 褐灰	にぶい黄橙 褐灰	3㎜以下の暗赤褐色・にぶい赤褐色・橙色・黒色・黒色鋭光沢粒	
357	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(5.5)	－	回転ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な黒色・灰色粒	
358	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(7.5)	－	回転ナデ 放射状圧痕	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細なにぶい橙粒 2㎜以下の明赤褐粒	放射状圧痕
359	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(6.8)	－	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰白	微細な灰白色・明褐灰粒 3㎜以下の褐灰粒	
360	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.6)	－	回転ミガキ　ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の黒褐色・褐灰色粒	
361	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.7)	－	回転ミガキ 回転ナデ	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の赤褐色・褐灰色・黒褐色粒	
362	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(7.1)	－	ミガキ　回転ナデ	ミガキ	灰黄褐	にぶい黄橙	1㎜以下の黒色粒	
363	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.7)	－	ミガキ　回転ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の赤褐色・橙色・黒色粒 微細無色透明光沢粒	
364	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(5.8)	－	回転ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	2㎜以下の白色粒 1㎜以下の黒色・茶褐色粒	
365	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(6.3)	－	ミガキ　回転ナデ	ミガキ	灰黄褐	灰黄褐	0.5㎜以下の灰白色・橙色粒 微細無色透明光沢粒	
366	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.8)	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	浅黄橙 褐灰	褐灰	2㎜以下黒色粒	
367	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(6.9)	－	ミガキ	ミガキ	浅黄橙 明黄褐	にぶい黄橙	1㎜以下の黒色・赤褐色・褐灰色粒 微細無色透明鋭光沢粒	
368	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	(13.3)	－	－	ミガキ	ミガキ	黒褐 灰褐	黒褐	2㎜以下の明褐色・褐灰色粒 微細無色透明鋭光沢粒	黒色土器（内黒）
369	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	(15.6)	－	－	回転ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒	2㎜以下の半透明鋭光沢粒 1㎜以下のにぶい橙色・褐灰色粒	黒色土器（内黒）
370	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	(16.3)			回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 褐灰	灰黄褐	微細無色透明粒	黒色土器（内黒）
371	土師器	高台付埦 口縁部～底部	Ⅲa層	(17.0)	－	－	回転ナデ（風化気味）	ミガキ	にぶい橙	黒	2㎜以下の灰色・茶褐色粒	黒色土器（内黒）
372	土師器	高台付埦 口縁部～体部	B-17-SH4	－	－	－	回転ナデ	ミガキ	灰白 灰黄	黒	1㎜以下の白色粒 2㎜以下の茶褐色粒	黒色土器（内黒）
373	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	ミガキ	にぶい褐	黒褐	2㎜以下のにぶい褐色・明褐灰色・橙色粒	黒色土器（内黒）
374	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(6.65)	－	回転ナデ　ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒	微細透明光沢粒 1㎜以下の白色粒	黒色土器（内黒）
375	土師器	高台付埦 底部	SE1	－	(7.5)	－	回転ナデ	ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	0.5㎜以下の灰白色・赤褐色・黄橙色・黒色粒、0.5㎜以下の黒色・無色透明光沢粒	黒色土器（内黒）
376	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(5.6)	－	回転ナデ　ミガキ	ミガキ	灰黄褐 にぶい黄橙	褐灰	微細無色透明鋭光沢粒 3㎜以下の褐色粒	黒色土器（内黒）
377	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(7.2)	－	回転ナデ　ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 褐灰	褐灰　黒	微細無色透明鋭光沢粒 2㎜以下の明赤褐色粒	黒色土器（内黒）
378	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.6)	－	回転ナデ　ミガキ	ミガキ	灰褐 褐灰	黒	微細無色透明鋭光沢粒 2㎜以下の灰白色粒	黒色土器（内黒）
379	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.3)	－	回転ナデ　ミガキ	ミガキ	浅黄橙	褐灰　黒	微細無色透明鋭光沢粒 2㎜以下の白色粒	黒色土器（内黒）
380	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	7.1	－	回転ナデ　ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 黒	黄灰　黒	微細無色透明鋭光沢粒 3.5㎜以下の灰白色・明褐灰色粒	黒色土器（内黒）
381	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.2)	－	回転ナデ　ミガキ	ミガキ	にぶい黄 黄灰	黒	微細な無色透明鋭光沢・浅黄橙色粒	黒色土器（内黒）
382	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(6.6)	－	回転ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	微細無色透明鋭光沢粒 2㎜以下の明褐色・褐色・黒褐色粒	黒色土器（内黒）
383	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.6)	－	回転ナデ	ミガキ	浅黄橙	明褐灰 褐灰	微細透明光沢粒 1㎜以下の灰色・茶色・白色粒	黒色土器（内黒）
384	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.7)	－	回転ナデ　ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 黒褐	黒	微細無色透明光沢粒	黒色土器（内黒）
385	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(7.0)	－	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒	微細無色透明鋭光沢粒 2㎜以下のにぶい橙色・にぶい黄橙色粒	黒色土器（内黒）
386	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.5)	－	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰	1㎜以下の褐灰色粒	黒色土器（内黒）
387	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(7.2)	－	回転ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒	微細無色透明粒 1㎜以下の褐灰色粒	黒色土器（内黒）
388	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(10.1)	(5.5)	1.7	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	褐灰	黒	2㎜以下のにぶい褐色・赤褐色・灰白色粒、微細無色透明光沢粒	黒色土器（両黒）
389	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	(6.4)	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	黒	黒	0.5㎜以下の灰白色粒 0.5㎜以下の黒色・無色透明光沢粒	黒色土器（両黒）
390	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.4)	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	褐灰	黒	0.5㎜以下の赤褐色・灰白色粒 微細無色透明光沢粒	黒色土器（両黒）
391	土師器	高台付埦 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	黒褐 黄灰	黒	微細白色粒	黒色土器（両黒）
392	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(6.4)	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	黒	黒	微細無色透明鋭光沢粒 1㎜以下の灰黄色粒	黒色土器（両黒）
393	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.6)	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	褐灰	黒	1㎜以下の灰白色・橙色粒 微細な黒色・無色透明光沢粒	黒色土器（両黒）
394	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(7.4)	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	黒	黒	微細無色透明鋭光沢粒	黒色土器（両黒）
395	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(7.1)	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	黒褐 黄灰	黒	微細な無色透明光沢・白色粒	黒色土器（両黒）
396	土師器	高台付埦 底部	B-SB1-SH2	－	(6.5)	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	黒	黒	微細な無色透明光沢・白色粒	黒色土器（両黒）
397	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(7.2)	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	黒	黒	微細無色透明鋭光沢粒	黒色土器（両黒）
398	土師器	甕 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ヨコナデ　スス付着	ヨコナデ　スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細無色透明鋭光沢粒、2㎜以下の橙色・明赤褐色・黒褐色粒	
399	土師器	甕 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ　ケズリ	明赤褐	明赤褐	微細無色透明鋭光沢粒、4㎜以下の淡橙色・にぶい橙・褐灰色粒	
400	土師器	甕 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ヨコナデ　ナデ スス付着	ケズリ　ナデ	にぶい橙	淡橙	2㎜以下の暗赤灰色・にぶい橙色・にぶい赤橙色・灰白色粒	
401	土師器	甕 胴部	Ⅲa層	－	－	－	ナデ	ケズリ　ナデ	明赤褐	明赤褐	微細無色透明鋭光沢粒 淡橙色・にぶい橙・褐灰色粒	
402	土師器	鉢 口縁部～胴部	Ⅲa層	(20.8)	－	－	ヨコナデ　ナデ	ケズリ　ヨコナデ	にぶい黄橙 黒褐	暗赤灰 にぶい赤褐	微細無色透明鋭光沢粒 1㎜以下の浅黄橙色・淡橙色粒	
403	土師器	鉢 口縁部～底部	Ⅲa層	(25.8)	－	－	ヨコナデ　ナデ スス付着	ケズリ　ヨコナデ	灰褐	にぶい橙	3㎜以下の灰白色・褐灰色粒	
404	土師器	鍋 口縁部～底部	Ⅲa層	(34.0)	(24.6)	(11.6)	ヨコナデ　ナデ スス付着	ケズリ　ヨコナデ	灰黄褐	にぶい橙	4.5㎜以下のにぶい赤褐色・にぶい橙色・褐灰色・褐色粒、微細無色透明鋭光沢粒	
405	土師器	壺 頸部～胴部	B-SB1	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5㎜大のにぶい赤褐色粒 1㎜以下の灰褐色粒	
406	土師器	布痕土器 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ナデ　指オサエ	布目痕	にぶい橙	橙	2～5㎜の茶色粒	
407	土師器	布痕土器 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ナデ　指オサエ	布目痕	橙	橙	2～5㎜の灰色粒	
408	土師器	布痕土器 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ナデ　指オサエ	布目痕	橙	橙	1㎜以下の灰色粒	
409	土師器	布痕土器 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	ナデ　指オサエ	布目痕	にぶい橙	にぶい橙	8㎜以下の灰褐色・にぶい赤褐色・にぶい橙色・褐灰色粒、微細無色透明粒	
410	土師器	布痕土器 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ナデ　指オサエ	布目痕	褐灰	橙　褐灰	7㎜以下の褐灰色粒、3㎜以下の灰白色・にぶい橙色・赤褐色粒	
411	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	11.4	5.7	4.8	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	橙	橙	微細白色粒	墨書土器「東」
412	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(12.3)	(6.0)	4.45	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2㎜以下の白色粒 1㎜以下の茶褐色粒	墨書土器
413	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	13.6	5.8	4.9	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2㎜弱のにぶい赤褐色粒	墨書土器「東」

第21表　遺物観察表（古代・中世 5/8）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量（cm）※（）推定値 口径	底径	器高	調整・技法等 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
414	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(12.6)	5.8	4.6	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細透明光沢粒 1㎜以下の灰色・黒色・茶褐色粒	墨書土器
415	土師器	埦 口縁部～底部	Ⅲa層	14.0	7.2	6.3	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ　スス付着	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の黒色・灰白色粒 2㎜以下のにぶい赤褐色粒	墨書土器
416	土師器	坏 口縁部～体部中位	Ⅲa層	12.6	—	—	回転ナデ（風化気味）	回転ナデ（風化気味）	浅黄橙	浅黄橙	微細な赤褐色・黒色粒	墨書土器「東」
417	土師器	坏 口縁部～体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデのあとミガキ	橙	にぶい黄橙	含有物少	墨書土器 「山（水）」
418	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の赤褐色粒	墨書土器 「山（水）」
419	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1㎜大の赤褐色粒	墨書土器「東」
420	土師器	坏 口縁部～体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細黒色粒	墨書土器
421	土師器	坏 口縁部～体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1～2㎜大の黄灰色粒	墨書土器 「水」か
422	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1㎜弱の灰黄色粒	墨書土器 「山」か
423	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	2㎜以下の褐色粒	墨書土器
424	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	2㎜以下の暗褐色粒	墨書土器
425	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデのあとミガキ	回転ナデ	にぶい赤褐	黒	1㎜以下の赤褐色・白色粒	墨書土器 黒色土器（内黒）
426	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐	明赤褐	1㎜弱の褐色粒	墨書土器
427	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐	明赤褐	ガラス成分 微細白色粒	墨書土器
428	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	1㎜以下の明褐色粒 微細黒色粒	墨書土器
429	土師器	坏 口縁部	表採	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細赤褐色粒	墨書土器
430	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層				回転ナデ（風化気味）	回転ナデ（風化気味）	浅黄橙	浅黄橙	微細黒色粒	墨書土器
431	土師器	坏 口縁部～体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細な黒色・赤褐色粒	墨書土器
432	土師器	高台付埦 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	3㎜大の黄橙色粒	墨書土器 「（山）水」
433	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	5㎜以下の赤褐色粒	墨書土器 「（山）水」
434	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜前後の赤褐色粒 1㎜大の灰白色粒	墨書土器 「（山）水」
435	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデのあとミガキ	浅黄橙	にぶい黄橙	角閃石粒 1㎜大の暗褐色粒	墨書土器「東」
436	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の褐色粒	墨書土器「東」
437	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1㎜以下の白色粒	墨書土器「東」
438	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	1㎜以下の赤褐色粒	墨書土器「東」
439	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜大の褐色粒	墨書土器「東」
440	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	2㎜大の灰黄色粒 微細白色粒	墨書土器「東」
441	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	0.5～2㎜大の明褐色粒	墨書土器 「水」か
442	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデのあとミガキ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	2㎜大の赤褐色粒	墨書土器「東」
443	土師器	坏 口縁部～体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	にぶい橙	5㎜弱の暗赤褐色粒	墨書土器
444	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細白色粒	墨書土器
445	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ（やや風化気味）	回転ナデ（やや風化気味）	浅黄橙	浅黄橙	1㎜前後の赤褐色粒	墨書土器「本」 もしくは「奉」か
446	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	ミガキ	橙	黒	1～5㎜の赤褐色粒	墨書土器 黒色土器（内黒）
447	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜大の赤褐色粒	墨書土器
448	土師器	埦 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐色	橙	2㎜大のにぶい赤褐色・黒色粒	墨書土器
449	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の暗赤褐色粒	墨書土器
450	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	4㎜大の灰白色粒 微細褐色粒	墨書土器
451	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜大の明褐色粒	墨書土器
452	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ（風化気味）	回転ナデ	橙	にぶい赤褐	微細明褐色粒	墨書土器
453	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	きめこまやか 含有物少	墨書土器
454	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細明褐色粒	墨書土器
455	土師器	坏 体部下位	B-SE1	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤橙	にぶい黄褐	1㎜以下の褐色粒	墨書土器
456	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	1㎜以下の暗褐色粒	墨書土器
457	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	含有物少	墨書土器
458	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ（風化気味）	灰褐	明赤褐	微細白色粒	墨書土器
459	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	微細な明褐色・黒色粒	墨書土器
460	土師器	坏 体部	表採	—	—	—	回転ナデ（風化著しい）	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細褐色粒 2㎜大の褐灰色粒	墨書土器
461	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	含有物少	墨書土器
462	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ（風化著しい）	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の褐色粒	墨書土器
463	土師器	坏 体部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	2㎜以下の赤褐色粒	墨書土器
464	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細黒色粒	墨書土器
465	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	—	5.8	—	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の茶褐色・灰色粒	墨書土器
466	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	—	6.7	—	回転ナデ　ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	浅黄橙	にぶい橙	にぶい赤褐色粒	墨書土器
467	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	—	5.3	—	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	橙	橙	1㎜以下の黒色粒	墨書土器 「（山）水」
468	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	—	7.1	—	回転ナデ　ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	橙	にぶい橙	含有物少	墨書土器 「水」か
469	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	—	—	—	回転ナデ　ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下のにぶい赤褐色粒	墨書土器 「山」か
470	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	—	6.2	—	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ガラス成分 微細赤褐色粒	墨書土器
471	土師器	坏 体部中位～底部	B-SB2-SH9	—	(6.0)	—	回転ナデ　ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の黄橙粒	墨書土器
472	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	—	(5.8)	—	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	含有物少 微細赤褐色粒	墨書土器
473	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	—	5.4	—	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	ガラス質の透明微細粒	墨書土器

第22表　遺物観察表（古代・中世 6/8）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量（cm）※（）推定値 口径	底径	器高	調整・技法等 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
474	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa 層	－	7.1	－	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4㎜大の褐色粒	墨書土器 「（山）水」
475	土師器	高台付埦 体部～底部	Ⅲa 層	－	8.0	－	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	4㎜大のにぶい褐色粒 2㎜大の暗灰色粒	墨書土器「#」
476	須恵器	甕 口縁部～胴部	Ⅲa 層	(39.6)	－	－	ナデ　平行タタキ	ナデ 平行当て具痕	灰	灰	精良 0.8㎜以下の黒色粒	
477	須恵器	甕 口縁部～底部	Ⅲa 層	(17.6)	－	50.8	ナデ　平行タタキ	ナデ　同心円当て具痕 平行当て具痕	黄灰 灰白	黄灰 灰白	3㎜以下の黒色粒、まれに5㎜大の黒色粒、1㎜以下の白色粒	
478	須恵器	甕 口縁部～胴部	Ⅲa 層	(17.8)	－	－	ナデ　灰かぶり 平行タタキ	ナデ　灰かぶり　同心円当て具痕 平行当て具痕	黄灰 黒褐	黄灰	精良、3㎜以下の黒色鈍光沢・白色不透明・橙色粒	
479	須恵器	甕 胴部	Ⅲa 層	－	－	－	格子目タタキ　ナデ	ナデ　同心円当て具痕 平行当て具痕	灰白	灰白	精良	
480	須恵器	甕 胴部	Ⅲa 層	－	(13.8)	－	平行タタキ ヨコナデ	背骨状当て具痕 ナデ	灰　灰白	灰黄	微細な黒色・灰色・灰褐色粒	
481	須恵器	甕 口縁部～底部	Ⅲa 層	(21.2)	－	－	ヨコナデ　ナデ 平行タタキ　灰かぶり	ヨコナデ　ナデ　平行当て具痕 同心円当て具痕	暗灰 灰白	灰　灰白	2㎜以下の灰色・黒色粒	
482	須恵器	甕 口縁部～底部	Ⅲa 層	(21.3)	－	－	ヨコナデ　ナデ 平行タタキ　灰かぶり	ヨコナデ　ナデ　平行当て具痕 同心円当て具痕	暗灰 灰白	灰　灰白	3㎜以下の灰色・黒色粒	481と同一個体
483	須恵器	甕 口縁部～胴部	Ⅲa 層	(11.6)	－	－	ヨコナデ　平行タタキ スス状黒色物付着	ヨコナデ　ナデ 魚骨状当て具痕　スス付着	灰 灰黄褐	灰白 黄灰	微細な黒色・灰色・褐色・光沢粒	
484	須恵器	甕 口縁部～胴部	Ⅲa 層	(17.6)	－	－	ヨコナデ　粗いナデ 平行タタキ　灰かぶり	ヨコナデ　灰かぶり 同心円当て具痕　格子目当て具痕	にぶい黄褐 褐灰	黄灰 灰黄	精良	
485	須恵器	甕 口縁部	Ⅲa 層	(18.1)	－	－	ヨコナデ　ナデ 灰かぶり	ヨコナデ　ナデ	暗灰黄 黄灰	灰	微細～1.5㎜の黒色・灰色・灰白色粒、微細光沢粒	
486	須恵器	甕 口縁部	Ⅲa 層	(18.3)	－	－	回転ナデ	ヨコナデ　ナデ	灰	灰	2㎜以下の黒色粒 微細光沢粒	
487	須恵器	甕 口縁部～肩部	Ⅲa 層	－	－	－	ヨコナデ　ナデ 平行タタキ	ヨコナデ　ナデ 同心円当て具痕後	オリーブ黒 灰	灰白　灰	1㎜以下の灰色・白色粒	
488	須恵器	甕 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	ナデ　ヨコナデ	ナデ　ヨコナデ	灰白	灰白	精良	
489	須恵器	甕 口縁部	Ⅲa 層	(20.3)	－	－	ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ	橙　灰赤	赤灰	1㎜以下の黒色・灰色・白色粒	
490	須恵器	壺 頸部～底部	Ⅲa 層		13.2		回転ナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ 灰かぶり	オリーブ灰 灰オリーブ	オリーブ灰	精良 2㎜以下の灰色・黒色砂粒	
491	須恵器	壺 胴部	Ⅲa 層	－	－	－	ナデ	ナデ　指オサエ	黄灰 灰白	黄灰	微細な黒色・灰白色粒 3㎜以下の灰褐色粒	
492	須恵器	小型壺 口縁部～底部	Ⅲa 層	(5.1)	(7.6)	13.4	回転ナデ ヨコナデ　ナデ	指オサエ　ナデ	灰黄 黄灰	黄灰	精良、4㎜以下の黒色・黒色鈍光沢・にぶい黄橙粒	
493	須恵器	小型壺 頸部～底部	Ⅲa 層	－	6.6	－	ヨコナデ　ナデ	ナデ	灰 にぶい橙	灰	3㎜以下の茶色粒 2㎜以下の黒色粒	
494	須恵器	壺 口縁部	Ⅲa 層	(9.1)	－	－	回転ナデ ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ 灰かぶり	灰	灰	精良 微細黒色粒	
495	須恵器	壺 口縁部	Ⅲa 層	(9.3)	－	－	ヨコナデ　ナデ 回転ナデ　灰かぶり	ヨコナデ　ナデ 灰かぶり	灰白　灰	灰白　灰	1㎜以下の灰白色粒、微細光沢粒 2㎜以下の灰黄色・灰色粒	
496	須恵器	壺 口縁部	Ⅲa 層	10.3	－	－	ヨコナデ　ナデ 回転ナデ　灰かぶり	ナデ	灰　灰白	灰	1㎜以下の灰白色粒、微細光沢粒 2㎜以下の黒色粒	
497	須恵器	壺 口縁部	Ⅲa 層	(13.8)	－	－	ヨコナデ　ナデ 回転ナデ　灰かぶり	ヨコナデ　ナデ 灰かぶり	灰褐 灰黄	にぶい黄褐 灰黄	微細な灰白色粒	
498	須恵器	壺 口縁部	Ⅲa 層	(13.8)	－	－	ヨコナデ　ナデ 回転ナデ　灰かぶり	ヨコナデ　ナデ 灰かぶり	黄灰	灰	1㎜以下の黒色・灰白色粒	
499	須恵器	壺 口縁部	Ⅲa 層	(13.5)	－	－	回転ナデ ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ 灰かぶり	灰	灰	微細な灰白色・灰色粒	
500	須恵器	壺 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ ナデ　ヨコナデ	回転ナデ　ヨコナデ ナデ　灰かぶり	灰	灰	精良 微細～1㎜の灰白色・黒色・光沢粒	
501	須恵器	甕 低部	Ⅲa 層	－	(13.8)	－	平行タタキ　ヨコナデ	背骨状当て具痕 ナデ	灰　灰白	灰黄	微細な黒色・灰色・灰褐色粒	
502	須恵器	壺 底部	Ⅲa 層	－	(11.4)	－	ナデ ヘラ切りのあと粗いナデ	ナデ　ヨコナデ	灰白	灰白	精良 微細粒	
503	須恵器	横瓶 頸部～胴部下位	Ⅲa 層	－	－	－	格子目タタキ 灰かぶり	ヨコナデ　ナデ 指オサエ	灰黄褐 灰	灰	2～4㎜の灰色・黒褐色粒、微細光沢粒、微細～1㎜の灰色・灰白色粒	
504	須恵器	坏 口縁部	Ⅲa 層	(16.2)	－	－	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	灰	灰	3～5㎜の灰白色粒 微細な灰白色・黒色粒	
505	須恵器	埦 底部	Ⅲa 層	－	(5.4)	－	回転ナデ　糸切り底	回転ナデ	灰	灰	精良 1㎜の白色粒	東播系
506	須恵器	捏鉢 口縁部～底部	Ⅲa 層	(34.7)	(12.6)	－	回転ナデ　ナデ 糸切り底	回転ナデ　粗いナデ	黄灰	黄灰	1～2㎜の白色粒	東播系
507	須恵器	捏鉢 口縁部	表採	－	－	－	回転ナデ　灰かぶり	回転ナデ	灰	灰	1～4㎜白色粒	東播系
508	須恵器	捏鉢 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　灰かぶり	回転ナデ	灰	灰	微細白色粒	東播系
509	須恵器	捏鉢 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　沈線	回転ナデ	灰	灰	微細白色粒	東播系
510	須恵器	捏鉢 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　沈線	回転ナデ	灰	灰	1～3㎜の白色粒	東播系
511	須恵器	捏鉢 口縁部～体部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	1～3㎜の白色粒	東播系
512	須恵器	捏鉢 口縁部～体部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　粗いナデ	回転ナデ　粗いナデ	灰	灰	1㎜の黒色・白色粒	東播系
513	須恵器	捏鉢 口縁部～体部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　粗いナデ	回転ナデ　ナデ	灰	灰	精良	東播系
514	須恵器	捏鉢 口縁部～体部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ	粗いナデ（風化著しい）	灰黄	灰黄	1～3㎜の白色・灰色粒	東播系
515	須恵器	捏鉢 口縁部～体部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ　粗いナデ	灰	灰	精良	東播系
516	須恵器	捏鉢 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ	粗いナデ　ハケメ	灰	灰	微細白色粒	東播系
517	須恵器	捏鉢 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　指おさえ	回転ナデ	灰	灰	微細白色粒	東播系 片口あり
518	須恵器	捏鉢 口縁部	Ⅲa 層	(27.3)	－	－	回転ナデ　灰かぶり	回転ナデ	灰	灰黄	灰白色・白色微粒	東播系
519	須恵器	捏鉢 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　ナデ 灰かぶり	ナデ	灰	灰	微細白色粒	東播系 片口あり
520	緑釉陶器	碗 口縁部～底部	Ⅲa 層	(13.3)	(7.5)	4.95	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	にぶい黄橙	オリーブ	精良	緑釉
521	緑釉陶器	碗 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良	緑釉
522	緑釉陶器	碗 口縁部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	浅黄	浅黄	精良	緑釉
523	緑釉陶器	皿 口縁部	Ⅲa 層	(11.4)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	オリーブ	オリーブ	精良	緑釉
524	緑釉陶器	碗 底部	Ⅲa 層	－	(6.5)	－	回転ナデ　回転ケズリ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	緑釉
525	緑釉陶器	碗 底部	Ⅲa 層	－	(7.2)	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	オリーブ にぶい黄橙	オリーブ	精良 微細白色粒	緑釉 軟陶
526	陶器	碗 口縁部	Ⅲa 層	(13.7)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良 微細黒色粒	灰釉
527	陶器	碗 底部	Ⅲa 層	－	(7.3)	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ 施釉　露胎	灰黄	灰黄	0.5～1㎜の黒色粒	灰釉
528	陶器	天目茶碗 体部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	赤黒	赤黒	精良	瀬戸天目
529	陶器	壺 口縁部	B-SE4	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	暗オリーブ	暗オリーブ	精良	褐釉陶器
530	須恵器	蓋 肩部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ケズリのあと回転ナデ 灰かぶり　界線（沈線）	回転ナデ　指おさえ	黒褐	にぶい赤褐	精良	
531	白磁	碗 体部～底部	Ⅲa 層	－	(5.9)	－	回転ナデ　施釉　露胎 施釉のあと焼成前ケズリ（底部）	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
532	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa 層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
533	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa 層	(16.0)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	

第23表　遺物観察表（古代・中世 7/8）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量（cm）※（）推定値 口径	底径	器高	調整・技法等 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
534	白磁	碗 口縁部～底部	Ⅲa層	(15.3)	(5.7)	6.7	回転ナデ 施釉 露胎	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
535	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(15.8)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
536	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(16.2)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
537	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(15.8)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
538	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(14.7)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
539	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(16.1)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
540	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(15.2)	－	－	回転ナデ 施釉 露胎 融着痕	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
541	白磁	碗 口縁部～底部	Ⅲa層	(14.2)	(5.6)	5.5	回転ナデ 施釉 露胎	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
542	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(15.4)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
543	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(14.8)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
544	白磁	碗 口縁部	近-pit	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
545	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
546	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
547	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
548	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(15.0)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
549	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
550	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層				回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
551	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
552	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
553	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
554	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
555	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
556	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
557	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
558	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
559	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
560	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
561	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
562	白磁	碗 体部～底部	Ⅲa層	－	(7.4)	－	回転ナデ 施釉 露胎 焼台痕（剥離）	回転ナデ 施釉 焼台痕（融着）	灰白	灰白	精良	
563	白磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(6.4)	－	回転ナデ 施釉 露胎	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
564	白磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(7.6)	－	回転ナデ 露胎	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
565	白磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(7.5)	－	回転ナデ 施釉 露胎	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
566	白磁	碗 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.2)	－	回転ナデ 施釉 露胎	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
567	白磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(7.0)	－	回転ナデ 施釉 露胎	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良 微細黒色粒	
568	白磁	碗 底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉 露胎	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
569	白磁	碗 体部～底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 露胎	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
570	白磁	碗 口縁部～底部	Ⅲa層	(14.1)	(5.5)	7.2	回転ナデ ケズリ 施釉 露胎	回転ナデ 施釉 圏線	灰白	灰白	精良 微細黒色粒	
571	白磁	碗 口縁部～底部	Ⅲa層	(15.2)	－	－	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ケズリ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
572	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(15.9)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
573	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
574	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
575	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
576	白磁	碗 口縁部	近世pit	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
577	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良 微細黒色粒	
578	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	(15.8)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
579	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	
580	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
581	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	中114と同一個体
582	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
583	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	中113と同一個体
584	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	(14.4)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
585	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
586	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
587	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
588	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
589	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
590	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
591	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	
592	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	精良	
593	白磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉 口禿	回転ナデ 施釉	灰白	灰白	精良	

第24表　遺物観察表（古代・中世 8/8）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量（cm）※（）推定値 口径	底径	器高	調整・技法等 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
594	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	(18.5)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
595	白磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
596	白磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(6.0)	－	回転ナデ　施釉 露胎　高台	回転ナデ　施釉	浅黄 灰白	浅黄	精良	
597	白磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(6.5)	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
598	白磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(5.2)	－	回転ナデ　施釉 露胎　高台	回転ナデ 施釉　櫛描き	浅黄 灰黄	浅黄	精良	
599	白磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(6.2)	－	回転ナデ　施釉　釉剥ぎ 露胎　砂目　高台	回転ナデ 施釉　砂目	灰オリーブ 灰	灰オリーブ	精良	
600	白磁	Ⅲ 口縁部～底部	Ⅲa層	(11.3)	(5.3)	3.2	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
601	白磁	Ⅲ 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
602	白磁	Ⅲ 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
603	白磁	Ⅲ 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
604	白磁	Ⅲ 口縁部～体部	Ⅲa層	(10.4)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
605	白磁	Ⅲ 口縁部～体部	Ⅲa層	(10.6)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
606	白磁	Ⅲ 口縁部～体部	Ⅲa層	(10.8)	－	－	回転ナデ 施釉（貫入）	回転ナデ 施釉（貫入）	灰白	灰白	精良	
607	白磁	Ⅲ 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
608	白磁	Ⅲ 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
609	白磁	Ⅲ 底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
610	白磁	Ⅲ 底部	Ⅲa層	－	(4.3)	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
611	白磁	Ⅲ 口縁部～底部	Ⅲa層	(10.0)	(3.0)	2.3	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
612	白磁	Ⅲ 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.2)	(2.9)	2.4	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰黄	灰黄	精良	
613	白磁	Ⅲ 口縁部～体部	Ⅲa層	(8.3)	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
614	白磁	Ⅲ 口縁部～底部	Ⅲa層	(10.3)	(3.9)	2.3	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
615	白磁	Ⅲ 体部～底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
616	白磁	Ⅲ 口縁部～底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
617	白磁	Ⅲ 口縁部～底部	近世pit	(10.4)	(5.5)	2.5	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉 蛇ノ目　釉剥ぎ	灰白	灰白	精良	
618	白磁	合子（身） 口縁部～底部	Ⅲa層	(4.6)	(4.5)	2.5	型作り　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
619	白磁	合子（身） 口縁部～体部	Ⅲa層	(4.4)	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
620	白磁	合子（身） 体部～底部	表採	－	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
621	青磁	碗 口縁部～底部	Ⅲa層	(14.7)	(5.0)	4.8	回転ナデ　施釉（貫入） 目跡	回転ナデ 施釉（貫入）	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
622	青磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(14.6)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
623	青磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(14.3)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	精良	越州窯系
624	青磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(13.9)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
625	青磁	碗 口縁部	Ⅲa層	(15.2)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
626	青磁	碗 口縁部	Ⅲa層	(15.0)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
627	青磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
628	青磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(13.7)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
629	青磁	碗 体部～底部	Ⅲa層	－	(5.2)	－	回転ナデ 施釉　目跡	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
630	青磁	碗 体部～底部	Ⅲa層	－	(5.8)	－	回転ナデ　施釉　釉剥ぎ 蛇ノ目高台	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
631	青磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(5.6)	－	回転ナデ　施釉　焼台痕 蛇ノ目高台	回転ナデ　施釉	浅黄	浅黄	精良	越州窯系
632	青磁	碗 体部～底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉　釉剥ぎ 蛇ノ目高台	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
633	青磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	(16.2)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	同安窯系
634	青磁	Ⅲ 底部	SE2	－	(4.3)	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉 鋸歯状櫛点描文　ヘラ切り文	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	同安窯系
635	白磁	Ⅲ 底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	同安窯系
636	青磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉（貫入）	回転ナデ 施釉（貫入）	灰	灰	精良	
637	青磁	碗 体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	
638	青磁	碗 体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	龍泉窯系
639	青磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	龍泉窯系
640	青磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	龍泉窯系
641	青磁	碗 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	龍泉窯系
642	青磁	碗 底部	Ⅲa層	－	(5.2)	－	回転ナデ　施釉 釉剥ぎ　露胎	回転ナデ　施釉	明オリーブ灰	明オリーブ灰	精良	龍泉窯系
643	青磁	碗 体部～底部	Ⅲa層	－	(5.4)	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	龍泉窯系
644	青磁	碗 体部～底部	Ⅲa層	－	5.9	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉 露胎　印花　焼台痕	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	龍泉窯系
645	青磁	盤 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	龍泉窯系
646	青花	小坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(6.0)	(2.3)	3.3	回転ナデ　施釉 露胎　精釉	回転ナデ　施釉	明緑灰	明緑灰	精良	
647	青花	Ⅲ 底部	攪乱	－	－	－	回転ナデ 施釉　砂目	回転ナデ　施釉	明青灰	明青灰	精良	

第25表　遺物観察表（近世）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量（cm）口径	法量（cm）底径	法量（cm）器高	調整・技法等 外面	調整・技法等 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
690	陶器	碗 口縁部～底部	SC3	(11.3)	4.6	7.25	回転ナデ　施釉 露胎　ナデ	回転ナデ　施釉	明緑灰 にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良	内野山窯
691	陶器	香炉 口縁部～体部	SC3	(10.0)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ 施釉　露胎	にぶい黄褐	にぶい黄褐 橙	精良	
692	陶器	香炉 口縁部～体部	SC3	(11.3)	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　露胎	明赤褐 橙	橙	精良	
693	白磁	碗 口縁部～底部	SC2	(17.0)	(7.8)	6.7	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
694	陶器	甕 底部	SC1	－	20.4	－	ナデ　施釉	ナデ	黒褐	灰褐	2㎜以下の白色粒	薩摩
695	陶器	擂鉢 口縁部～底部	SC2	(31.8)	(11.7)	14.2	ナデ　施釉　露胎 突帯　砂目　胎土目	回転ナデ 施釉　擂目	オリーブ黒	黒褐	1㎜以下の白色粒	薩摩
696	陶器	擂鉢 口縁部～体部	SC2	(32.7)	－	－	ナデ　施釉 貝目　突帯	回転ナデ　施釉 露胎　擂目	黒褐 にぶい赤褐	黒褐 にぶい赤褐	精良	薩摩
697	陶器	鉢 口縁部～胴部	SC2	(33.0)	－	－	回転ナデ 施釉　貝目	回転ナデ　施釉	褐灰 灰白	褐灰 灰白	1㎜以下の灰白色粒	薩摩
698	陶器	鉢 口縁部～底部	SC3	(30.2)	(22.0)	9.85	回転ナデ　ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	暗赤褐	暗赤褐	2㎜以下の明褐灰色・にぶい赤褐色・淡赤橙色・橙色粒	
699	陶器	甕 口縁部～体部	SC3	(37.4)	－	－	ナデ　施釉　露胎 貝目　突帯（4条）	ナデ　施釉	黒褐 暗赤褐	褐灰	精良	
700	陶器	焙烙 底部	SC3	－	(18.8)	－	回転ナデ　ナデ スス付着	ナデ　スス付着	灰黄褐 褐灰	にぶい橙 褐灰	2㎜以下の褐灰色・灰白色粒 微細な黒色・無色透明光沢粒	
701	陶器	擂鉢 体部	SC4	－	－	－	回転ナデ　施釉 露胎　突帯	回転ナデ　ナデ 施釉　擂目	黒褐 褐灰	黒褐 褐灰	微細無色透明光沢粒、1.5㎜以下の灰白色・浅黄橙色・黒色粒	薩摩
703	陶器	碗 口縁部～底部	I層	9.6	4.35	6.4	回転ナデ 施釉（貫入）　露胎	回転ナデ 施釉（貫入）	浅黄 灰白	浅黄	精良	京焼風陶器
704	陶器	碗 口縁部～底部	I層	11.15	4.4	5.0	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉 砂目　蛇ノ目釉剥ぎ	黒褐 にぶい橙	黒褐	精良	薩摩
705	陶器	碗 口縁部～底部	I層	(11.0)	5.0	6.05	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ 施釉　砂目	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	
706	陶器	碗 底部	表採	－	4.65	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉 蛇の目釉剥ぎ	灰黄褐 明赤褐	灰黄褐 明赤褐	微細な透明光沢・白色・灰色・黒色粒	
707	陶器	碗 底部	表採	－	5.0	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉 蛇の目釉剥ぎ	褐灰　橙	褐灰　橙	1㎜以下の黒色・茶色・白色粒	
708	陶器	碗 口縁部～体部	I層	(7.6)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	唐津
709	陶器	碗 底部	I層	－	(3.9)	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
710	陶器	皿 体部～底部	I層	－	4.7	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉 精釉　蛇の目釉剥ぎ	オリーブ黄 灰	灰オリーブ 灰白	精良	内野山窯
711	陶器	皿 底部	I層	－	9.85	－	回転ナデ 施釉（貫入）　釉剥ぎ	回転ナデ 施釉（貫入）	浅黄 灰黄	浅黄 灰黄	微細黒色粒	京焼風陶器
712	陶器	鉢 口縁部～体部	I層	(12.1)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	浅黄	浅黄	1㎜以下の黄褐色・暗褐色粒	
713	陶器	鉢 口縁部～体部	攪乱	(14.5)	－	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	暗赤灰 にぶい赤褐	暗赤灰	精良	
714	陶器	手捏皿（坏） 口縁部～底部	I層	11.0	6.0	3.9	ナデ　指オサエ	ナデ　指オサエ	にぶい赤褐	暗赤褐	2㎜以下の灰色粒、1㎜以下の黒色・無色透明光沢鉱物粒	
715	陶器	土瓶 注口	I層	－	－	－	ナデ　施釉	ナデ　施釉	暗オリーブ 浅黄	極暗赤褐	1㎜以下の半透明鈍光沢灰黄色粒	
716	陶器	擂鉢 口縁部～体部	攪乱	－	(12.9)	－	回転ナデ（風化気味） 貼付突帯	回転ナデ 擂目　指頭痕	にぶい赤褐 橙	にぶい赤褐 橙	2㎜以下の灰白色粒	備前
717	陶器	甕 口縁部～肩部	I層	(29.5)	－	－	ナデ　施釉　露胎 貝目　条線（3条）	ナデ　施釉	極暗褐	灰白	3㎜以下の白色・にぶい黄橙色・にぶい赤褐色・灰白色粒	
718	陶器	甕 胴部	I層	－	－	－	ナデ　施釉	ナデ　施釉	オリーブ黒 灰褐	オリーブ黒 灰褐	精良	
719	陶器	甕 肩部～胴部	I層	－	－	－	ナデ　工具ナデ 施釉　突帯	ナデのあとナデ 施釉	暗灰黄	暗灰黄	1㎜以下の白色粒	
720	磁器	碗 口縁部～底部	I層	10.2	3.9	6.0	回転ナデ 施釉（貫入）　露胎	回転ナデ 施釉（貫入）	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
721	磁器	碗 口縁部～底部	I層	10.4	4.3	5.8	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系　染付
722	磁器	碗 口縁部～底部	I層	9.6	(4.0)	5.8	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系　染付
723	磁器	碗 口縁部～底部	I層	(10.7)	(3.7)	5.75	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
724	磁器	碗 口縁部～体部	I層	(10.8)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉 蛇の目釉剥ぎ	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系　染付
725	磁器	碗 底部	I層	－	(4.7)	－	回転ナデ 施釉　砂目	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
726	磁器	広東碗 口縁部～底部	I層	(10.5)	(5.8)	6.05	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
727	磁器	筒形碗 口縁部～底部	I層	7.3	3.45	6.0	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
728	磁器	筒形碗 口縁部～体部	I層	(8.6)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
729	磁器	筒形碗 口縁部～底部	I層	(4.6)	(4.1)	4.25	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
730	陶器	猪口 口縁部～底部	I層	(5.7)	(3.6)	4.3	回転ナデ 施釉　砂目	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
731	磁器	小坏 口縁部～底部	I層	(6.4)	(2.7)	4.65	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
732	磁器	皿 口縁部～体部	I層	－	－	－	回転ナデ 施釉（一部貫入）	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
733	磁器	皿 底部	I層	－	(12.6)	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
734	磁器	皿 口縁部～底部	I層	(12.6)	(7.3)	3.65	回転ナデ　施釉（貫入） 露胎　砂目	回転ナデ 施釉（貫入）	灰白	灰白	精良	肥前系　染付
735	磁器	皿 口縁部～底部	I層	－	－	－	回転ナデ 施釉　砂目	回転ナデ　施釉	明緑灰	明緑灰	精良	肥前系　染付
736	磁器	碗 口縁部	攪乱	－	－	－	回転ナデ 施釉　型紙摺り	回転ナデ　施釉 型紙摺り	灰白	灰白	精良	型紙摺
737	磁器	皿 底部	I層	－	4.2	－	回転ナデ　施釉 露胎　砂目	回転ナデ　施釉 蛇の目釉剥ぎ	灰白	灰白	精良	

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　土器圧痕について

本遺跡で出土した土器の中から植物種子や動物遺存体と考えられる土器圧痕を12点掲載した。以下、作業記録と観察の結果については別表を参照されたい。

第１表　土器圧痕探査の作業記録

作業項目	作業の記録
選別と観察	整理作業（水洗・注記・接合）時に圧痕の可能性のあるものを肉眼観察で選別した。はじめ凹みのある土器について整理作業員に注意を払うよう指示し、可能性のある土器片を抽出した。その後、胎土鉱物の観察と並行して、それらを実体顕微鏡（Nikon・ネイチャースコープ・ファーブル）により20倍の倍率で観察し識別した。観察の結果、岩石や火山灰等の含有物が抜けた落ちたものではないと想定した圧痕を抽出した。
観察と記録	抽出した12点の土器圧痕について観察と記録を行った。観察は、主に10～63倍まで行える実体顕微鏡（Nikon pxf）を用い、記録は顕微鏡にＤ１Ｘデジタルカメラを装着させ、NikonのCamera Contorol Proを使用して記録を行った。その後、資料をレプリカ法により電子顕微鏡（HITACHI Ｓ-3000Ｎ）を用いて観察と記録を行った。 なお、詳細な観察状況は観察表を参照されたい。

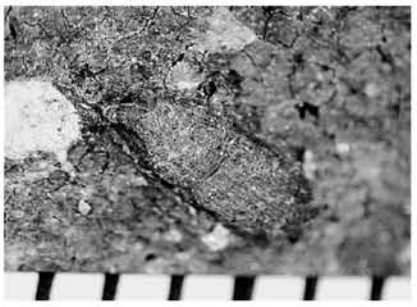
第２表　土器圧痕観察表

区	No.	時期	器種	部位	圧痕	圧痕観察記録	同定結果
A区	8	後期後半	深鉢	胴部外面		【形状】長軸3.5㎜短軸1.5㎜。長楕円形を呈し、先端にはツノのような物体の残存が観察される。全体としてヒビ割れが酷く遺存状態が悪い。特に左端部分は不明確である。前方と後方には境がある。凹が強く後方は配列をなす。 【同定根拠】ツノは吻、前方と後方の境は前胸背板と上翅との間の節、凹みは点刻と考えらる。特徴として、点刻が強く、上翅の点刻は列状にみられる。足は欠いているが、大きさ、点刻、前方に向かってやや狭まる前胸背、刺毛がない、前胸背と上翅の形状からコクゾウムシと判断した。	コクゾウムシ
	24	晩期	深鉢	胴部内面		【形状】長軸９㎜短軸3.5㎜。明確な痕跡はみられないが、長軸方向に微細な筋状の痕跡が一部観察される。 【同定根拠】形状、長軸方向に筋状の痕跡が観察されることから植物の茎と判断した。	植物の茎か
	35	晩期	浅鉢	胴部内面		【形状】長軸2.5㎜短軸0.8㎜。破損が著しく半分以下は不明瞭である。長軸方向に２条の筋があり、先端が窄まる。また、1000倍の倍率で表面に密集する円形の物体が確認された。 【同定根拠】円形の物体は植物細胞と考えられ、大きさ、２条の縦筋、形状を総合して植物種子と判断した。	種子
	40	晩期	浅鉢	底部外面		【形状】直径2.5㎜の円形の形態を呈す。高倍率でも圧痕の表面に明確な特徴は観察されなかった。 【同定根拠】形状からは円形の種子等が想定されたが、圧痕の表面に明確な特徴がないことから植物等に由来する圧痕ではなさそうである。	不明
	102	古代	甕	口縁部内面		【形状】長軸5.5㎜短軸３㎜。長楕円形を呈し、長軸方向に２本の筋があり、格子目状の圧痕が観察される。 【同定根拠】格子目は顆粒状突起と考えられ、大きさ、形状、縦筋を総合してイネと判断した。	イネ
	401	古代	甕	胴部外面		【形状】長軸６㎜短軸3.2㎜。長楕円形を呈し長軸方向に２本の筋があり、格子目状の圧痕が観察される。 【同定根拠】格子目は顆粒状突起と考えられ、大きさ、形状、縦筋を総合してイネと判断した。	イネ

区	No.	時期	器種	部位	圧痕	圧痕観察記録	同定結果
B区	7	早期	深鉢	胴部内面		【形状】長軸８㎜短軸２㎜。断面形は円形を呈し、圧痕表面の長軸方向に数条の筋が観察される。 【同定根拠】大きさ、形状、規則的に数条の筋が観察されることから植物の茎と判断した。	植物の茎
	13	後期前半	深鉢	頸部外面		【大きさ】長軸4.5㎜短軸３㎜。楕円形を呈す。高倍率でも圧痕の表面に高倍率でも圧痕の表面に明確な特徴は観察されなかった。 【同定根拠】形状からは楕円形の種子等が想定されたが、圧痕の表面に明確な特徴がないことから植物等に由来する圧痕ではなさそうである。	不明
	44	晩期	深鉢	胴部断面		【形状】長軸６㎜短軸３㎜。長方形の形態を呈し、長軸方向に数条の筋がみられる。 【同定根拠】大きさ、形状、筋状の圧痕が観察されることから木片と判断した。	木片
	57	晩期	浅鉢	口縁部外面		【形状】長軸4.2㎝短軸2.2㎝。楕円形の形状で黒色を呈す。中央部からのヒビ割れが著しい。特徴がなく遺存状況も不良であり、高倍率でも圧痕の表面に明確な特徴は観察されなかった。 【同定根拠】形状、黒色を呈し、また艶やかな状態から何らかの圧痕であるが不明であると判断した。	不明
	74	晩期	浅鉢	胴部内面		【形状】直径３㎜の円形の形態を呈す。内部に炭化物（表皮か）が残存している。表皮には、微細な凹凸が炭化した表皮の断面から観察される。 【同定根拠】該当する種子は明確でないが、直径３㎜程度の円形を呈する種子であることは間違いない。ただし、種の同定までは及ばない。	種子
	76	晩期	浅鉢	胴部外面		【形状】長軸５㎜短軸２㎜。二股に分かれている。圧痕表面の長軸方向に数条の筋が観察される。 【同定根拠】大きさ、形状、数条の筋が観察されることから植物の茎と判断した。	植物の茎

観察の結果は、植物の茎３点、種子４点、木片１点、種子状の不明圧痕２点、不明１点、コクゾウムシ１点であった。種子の内、102・401の２点は９～10世紀の籾圧痕、その他の２点は縄文晩期の資料であるが種の同定には及ばない。また、本遺跡の圧痕資料は縄文早期～中世の土師器まで存在する。つまり、粘土を使用するものであれば、全てが研究対象となる。また、県内の圧痕資料を概観すると弥生時代以降の圧痕には、イネの圧痕に偏りが見られる。これは、籾圧痕が識別しやすく意識が向き易いという探査時の問題があるものの、それだけが原因ではないだろう。今後、イネ以外の圧痕の探査とともに検討しなければならない課題の一つであり、研究の深化が期待される。

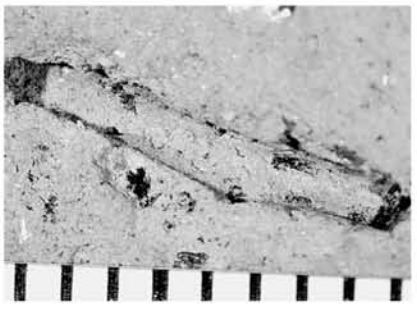
註１）レプリカ法については、福岡市埋蔵文化財センターにて事前指導を受け、柳田がレプリカ作成を宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。また、走査電子顕微鏡（SEM）の観察については、宮崎県総合農業試験場の溝辺真氏の協力の下、同試験場にて柳田が行った。なお、レプリカに使用した溶剤や手順については、福岡市埋蔵文化財センター2006「付）土器圧痕レプリカ法作業の手引き」『福岡市埋蔵文化財センター年報』第25号を参照されたい。



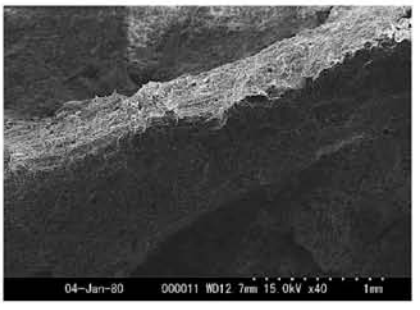
No.８（×15）

No.８（×40）

No.８（×50）

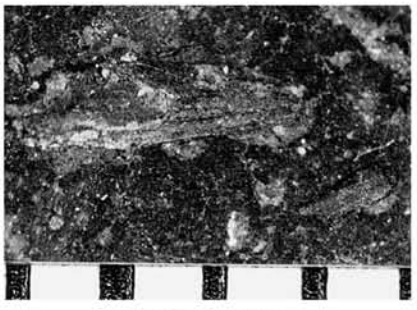


No.24（×10）

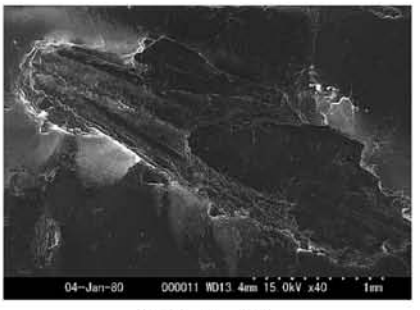


No.24（×40）

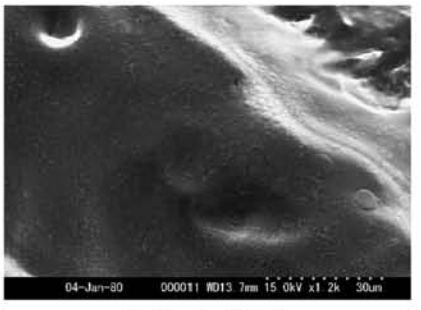
No.24（×40）



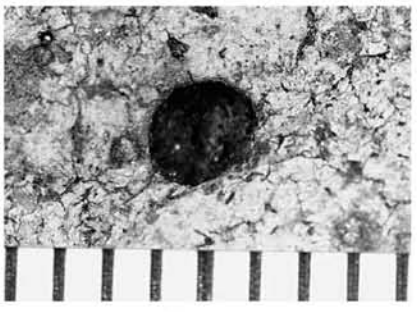
No.35（×20）



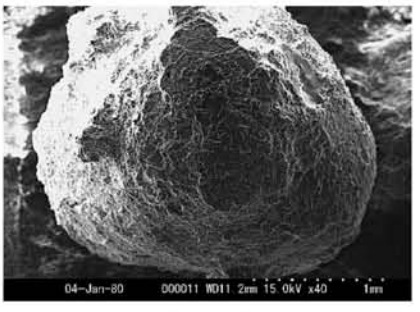
No.35（×40）



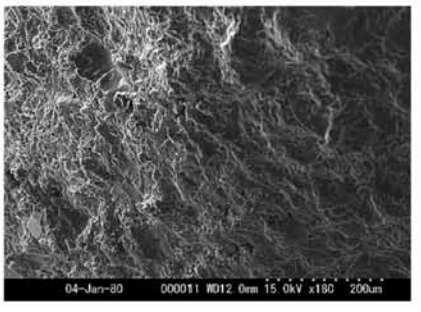
No.35（×1200）



No.40（×10）

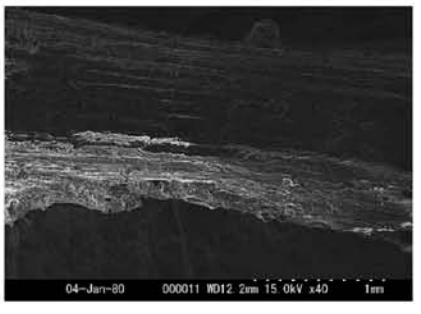


No.40（×40）

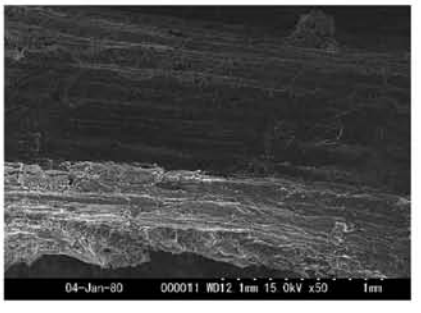


No.40（×180）

No.７（×11）

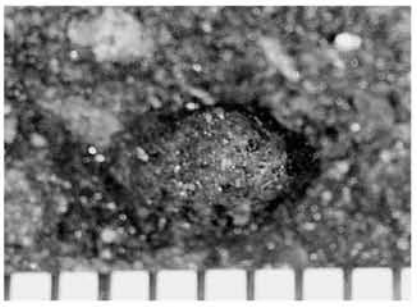


No.７（×40）

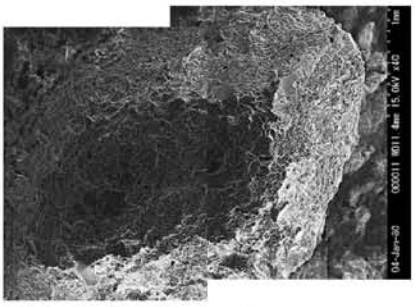


No.７（×50）

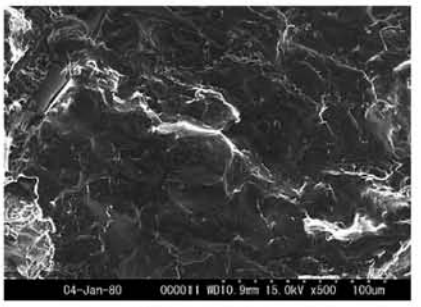
土器圧痕拡大写真１（縄文土器　Ａ区：8・24・35・40、Ｂ区：7）



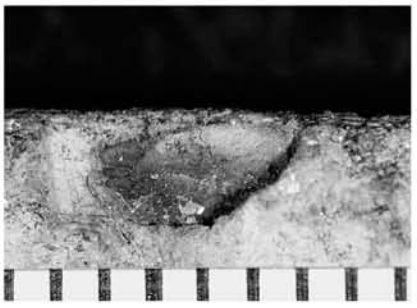
No.13（×10）



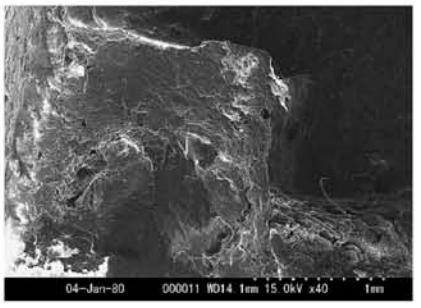
No.13（×10）



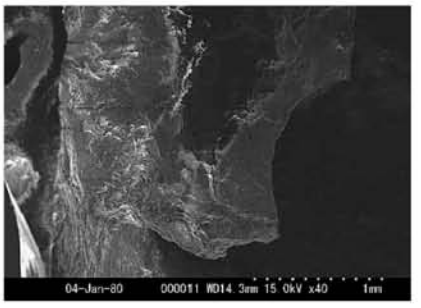
No.13（×500）



No.57（×10）

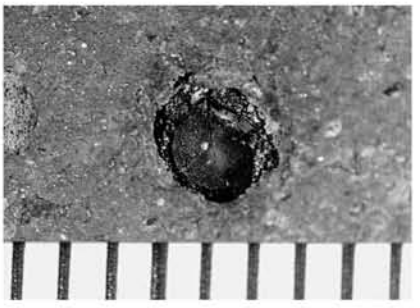


No.57（×40）



No.57（×40）

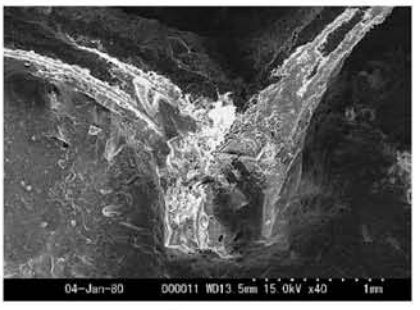
No.44（×10）



No.74（×10）

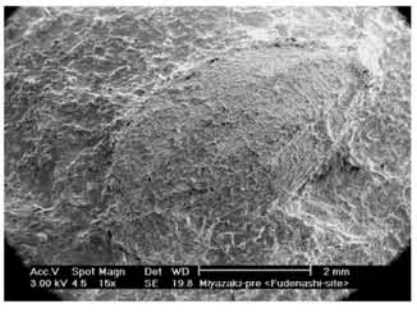
No.74（×24）

No.76（×11）

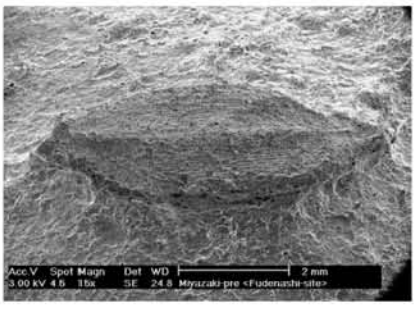


No.76（×40）

No.76（×40）



No.102（×15）



No.102（×15）

No.401（×10）

土器圧痕拡大写真２（縄文土器: Ｂ区13・44・57・74・76、古代甕：Ａ区102、Ｂ区401）

第２節　筆無遺跡Ｂ区におけるテフラおよび植物遺存体分析

株式会社　古環境研究所

土層とテフラ

１　はじめに

宮崎県域南部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、霧島、姶良、鬼界、桜島、池田湖などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物（さいせつぶつ）、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺跡の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができる。

そこで都城市筆無遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取した試料を対象としてテフラ検出分析と屈折率測定を行って、指標テフラの検出同定を試みることになった。調査分析が行われた地点は、Ｂ区（Ｄ２地点）のJ17・K16・M16グリッドの３地点および調査区北壁（第４地点）の合計４地点である。

２　土層の層序

⑴　第１地点 〈M16grid〉

第１地点では、下位より黄色砂質細粒火山灰層（層厚３㎝以上）、褐色土（層厚４㎝）、暗灰色土（層厚７㎝）、細粒の褐色軽石を少量含む黒色土（層厚17㎝，軽石の最大径３㎜）、黄色軽石混じり黒色土（層厚９㎝，軽石の最大径11㎜）、黄色軽石層（層厚28㎝，軽石の最大径19㎜，石質岩片の最大径３㎜）が認められる（図１）。

これらのうち最下位の黄色砂質細粒火山灰層については、層相から約7,300年前（暦年較正年代，以下同様）に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に同定される。また、黄色軽石層については、層相から約4,600年前に霧島火山御池火口から噴出したと考えられる霧島御池テフラ（Kr-M，町田・新井，1992，2003，奥野，1996）に同定される。

⑵　第２地点 〈K16grid〉

第２地点では、下位より暗灰褐色土（層厚17㎝以上）、黄色軽石に富む暗灰褐色土（層厚15㎝，軽石の最大径９㎜）、黄色軽石混じりでより色調が暗い暗灰褐色土（層厚18㎝，軽石の最大径５㎜）、成層したテフラ層（層厚25㎝）、わずかに灰色がかった褐色土（層厚７㎝）、暗灰褐色土（層厚９㎝）、黒色土（層厚17㎝）、黄色軽石に富む黒褐色土（層厚14㎝，軽石の最大径16㎜）が認められる（図１）。

これらのうち、暗灰褐色土中に多く含まれる黄色軽石については、層位や岩相などから、約8,000年前に桜島火山から噴出した桜島11テフラ（Sz-11，小林，1986，町田・新井，2003，桜島嫁坂軽石：早田，1997）と考えられる。また成層したテフラ層は、下部の褐色火山豆石混じり軽石層（層厚４㎝，軽石の最大径11㎜，火山豆石の最大径５㎜）と、上部の黄橙色砂質細粒火山灰層（層厚21㎝）からなる。このテフラ層は、層相からK-Ahに同定される。さらに、最上位の黒褐色土中に多く含まれている黄色軽石については、層位や岩相からKr-Mに由来すると考えられる。

⑶　第３地点 〈J17grid〉

第３地点では、下位より黄色軽石層（層厚15㎝以上，軽石の最大径12㎜）、黄色軽石に富む灰褐色土

（層厚22cm，軽石の最大径11mm）、黄色軽石を多く含む暗灰褐色土（層厚27cm，軽石の最大径５mm）、黄色軽石混じり暗灰褐色土（層厚40cm、軽石の最大径９mm）、黒灰褐色土（層厚32cm）、若干硬い暗灰褐色土（層厚17cm）、暗灰褐色土（層厚27cm）、黄灰色軽石層（層厚11cm、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径３mm）、黄灰色軽石に富む暗灰褐色土（層厚31cm、軽石の最大径８mm）が認められる（図１）。

これらのうち最下位の黄色軽石層は、層相からKr-Mに同定される。また黄灰色軽石層については、層相から1471（文明３）年に桜島火山から噴出した桜島３テフラ（Sz-3、小林、1986、町田・新井、1992、2003）と考えられる。

(4) 第４地点 〈I17grid〉

第４地点では、泥質の黒褐色土（層厚40cm以上）の上位に、成層したテフラ層（層厚25cm）が認められる。このテフラ層は、下部のかすかに成層し若干黄色がかった白色軽石層（層厚24cm，軽石の最大径９mm）と、上部のわずかに黄色がかった灰白色砂質細粒火山灰層（層厚１cm）からなる。このテフラ層は、層相からSz-3に同定される。

3 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

基本的に５cmごとに設定採取された試料のうち、第１～３地点の21点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

１）試料10ｇを秤量。

２）超音波洗浄により泥分を除去。

３）80℃で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。第１地点では、試料６から試料４にかけて、ごくわずかに灰色がかった白色の細粒軽石（最大径2.1mm）が含まれている。試料３より上位では黄白色軽石が認められるが、この軽石は上位の軽石層に多く含まれているものである。火山ガラスとしては、試料１を除くいずれの試料にも、透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスや軽石型ガラスが含まれている。この火山ガラスはとくに試料９に多い。このほか、試料８から試料７にかけては白色の軽石型ガラス、試料６から試料４にかけてはごくわずかに灰色がかった白色軽石の細粒物、試料３や試料２には黄白色軽石の細粒物である軽石型ガラスが各々認められる。

第２地点では、試料６に光沢をもつ白色軽石（最大径2.9mm）がごく少量含まれている。試料４から試料１にかけては、ごくわずかに灰色がかった白色の細粒軽石（最大径2.2mm）が少量ずつ含まれている。火山ガラスとしては、透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスや軽石型ガラスが含まれている。このほか、試料６および試料４～試料１に白色の軽石型ガラスが含まれている。

第３地点では、試料31の軽石層に黄白色軽石が多く含まれている。またこの軽石は試料５にかけて（上方にむかって）次第に減少する傾向にある。試料13および試料９には、暗褐色スコリア質細粒火山灰が含まれている。とくに試料９には、少量ながら黒褐色のスコリア粒子（最大径2.0mm）が認められる。試料１には、比較的粗粒の黄灰色軽石（最大径11.4mm）がとくに多く含まれている。

4　屈折率測定

(1)　測定試料と測定方法

第２地点の試料２に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質製，MAIOT）により屈折率測定を行った。

(2)　測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。第２地点の試料２に含まれる火山ガラスの屈折率（n）はbimodalで、1.498-1.501と1.509-1.513の値が得られた。

5　考察

第２地点の試料２に含まれる火山ガラスの多くは、火山ガラスの特徴や屈折率から、約2.6～2.9万年前に姶良カルデラから噴出した入戸火砕流堆積物（A-Ito，荒牧，1969）やそれに関係する姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，村山ほか，1993，池田ほか，1995）、およびK-Ahに由来すると考えられる。bimodalな屈折率のうち、低い値のガラスの多くがA-ItoやAT、高い値のガラスがK-Ahに由来すると考えられる。

また、この試料をはじめとして、Kr-Mの下位の土壌に含まれているごくわずかに灰色がかった白色の細粒軽石については、その岩相から約6,400年前に池田湖カルデラから噴出した池田湖テフラ（Ik，成尾・小林，1983，町田・新井，2003）に由来する可能性が高い。この層準には、角閃石も少量ながら認められる。今回は量が少なく白色軽石型ガラスのみの測定は困難であったが、ATの火山ガラスの屈折率の一部は、Ikのそれ（n：1.501-1.502，町田・新井，2003）とも重複することから、この試料に含まれる細粒の白色軽石型ガラスがIkに由来する可能性も完全には否定できない。

第３地点の試料13や試料９に含まれるスコリア粒子やスコリア質の粗粒火山灰については、霧島火山に由来する可能性が考えられる。とくに試料９に含まれるより粗粒のスコリアについては、その特徴から10～13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア（Kr-ThS，井ノ上，1988，早田，1997）と考えられる。なお最近では、このスコリアの年代を1235（嘉禎元）年とする説もある（奥野ほか，2000，町田・新井，2003）。

6　まとめ

テフラ分析の結果、下位より桜島11テフラ（Sz-11，約8,000年前：暦年較正年代，以下同様）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約7,300年前）、霧島御池テフラ（Kr-M，約4,600年前）、霧島高原スコリア（Kr-ThS，10～13世紀）、桜島３テフラ（Sz-3，1471年）が認められた。また、K-AhとKr-Mの間に池田湖テフラ（Ik，約6,400年前）の層位がある可能性も指摘された。

文献

荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物．地質雑，75，p.425-442.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による^{14}C年代．第四紀研究，34，p.377-379.

井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史．岩鉱，83，p.26-41.

小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流．文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者　荒牧重雄），p.137-163.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代．第四紀研究，26，p.79-83.
村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の^{14}C年代．地質雑，99，p.787-798.
成尾英仁・小林哲夫（1983）鹿児島県指宿地域の火山活動史－阿多火砕流以降について．日本地質学会第90年学術大会講演要旨集，p.309.
奥野　充（1996）南九州の第四紀末テフラの加速器^{14}C年代（予報）．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，Ⅶ，p.89-109.
奥野　充・福島大輔・小林哲夫（2000）南九州のテフロクロノロジー－最近10万年間のテフラ－．人類史研究，12，p.9-23.
奥野　充（2002）南九州に分布する最近約３万年間のテフラの年代学的研究．第四紀研究，41，p.311-316.
早田　勉（1997）火山灰と土壌の形成．宮崎県史通史編１，p.33-77.

表１　テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
第１地点	2	+	黄白	3,8	++	pm>bw	黄白，白，透明，淡褐，褐
	3	+	黄白	3,2	++	pm>bw	黄白，白，透明，淡褐，褐
	4	+	白	2,0	++	pm,bw	白，透明，淡褐，褐
	5	+	白	2,0	++	pm,bw	白，透明，淡褐，褐
	6	+	白	2,1	++	bw>pm	透明，淡褐，褐，白
	7	−	−	−	+++	bw>pm	透明，淡褐，褐，白
	8	−	−	−	+++	bw>pm	透明，淡褐，褐，白
	9	−	−	−	++++	bw>pm	透明，淡褐，褐
第２地点	1	+	白	2,1	++	pm,bw	白，透明，淡褐，褐
	2	+	白	2,1	++	pm,bw	白，透明，淡褐，褐
	3	+	白	2,1	++	pm,bw	白，透明，淡褐，褐
	4	+	白	2,2	++	bw>pm	透明，淡褐，褐，白
	5	−	−	−	++	bw>pm	透明，淡褐，褐
	6	+	白	2,9	++	bw>pm	透明，淡褐，褐，白
第３地点	5	+	黄白	3,1	++	pm>bw	黄白，透明，淡褐
	9	+	黄白>黒灰	3,1,2,0	++	pm>sc,bw	黄白，暗褐，透明，淡褐
	13	+	黄白	3,0	++	pm>sc,bw	黄白，暗褐，透明，淡褐
	19	+	黄白	6,6	++	pm	黄白，白
	23	++	黄白	3,8	+++	pm	黄白
	27	++	黄白，白	4,7	+++	pm	黄白，白
	31	+++	黄白，白	5,8	++++	pm	黄白，白

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，−：認められない．
最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型，sc：スコリア型

表２　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス（n）
第２地点	2	1.498-1.501，1.509-1.513

屈折率の測定は温度一定型屈折率測定装置（MAIOT）による．

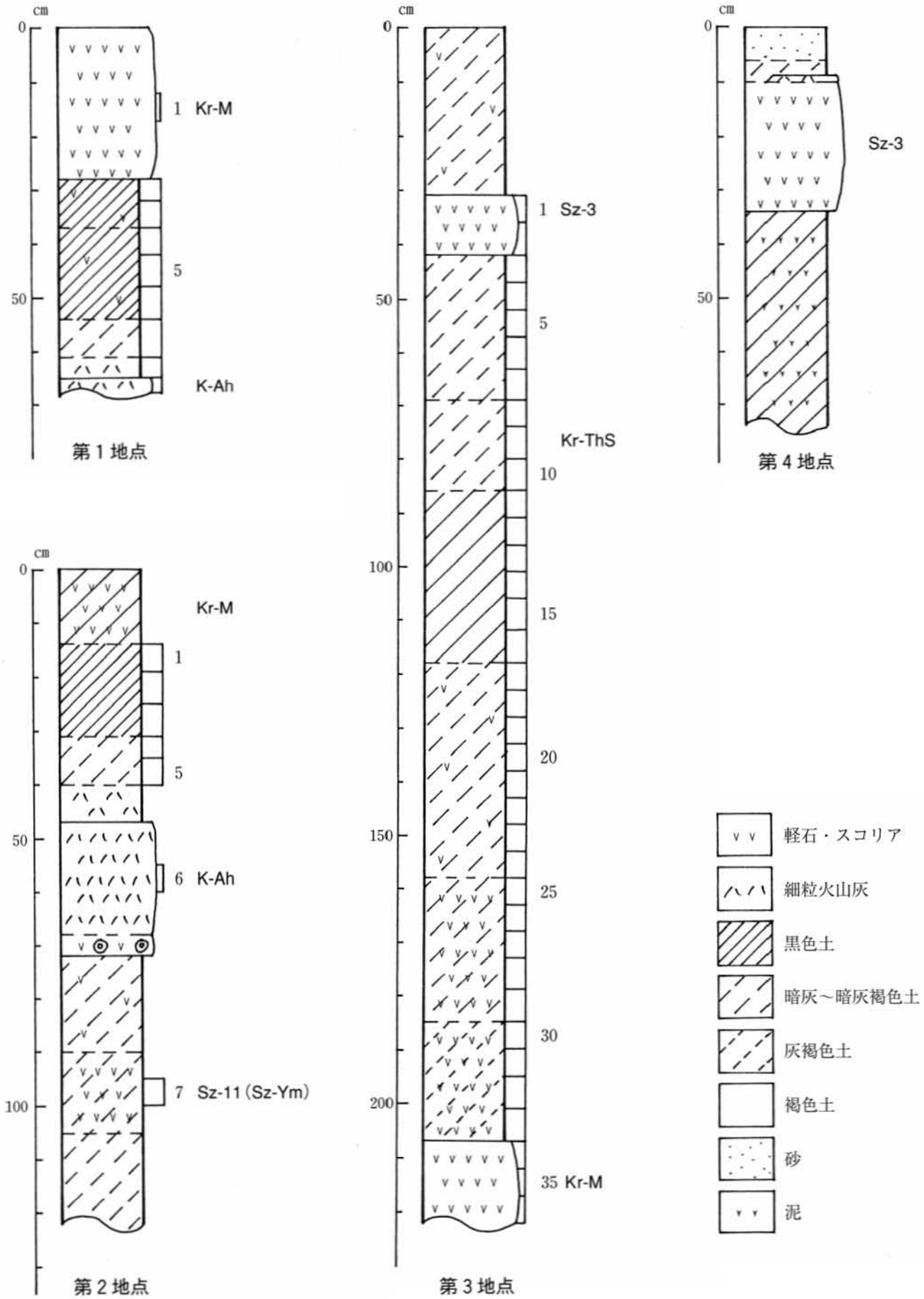


図1　土層柱状図（スケールは任意、右側の数字はテフラ分析の試料番号）

植物珪酸体分析

1　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2　試料

分析試料は、第３地点から採取された９点および第４地点から採取された１点の計10点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに対し直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加
　（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10－５ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4　分析結果

(1)　分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕
イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）
〔イネ科ータケ亜科〕
メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等
〔イネ科ーその他〕
表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等
〔樹木〕
ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1）第３地点（図１）

下位の試料33～27では、ヨシ属が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、およびコナラ属などの樹木起源も少量検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山，1999）。試料21～19では、ネザサ節型が増加しており、ヨシ属は減少している。試料13では、メダケ節型やネザサ節型が大幅に増加しており、ヨシ属はさらに減少している。また、同層準ではイネが出現している。イネの密度は3,400個/ｇと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/ｇを上回っている。試料９～３でもおおむね同様の結果であるが、ネザサ節型はしだいに減少している。イネの密度は2,800～3,500個/ｇと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、下位の試料33～27ではヨシ属が卓越しており、試料21～19ではヨシ属とネザサ節型、試料13より上位ではメダケ節型とネザサ節型が優勢となっている。

2）第４地点（図２）

Sz-3直下層（試料１）では、ネザサ節型が多量に検出され、イネ、ヨシ属、メダケ節型も比較的多く検出された。また、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A。樹木（その他）なども少量検出された。イネの密度は4,700個/ｇと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が優勢であり、イネ、メダケ節型、ネザサ節型も多くなっている。

5　植物珪酸体分析から推定される植生と環境

霧島御池テフラ（Kr-M，約4,600年前）直上層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはキビ族やメダケ属（メダケ節やネザサ節）などが分布していたと推定される。また、遺跡周辺にはコナラ属などの樹木が生育していたと考えられる。

霧島高原スコリア（Kr-ThS，10～13世紀）の下層にかけては、メダケ属（メダケ節やネザサ節）やススキ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥したところが拡大したと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地はしだいに減少したと推定される。また、Kr-ThSの下層の時期には、調査地点もしくはその近辺で稲作が開始されていたと考えられる。同層ではメダケ節やネザサ節が多量に検出されているが、これらの植物が耕作地内に生育していたことは考えにくいことから、周辺に生育していた植物が堆肥や灰など何らかの形で耕作地に持ち込まれたことも想定される。

Kr-ThS混層から桜島３テフラ（Sz-3，1471年）直下層にかけても、おおむね同様の状況であったと考えられ、継続的に稲作が行われていたと推定される。なお、第４地点のSz-3直下層ではヨシ属が多量

に検出されることから、この時期には部分的に湿地的な状況になっていた可能性が考えられる。これは、同層準でカヤツリグサ科が優勢となっている花粉分析の結果（第Ⅲ章）と整合している。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70-83.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表１　筆無遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

	地点・試料	第３地点									第４地点
分類群	学名	3	9	13	19	21	27	29	31	33	1
イネ科	Gramineae (Grasses)										
イネ	*Oryza sativa*	35	28	34							47
キビ族型	Paniceae type			14	23	14	7	7		14	7
ヨシ属	*Phragmites*	14	7	7	29	43	69	77	79	84	87
ススキ属型	*Miscanthus* type	63	50	96		36					20
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	35	50	90	63	64	14	42	14	7	47
ウシクサ族B	Andropogoneae B type		14			14		7			7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)										
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	252	92	317	69	85	62	84		14	133
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	540	644	986	283	306	117	91	22	14	394
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.			21	6	21	21	7	7		
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	7	7	21	29	14	14	21	22		
未分類等	Others	126	120	62	63	50	27	42	43		
その他のイネ科	Others										
表皮毛起源	Husk hair origin	28	42	34	29	21	27	7	36	7	27
棒状珪酸体	Rod-shaped	687	517	731	410	342	241	140	166	196	394
茎部起源	Stem origin			14	6			14		126	27
未分類等	Others	406	432	276	490	512	502	412	375	399	601
樹木起源	Arboreal										
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*			7							
クスノキ科	Lauraceae		7								
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*					7					
多角形板状(コナラ属など)	Polygonal plate shaped (*Quercus* etc.)					7	7			7	
その他	Others					7				7	7
植物珪酸体総数	Total	2193	2009	2709	1500	1544	1107	950	765	875	1795

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	1.03	0.83	1.01							1.37
ヨシ属	*Phragmites*	0.88	0.45	0.43	1.82	2.69	4.34	4.85	5.01	5.30	5.47
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.78	0.61	1.20		0.44					0.25
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	2.93	1.07	3.68	0.80	0.99	0.72	0.97		0.16	1.55
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	2.59	3.09	4.73	1.36	1.47	0.56	0.44	0.10	0.07	1.89
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.			0.16	0.04	0.16	0.15	0.05	0.05		
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02	0.02	0.06	0.09	0.04	0.04	0.06	0.06		

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	53	26	43	35	37	49	64		71	45
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	47	74	55	59	55	38	29	47	29	55
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.			2	2	6	10	3	24		
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0	1	1	4	2	3	4	29		

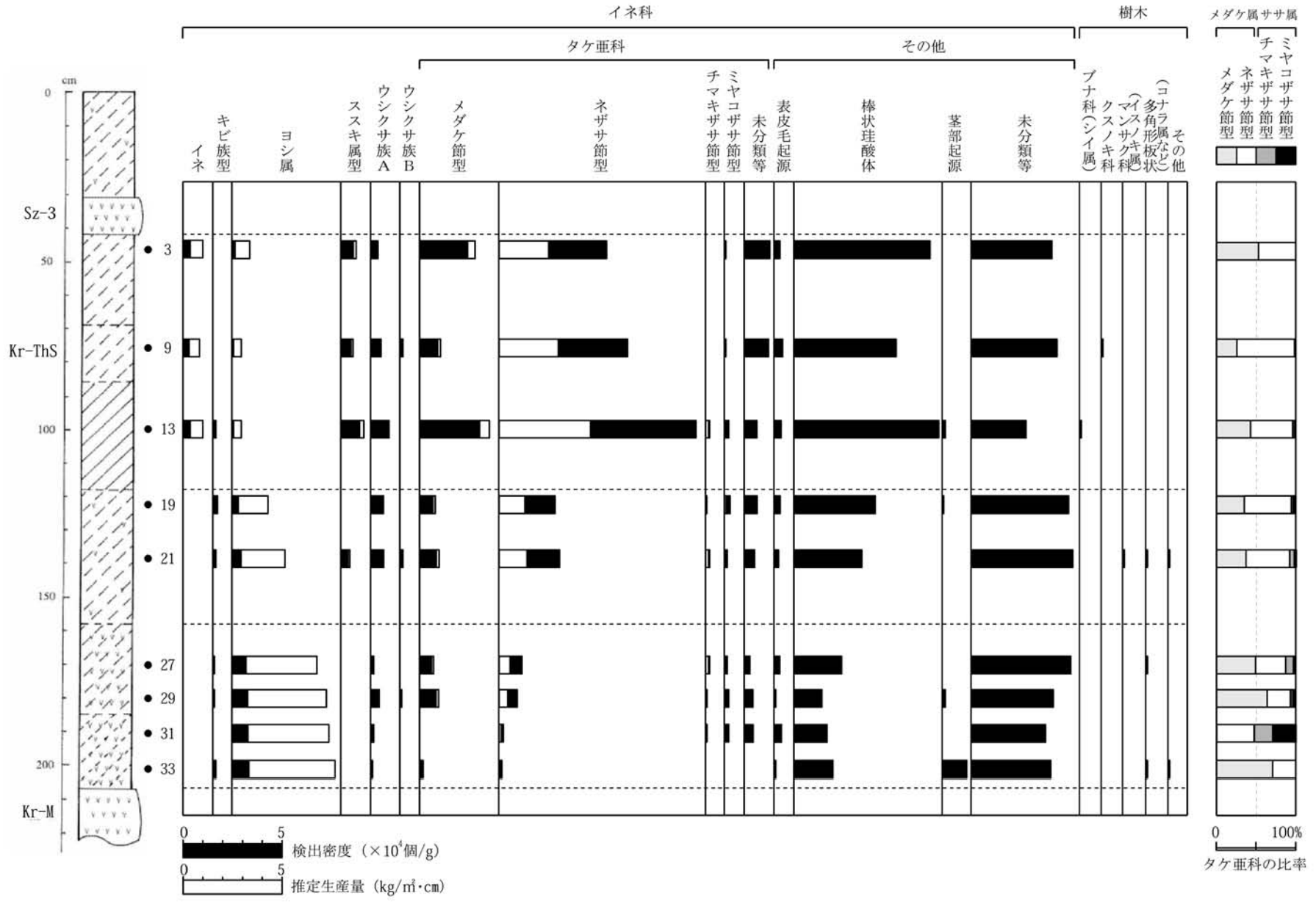


図１　第３地点における植物珪酸体分析結果

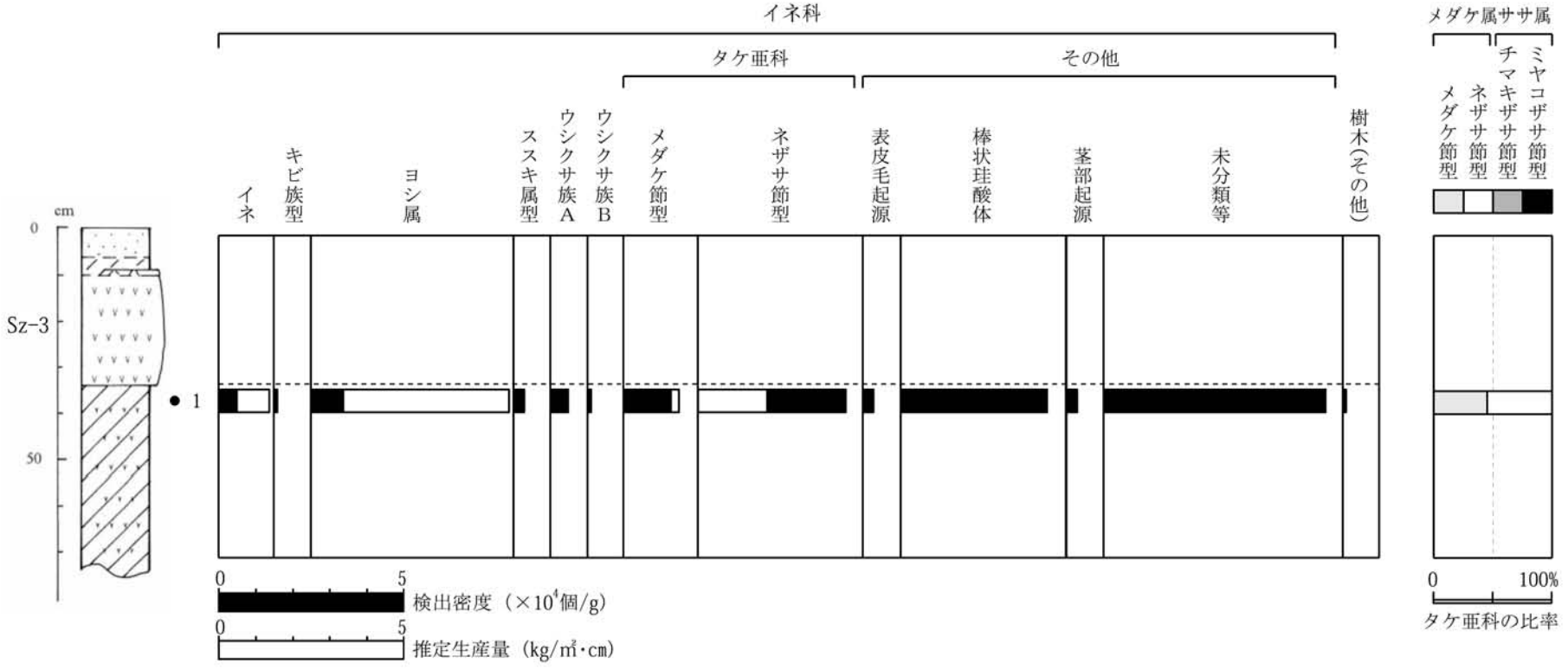
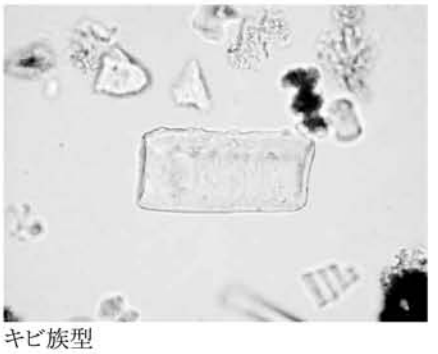


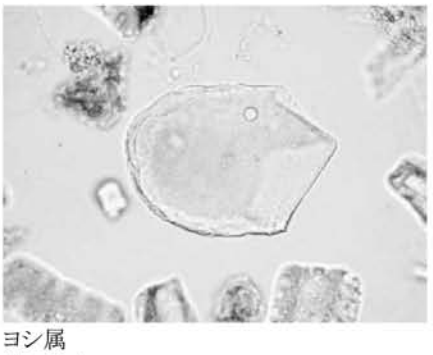
図２　第４地点における植物珪酸体分析結果

イネ
第3地点 3

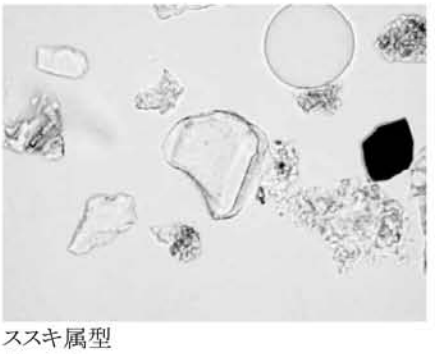
イネ
第3地点 3



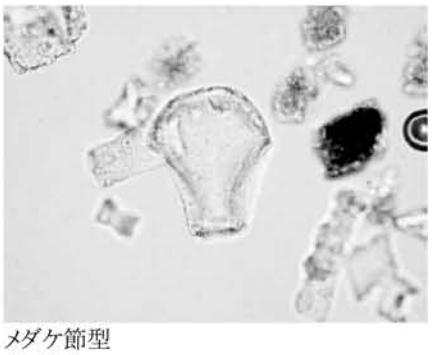
キビ族型
第4地点 1



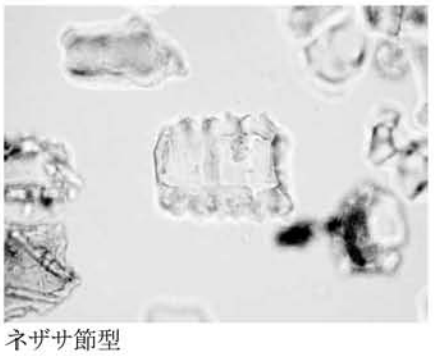
ヨシ属
第3地点 19



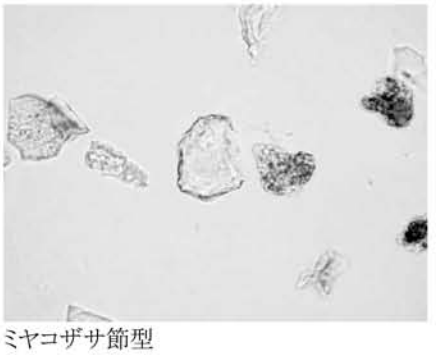
ススキ属型
第3地点 3



メダケ節型
第3地点 13

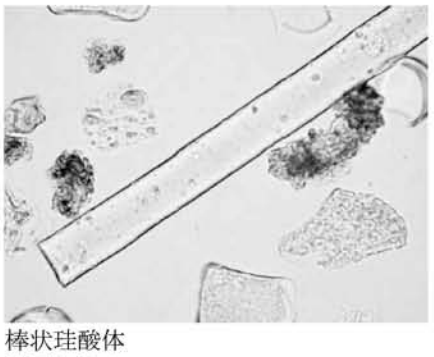


ネザサ節型
第3地点 3



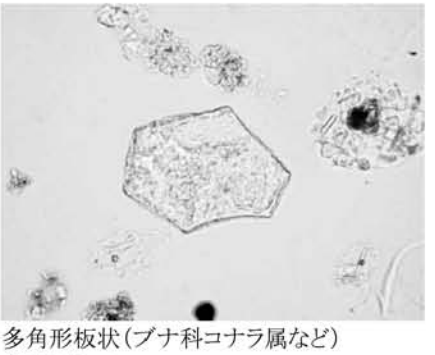
ミヤコザサ節型
第3地点 13

表皮毛起源
第3地点 9



棒状珪酸体
第3地点 3

クスノキ科
第3地点 9



多角形板状(ブナ科コナラ属など)
第3地点 21

50 μ m

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

花粉分析

1　はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2　試料

分析試料は、第３地点から採取された５点および第４地点から採取された１点の計６点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3　方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎

2）水洗処理の後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

5）再び氷酢酸を加えて水洗処理

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4　結果

(1)　分類群

出現した分類群は、樹木花粉13、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉16、シダ植物胞子２形態の計32である。分析結果を表１に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クルミ属、クマシデ属－アサダ、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、トチノキ、シナノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕
イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ワレモコウ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属
〔シダ植物胞子〕
単条溝胞子、三条溝胞子

⑵ 花粉群集の特徴

1）第３地点（図１）

下位の試料31では、花粉がほとんど検出されなかった。試料27から試料21にかけては、樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が極めて高い。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科が高率に出現し、タンポポ亜科、キク亜科、セリ亜科、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。試料13から試料９にかけては、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科が出現しており、試料９ではソバ属も認められた。

2）第４地点（図２）

試料１では樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が極めて高い。草本花粉では、カヤツリグサ科やイネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、タンポポ亜科などが伴われる。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属などが低率に出現する。

5　花粉分析から推定される植生と環境

霧島御池テフラ（Kr-M，約4,600年前）直上層では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

その上位層（試料27～21）の堆積当時は、イネ科やヨモギ属を主としてタンポポ亜科やキク亜科なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した開地の環境であったと考えられ、周辺地域にはナラ類（コナラ属コナラ亜属）やカシ類（コナラ属アカガシ亜属）などの森林が分布していたと推定される。

霧島高原スコリア（Kr-ThS，10～13世紀）混層にかけてもおおむね同様の状況であったと考えられるが、この時期には部分的にソバ属（ソバ）の栽培が行われていたと考えられ、畑作雑草でもあるアカザ科－ヒユ科なども見られたと推定される。

桜島３テフラ（Sz-3，1471年）直下層の堆積当時は、カヤツリグサ科やイネ科などが多く生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周囲のやや乾燥したところには、ヨモギ属やタンポポ亜科などが生育していたと考えられる。森林植生としては、周辺地域に二次林あるいは里山としてのマツ林が分布していたと推定される。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村　純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
中村　純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究,13,p.187-193.
中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

表１　花粉分析結果

分類群		第３地点					第４地点
学名	和名	9	13	21	27	31	1
Arboreal pollen	樹木花粉						
Abies	モミ属						1
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属		1				15
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ						1
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科						1
Juglans	クルミ属			1			
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属−アサダ			1			
Castanopsis-Pasania	シイ属−マテバシイ属	1					
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	6	6	16	5	1	6
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	2	1	4	1		
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属−ケヤキ			1			
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属−ムクノキ				1		
Aesculus turbinata	トチノキ		2		1		
Tilia	シナノキ属		1	1	1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科−イラクサ科	1	4		2		1
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	57	90	71	27		82
Oryza type	イネ属型						2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	8	12	2		143
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1					
Fagopyrum	ソバ属	1					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科	6	14				2
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1				
Cruciferae	アブラナ科	2	9		2		
Sanguisorba	ワレモコウ属			2			7
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属−フサモ属						1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科						2
Apioideae	セリ亜科	8	13	11	7		6
Labiatae	シソ科				1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	31	26	10	15		22
Asteroideae	キク亜科	7	8	21	9		3
Artemisia	ヨモギ属	77	123	61	57	1	50
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子	4	6	5	2		3
Trilate type spore	三条溝胞子	4	3	6	8		2
Arboreal pollen	樹木花粉	9	11	24	9	1	24
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	4	0	2	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	194	292	188	120	1	320
Total pollen	花粉総数	204	307	212	131	2	345
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	1.2 $\times 10^3$	2.9 $\times 10^3$	2.3 $\times 10^3$	1.0 $\times 10^3$	1.6 $\times 10$	1.3 $\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	18	20	18	11	0	6
Fern spore	シダ植物胞子	8	9	11	10	0	5
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+++)	(+++)	(++)	(++)	(+)	(+++)

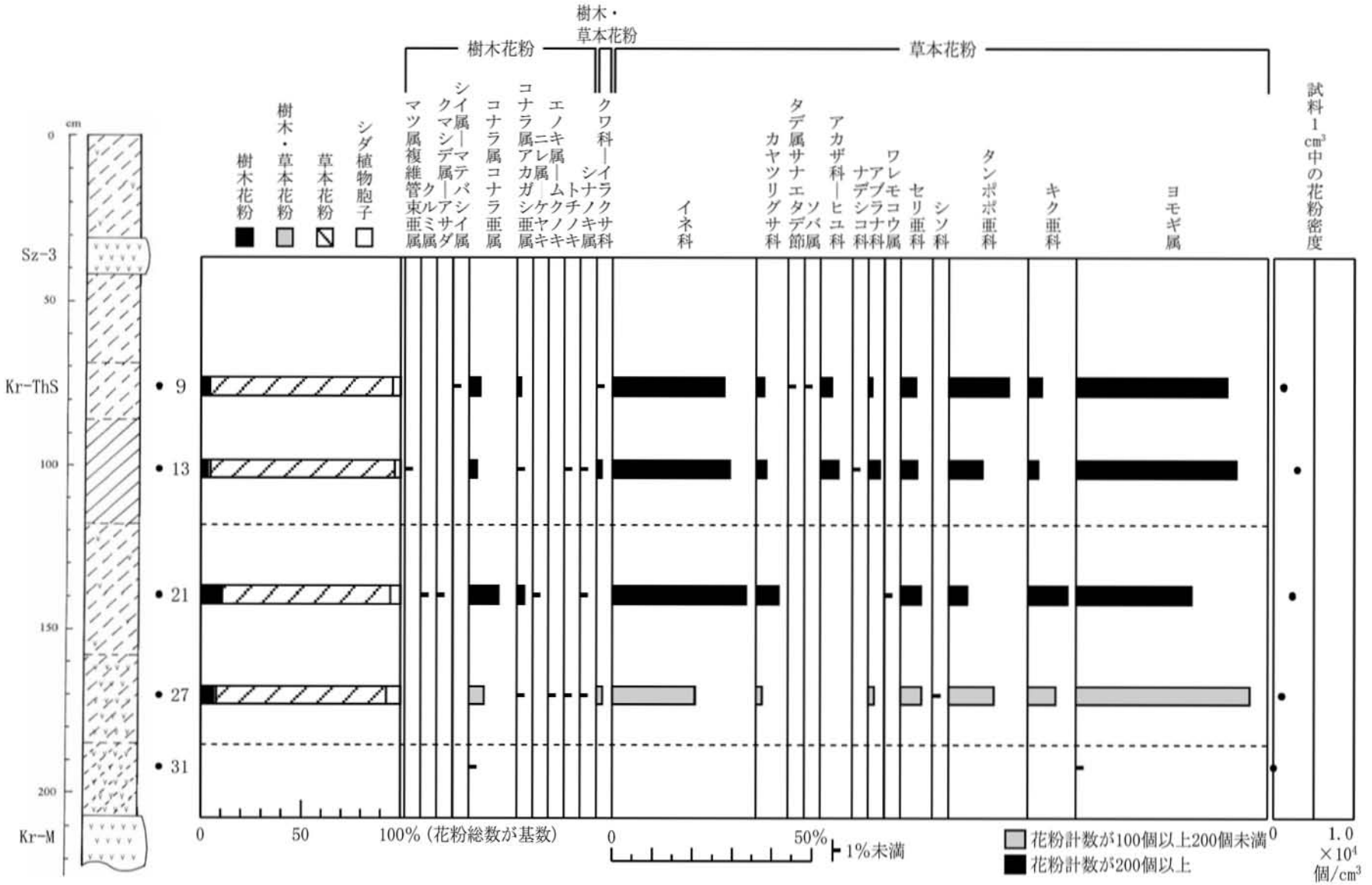


図１　第３地点における花粉ダイアグラム

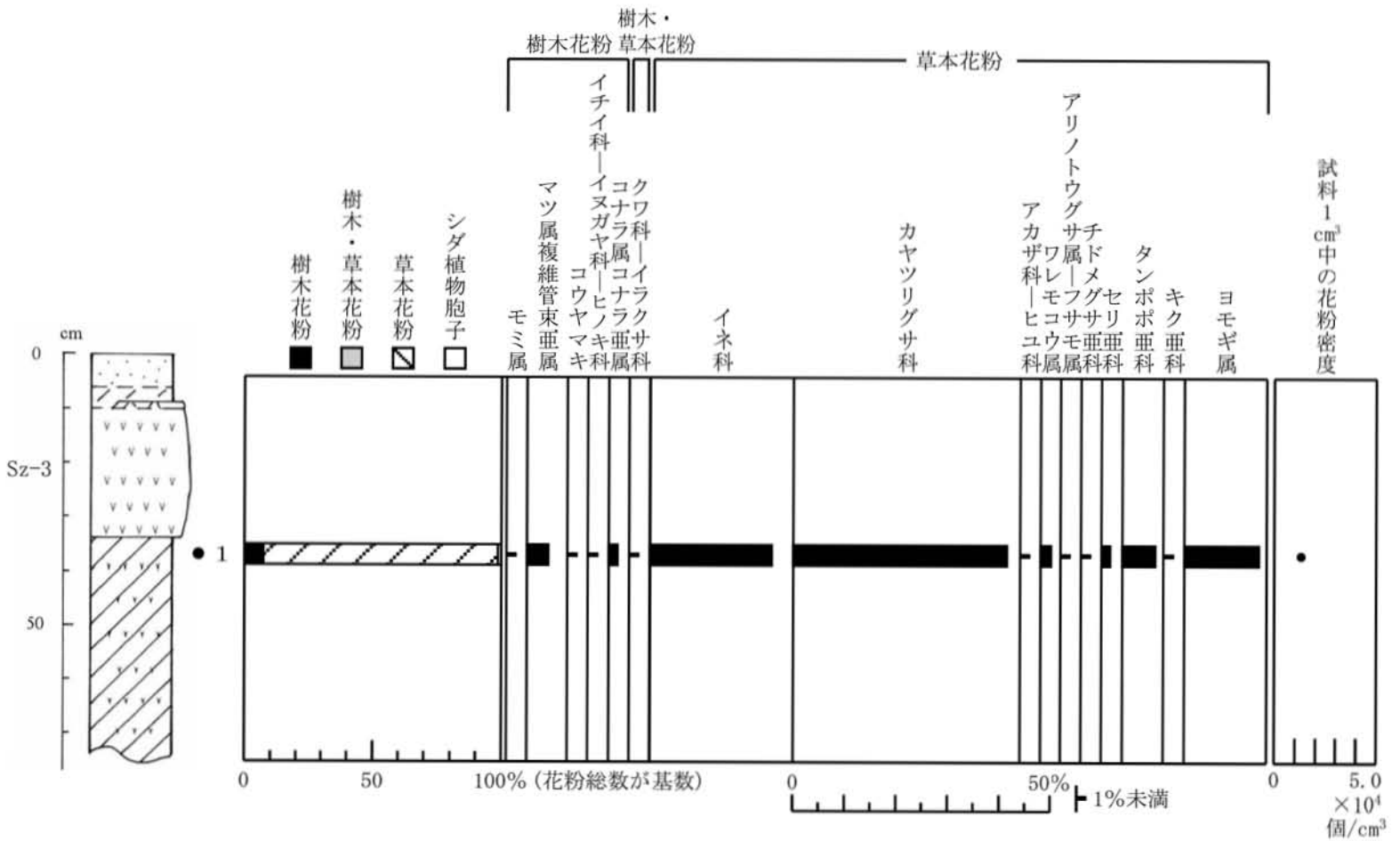
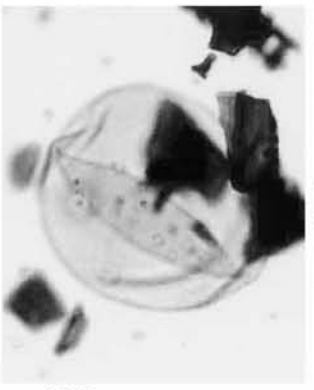


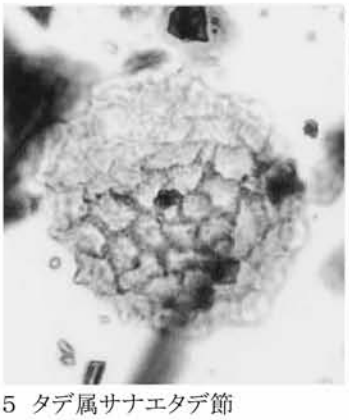
図２　第４地点における花粉ダイアグラム

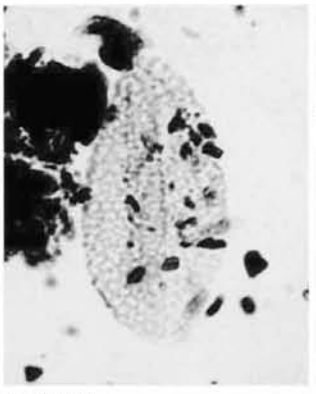
1 コナラ属コナラ亜属

2 イネ科

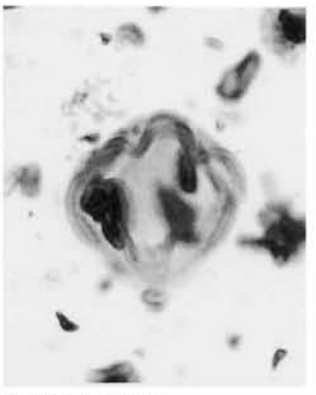

3 イネ科

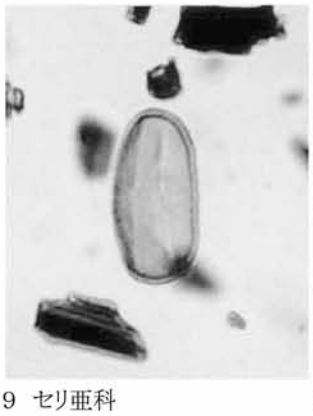
4 カヤツリグサ科

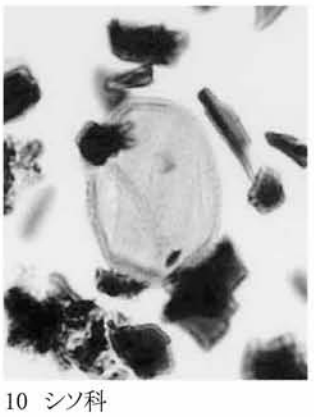

5 タデ属サナエタデ節

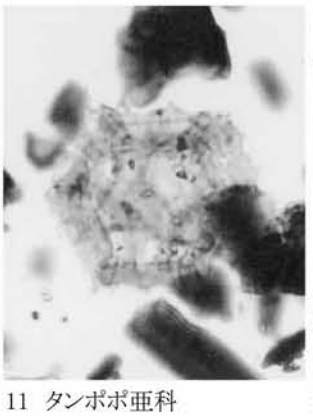

6 ソバ属

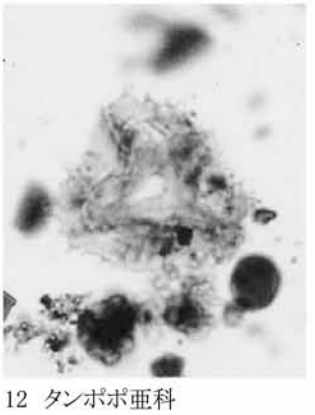
7 アブラナ科

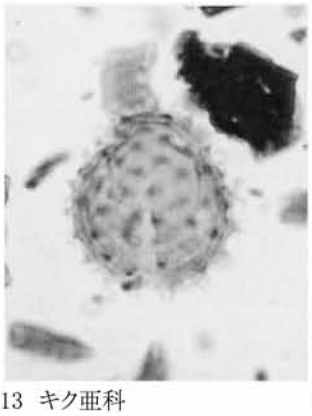

8 ワレモノコウ属

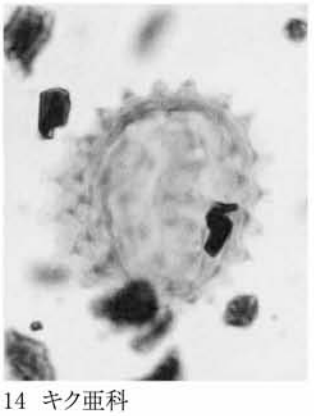

9 セリ亜科

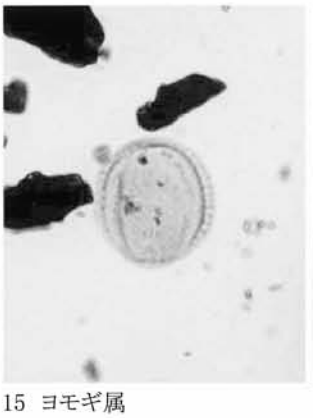

10 シソ科


11 タンポポ亜科


12 タンポポ亜科


13 キク亜科


14 キク亜科


15 ヨモギ属

16 シダ植物単条溝胞子

10 μm

筆無遺跡の花粉・胞子

第Ⅵ章　まとめ

筆無遺跡の３か年度にわたる発掘調査では、古墳時代を除く縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世の遺構・遺物が確認された。そしてこれらの遺構・遺物は、この地において連綿として続いてきた人々の日々の営みを今に語りかけてくる。そこで最終章である本章では、確認された各時代の遺構・遺物をもとにそれぞれの時代の様相について若干の考察を加えまとめとしたい。

１　縄文時代

【時期】

土器編年からＡ区は後期前葉・後期後葉～突帯文期、Ｂ区は早期後葉、後期前葉～中葉、晩期の時期に相当すると考えられる。

【遺構と遺物】

本遺跡は遺物量に比べ遺構は土坑１基のみとその数が極めて少ない。これは、本遺跡に限らず県内の晩期遺跡における特徴であり、住居数は遺物量と比べるとその割合は格段に低い。ただ、これまで確認された後期から晩期の集落遺跡の平畑遺跡（宮崎市大字熊野字平畑）、本野原遺跡（宮崎市田野町字黒草甲）等を参考にすると、標高150m前後の台地上に立地する本遺跡は居住域が展開することが想定される。しかし本遺跡では居住域と認定できる遺構が見あたらずこの傾向と相反するが、九州では後期後葉～晩期中葉の集落は密集して切り合う集落が多数確認されていることから（水ノ江2002）、本遺跡の周辺の台地上に密集した集落が存在した可能性は十分にあり得る。また、時期不明のピットが多数検出されており、これらの一部が掘立柱建物跡として存在した可能性もある。

【土器製作】

縄文土器の素地となる粘土に含まれる鉱物の中で、Ｂ区３類として分類した指宿式にのみ雲母が観察される（P55、第２表参照）。これは、指宿式とそれ以外あるいは指宿式以降の土器とでは、土器製作時の粘土採掘地点あるいは選択された混和材が他の土器と異なることが考えられる。また、晩期の黒色磨研土器の胎土には火山性ガラスが多量に観察された。これは、ミガキ調整を行う黒色磨研土器特有の土器成形方法に有効な粘土として、火山性ガラスを多量に含む粘土が選択された可能性もあると考えられる。

【土器使用】

今回、全体像が復元できる資料のみ煤・焦げの付着状況を丹念に観察し図化を行った。資料は、縄文時代晩期及び突帯文期で、深鉢（Ａ区11・22）と浅鉢（Ａ区39・40、Ｂ区１・61）である。前述した煤・焦げの付着状況を小林正史氏の実験結果（小林1999）に照合し調理方法を想定すると、深鉢では晩期の11は「煮込み調理」、また、突帯文期の22は底部が残存せず不明瞭であるが、「煮る・ゆでる調理」の可能性がある。浅鉢については、小林論考では浅鉢の調理実験を行っていないため詳細は不明とする。ただ、１の外面口縁部に煤が著しく付着しており、吹きこぼれの可能性がある。つまり、民族的事例から想定されていた「煎る調理」だけではなく、「煮炊き調理」の用途も可能性としてある。従来、器種分化は土器用途の分化と捉えられていたが、この資料は個々の土器に多種多様な用途があった可能性を示唆する資料と考えられる。器種分化が明確になる縄文時代後期後半以降の土器用途及び炉の検出が乏しい該期の住居において、今後とも実験や土器の観察を基にさらに検討を行う必要があろう。

【生業】

出土遺物から推察される生業について触れてみたい。食料の獲得具としては、狩猟具の石鏃、漁猟具の切目石錘があげられる。さらに、伐採加工具として磨製石斧、土掘具として打製石斧、食料加工具として磨石・石皿からは食料粉砕作業が、スクレイパーからは食料解体作業が考えられる。

【食糧】

加工の対象となる食糧については、種々の対象物が想定されるが、大きな成果として土器圧痕から後期後半にコクゾウムシが確認された点があげられる。これにより、土器を製作した際、集落の周辺にイネが脱穀貯蔵されていた可能性がでてきた。つまり、水稲耕作が伝播している坂元A遺跡の突帯文期以前の後期後半には東南部九州にイネが伝播していた可能性がでてきたことになる。圧痕資料の他に、主体的ではないが石斧の出土や包含層中でイネのプラントオパールも確認されている点から遺跡周辺において植物栽培が営まれた可能性は十分考えられ、さらに本遺跡の立地状況では、低地の水稲耕作とは異なる栽培方法が想定される。今後の周辺遺跡の調査と資料の増加に期待したい。（柳田）

2　弥生時代

いずれの遺構も検出面からの深さはあるが、本来の遺構の深さではなく、当時の生活面はさらに上であると考えられる。しかし、上層の黒色土での遺構の検出は至難であり、確認できるところまで掘り下げを行い遺構を検出した。弥生時代の遺構としては竪穴住居跡３軒と土坑１基のみであった。また、ピット群も存在していたと考えられるが、ピットから遺物が出土していないく、中近世のピット群と重複しているため確認することができず不明である。

確認できた住居跡のうちＳＡ３は規模が大きく、ほかの２軒の住居の軸がＳＡ３の方向を向き、ＳＡ１・２がＳＡ３を中心に弧を描くように配置されていると考えられる。そのことから、ＳＡ３はこの集落の長たる存在の住居と考えられるが推測の域は出ない。しかも、住居跡からは出土遺物がほとんど無いこと、近接して住居跡が３軒確認できているが、３軒しか確認でいていないことなどから一時的な住居であった可能性も考えられる。周辺の地形や包含層からの出土遺物が多いことなどから考えると、調査区の西側の更に上の台地上に本体ともいえる集落が存在しているのではないかと推測する。

ＳＡ１とＳＣ１で出土した壺の破片を接合することができたことにより、同時期のものと断定することができ、ＳＡ１から出土した壺の底部から胴部とＳＡ３から出土した口縁部から胴部が同一個体であると考えられることから、確認できたＳＡ１からＳＡ３の３軒の竪穴式住居跡は同時期のものと考えられる。ＳＡ３のすぐ横にＳＣ１が存在していることからこの土坑は貯蔵穴ではないかと考えられる。

３軒の住居跡と土坑は廃絶時に祭祀行為として意図的に割った土器を分けて納めたもの（分納）と推測することができるのではないか。

出土した土器の口唇部の形状観察では、沈線が施されるものや断面がM字状・台形状・三角形状・T字状となるものが存在する。M字状は沈線を意識していると考えられるが、沈線のようにしっかりした凹みではなく凹み部分が緩やかである。１・５のＴ字状のものは肥後系というより、須玖Ⅱ式の系統と考えられ、その他のものは形態などから中溝式、山ノ口式、松木薗式などの系統と考えられる。このことから時期について考えてみると、須玖Ⅱ式＝山ノ口式＝中溝式という併行関係が設定されており、本遺跡から出土した土器の時期は弥生時代中期末から後期初頭を想定できる。

今回の調査で確認された竪穴住居跡３軒、土坑１基は、すべて同時期のものであると考えられ、出土遺物から弥生時代中期末から後期初頭と考えられる。また、出土遺物や地理的位置から鹿児島方面との交流が強かったことがうかがえる貴重な資料となったのではないだろうか。（丹）

３　古代から中世

確認された数多くの遺構と遺物はその大半が古代末から中世初頭の時期幅に収まる。その事実から遺跡としての画期をこの時期に求めることができる。検出された方形プランの掘立柱建物跡や白磁・青磁を中心とした豊富な貿易陶磁の存在は、この土地を領した支配層の姿を垣間見せる。

（１）遺構の配置とその性格

調査着手時点ではともに比較的平坦な地形であったＡ区・Ｂ区であるが、包含層の掘り下げが進むにつれてその地形は徐々に変容し現地表面からは想像しがたい複雑な地形を呈した。

Ａ区の古代・中世の遺構検出面は、霧島御池軽石堆積層の上面で検出された開放起点付近の谷地形を反映していた（第P27、第10図参照）。桜島文明降下軽石の降下後に復旧された畠跡（畝状遺構）を検出した15世紀後半以降の地形ではさほど傾斜が強くなかったが、古代の土坑墓１基（SD1）が検出された第Ⅲa層上面では谷筋方向に向かい東西両方向から一定の傾斜を有する下り勾配となっていた。

検出された古代の遺構が調査区西端で検出された道状遺構（SG1）の一部と土坑墓１基に限られたのは、この地形的要因が少なからず影響しており生活空間として認識するにはその材料に乏しい。出土した遺物もその多くは調査区南西側に広がる一段高い平坦面からの流れ込みであり、生活空間の展開はこの平坦面と隣接する同レベルの畑地一帯が中心となると考えられる。

Ｂ区の地形は第Ⅳ章の序説で述べたとおり、次の３つの要素から構成されている（P41・42第１図参照）。

・調査区南側の台地丘陵から北北西方向に派生する弱い尾根状の地形

・調査区東側から南側を取り巻く後背の台地丘陵

・調査区の北側の縁辺で確認された複雑に入り組んだ谷地形

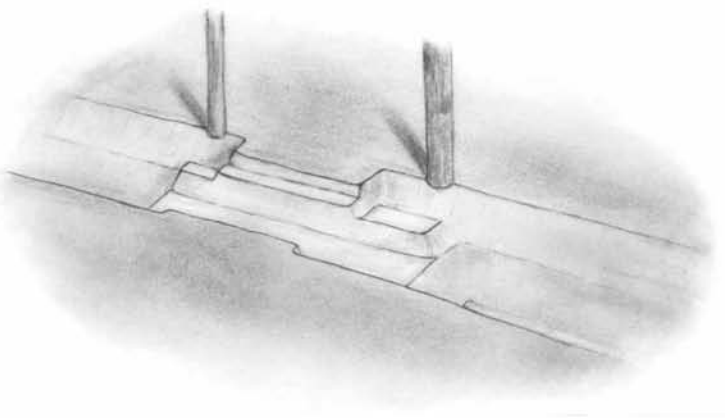
これらの要素は筆無遺跡の土地利用に各時代を通じて影響を与えているが、その一方で古代・中世の遺構配置を考えた場合、開放的な空間に一つのまとまりを付加する役割をも果たしている。古代・中世の掘立柱建物跡や土坑墓等の主要な遺構の多くは、弱い尾根状の地形より西側で集中して検出された。この事実は遺構が集中する空間の成立過程で、往時の人々が施設等を配置する区域を設定する際にこの弱い尾根状の地形を東の境界と設定する意識が働いたことを想起させる。

１）溝状遺構

古代の２号溝状遺構（SE2）と中世の４号溝状遺構（SE4）の配置には自然地形を空間の境界とした意識を感じ取ることができ、さらに「区画」として閉塞された空間を創出する配置の意識が顕著に表れている。南側台地丘陵から派生する弱い尾根状の地形に沿い北方向に延長するSE2は、尾根状地形が収束する付近で大きく西に走行軸を振り、溝幅も一段と広くなる。尾根状の地形に沿った範囲と付近とそこから離れた範囲で同一遺構の規模に相異が生じるのはその意識の表れと考えられる。また、SE4は北端部が消失、南端部は調査区外へと延長しその全体像は把握できない。しかし、遺構は尾根状の地形にほぼ平行した走行軸を保ち、その間に閉塞的な空間を創出している。今回の調査範囲では遺構の端部までを明らかにできず、その全体像の把握には至らなかったが、掘立柱建物跡を包括する空間を独立させ

ることを意図した配置がなされていたと考えるのが妥当であろう。

また、この遺構の中間点付近で検出された階段状の施設は出入口としての機能をもつものであると考えられ、第１図に第32図（P81）の平面図をもとにした想定復元図を示した。対称的な位置関係を保ち検出されたピットについては、現段階では門の柱を据えるための柱穴跡を想定している。この２基以外に柱穴跡は検出されておらず、門跡とした場合、構造的には冠木門に類するものと考えられる。



第１図　Ｂ区４号溝状遺構想定復元図（部分）

２）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は５棟検出した。その中で３号のみがやや離れた位置で検出されたが、すべて尾根状の地形の西側に位置しており、その範囲外では掘立柱建物跡は検出されていない。

古代の遺構と認定した方形プランの５号掘立柱建物跡（SB5）は、２号溝状遺構からの分岐が検出された付近に位置しＬ字状のピット列を伴っていた。四至の境界として、西と南をＬ字状のピット列、東を尾根状の地形とSE2、北をSE2と設定したと考えられる。

中世の掘立柱建物跡は４棟を検出したが、これらも同様に尾根状の地形とSE4に囲まれた空間の中に配置されている。このうち１号掘立柱建物跡（SB1）は古代のSB5と同様の方形プランを呈し、規模的にはSB5よりひと回り大きい。周囲に巡る「」状のピット列については庇として認識できるものであるが、隅角でピットが検出できなかったことや南側に隣接して検出された４号掘立柱建物跡（SB4）との距離関係などから塀・柵等の附帯施設の可能性も指摘した。SB1～4は埋土観察の結果や柱穴内からの出土遺物の様相から併存した遺構と考えられる。このうちSB2とSB3はともに総柱構造の掘立柱建物跡で、SB1とほぼ方位を一にする主軸を保つ。とりわけSB2はその規模が３間×５間と検出した掘立柱建物跡の中で突出した規模を誇る。また、SB4についてはSB1との距離的な面からの配置に検討の余地があるが、SB1に直交する主軸方位を保つことから意図的配置と捉えたい。

これらの配置関係をもとに４棟の掘立柱建物跡からなるこの空間について考えた場合、SB1～3を主軸を揃え並列させたその配置からは、単に居住空間と解釈するだけでなく祭祀的性格の強い空間もしくはそういった性格の建物を併せもつ居住空間という可能性も視野に入れた捉え方が必要になる。建物の配置のみで祭祀的性格にまで短絡的に言及することはできないが、方形の掘立柱建物跡と総柱構造の掘立柱建物跡の組み合わせは、持仏堂的な性格をもつ建物とそれに伴う庫裏もしくは倉庫的な性格を付与された建物という見方もできることを指摘しておきたい。また、これら４棟の掘立柱建物跡に先行する遺構であるSB5についてもSB1と同様のプランを呈する建物であり共通する性格を想起させる。SB1～4とSB5の掘立柱建物跡の間には時間的な大きな隔たりが存在することは確実であるが、その土地がもつ空間としての性格はその間も普遍的に保たれ続けたと考えられる。

３）周溝墓・周溝状遺構

周溝墓と周溝状遺構が検出された位置は、掘立柱建物跡や溝状遺構等が集中した範囲とは明らかに隔絶されている。位置的には１号周溝墓（SM1）と２号周溝墓（SM2）は舌状に張り出した尾根状の地形の先端北側付近、３号周溝墓（SM3）が尾根状の地形の東側である。いずれも比較的平坦な面に掘り込まれていたが、地形的には谷地形の開放起点や斜面へと傾斜が変化する付近に相当する。

３基の遺構の周囲からは性格不明のピット等が確認された程度で生活の痕跡を示すような遺構は検出されておらず、遺物に関してもSM2が検出された付近で谷地形の開放起点を要因とする流れ込みによる弥生土器等の時期の異なる遺物が出土した程度である。３基の周溝墓の規模はＰ185の第１表「周溝墓測定値一覧」に示したが、周溝の外縁測定値を基にした形状比（長軸/短軸）を求めると、SM1の値が約1.18であるのに対し、SM2では約1.45、SM3では約1.39となる。この値が示すとおりSM1は円形に、SM2とSM3は長楕円形に近い平面形態でありそのプランに若干の相異が認められる。あわせてSM1とSM3の土壙内から出土した遺物をもとにした年代観ではSM1が９世紀末から10世紀後半、SM3が10世紀末から11世紀代の時期幅に収まると考えられ遺構間には時期差も認めることができる。SM2については遺構内物が確認されていないが平面形態からSM3とほぼ重なる時期と考えて差し支えないであろう。

今回、筆無遺跡では３基の周溝墓を確認したが、宮崎県内では第１表の一覧に示すとおり、これまでに古代・中世の周溝墓が５例報告されている。時期的には10世紀前後から15世紀代の幅をもつもののその確認例は少ない。地域的には清武町１、えびの市２、都城市２であり、県南西部の北諸県・西諸県地方での確認事例が多い。また、同一遺跡内で複数の遺構が確認された例はこれまでになく、調査範囲による偶然性もあるものの３基が同時に検出されたことは注目に値する。

なお周溝状遺構については、弥生時代の遺構・遺物が確認されていることから同時代の周溝状遺構の可能性もあったが、遺構内からの出土遺物は古代の須恵器甕の胴部片と土師器坏もしくは埦と考えられる時期不明の細片のみであったことから古代以降の遺構と考えられる。また、平面形態としては周溝墓の周溝ともか同様であるが、中央の土壙が存在しない理由等を明らかにしえないことから遺構としては周溝状遺構と認定するに至った。

第１表　宮崎県内で確認された周溝墓一覧

遺跡名	所　在　地	検出数	時　代	遺構の概要（副葬品等）
前原西遺跡	宮崎郡清武町大字木原字山内	1	14～15ｃ	中央土坑　土師器の坏２枚・小皿４枚（糸切底）、銭貨、漆器
小路下遺跡	えびの市大字末永字上田代	1	鎌　倉	中央土坑　土師器小皿４点
平原遺跡	えびの市大字東川北字平原	1	古代末	中央土坑　土師器皿・高台付埦 周溝　土師器甕・坏・皿・埦・黒色土器・布痕土器
池ノ友遺跡	都城市早水町4529番地２ほか	1	11ｃ前半	中央土坑　土師器小皿１・刀子１・鉄製工具１・砥石１ 周溝　土師器甕・坏・皿・埦・黒色土器・布痕土器
池島遺跡	都城市早水町3882番地ほか	1	中世	中央土坑　刀子茎１ 周溝　土師器皿５

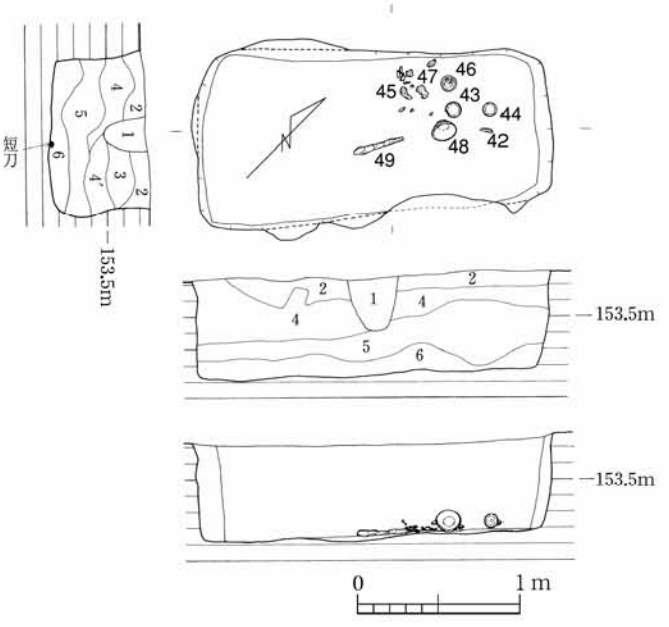
※中世墓資料集成研究会 2004「中世墓資料集成－九州・沖縄編(2)－」（抜粋作成）

4）土坑墓

A区の１号土坑墓（SD1）は副葬されていた２個の完形の土師器埦から、おおよその時期として９世紀後半から10世紀前半の遺構と想定している。A区では性格がはっきりしている遺構が少なく、生活空間を想定させる遺構は皆無に等しい。少なくとも古代においては生活空間からは切り離されていたことは確かであろう。副葬された遺物の出土状況についての考察についてはP92を参考にされたい。

B区の１号土坑墓（SD1）は、その検出位置が掘立柱建物跡等が集中して検出された空間の中に包括されている。遺構の主軸方位はほぼ座標北であるが、この土坑墓を含めてSB1をはじめとする４棟の掘立柱建物跡はおおむね南北方向に主軸をとる。なかでもSB1・SB4・SD1の３つの遺構はほぼ同一軸線上に並んでおり、遺構全体の配置における南北方向の基軸とみることができ、この土坑墓の被葬者が掘立柱建物跡を中心とする一連の遺構と密接な関係にあったとが想定され、遺構が単独で検出されたことや掘立柱建物跡を意識した意図的配置から屋敷墓と考えてよいであろう。

次にSD1の時期についてであるが、この検討に際しては都城市教育委員会が昭和62年に調査を行った郡元地区遺跡群の松原地区第Ⅳ遺跡（同市郡元町所在）で検出された１基の土坑に注目したい。同遺跡からは中世から近世の掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など数多くの遺構が検出されているが、その中の４号土坑（SC4）は筆無遺跡の１号土坑墓と時期的に併行する土坑墓である。両遺構は規模もほぼ同じ土坑墓であるが、それ以上に副葬されていた遺物の内容構成が共通していることが特筆される。その内容は、土師器の小皿・白磁碗（大宰府陶磁器分類：白磁碗Ⅳ類）・刀子の３種類であるが、このうち土師器の小皿の底部にはヘラ切りと糸切りによる切り離し技法の混在が認められ、12世紀中頃と考えられているこの地域の土師器の糸切り技法の初現を考える上でも貴重な資料である。



第２図　松原地区第Ⅳ遺跡の土坑（SC4）
（都城市文化財調査報告書　第51集「郡元地区遺跡群」P17より転載）

これらの副葬品の構成内容にはその点数にこそ相違があるものの、そこには都城盆地の中世初頭の葬送における定型化された儀礼的行為の一形式を垣間見ることができる。松原地区第Ⅳ遺跡と筆無遺跡は直線距離にして約7.5kmと離れているが、島津荘が成立する前後の両地域の政治的動向はその成立過程を追う中で着目に値する。その両地域でこのような遺構が確認された事実は、一つの作法とでも言うべき儀礼的行為に対する考えを共有する集団が存在したことの裏付けにもなると考えられる。

（2）遺物の様相

筆無遺跡から出土した古代・中世の遺物については、「宋」と書された墨書土器と陶磁器の中でも量

的に突出した白磁の存在が注目される。これらの遺物が帰属する時期は、検出された多くの遺構の時期とも符合しており、遺跡としての隆盛期を概ねこれらの遺物の時期と重ね合わせて考えることができる。また、出土した遺物の中には点数的には少ないもののそれらの遺物に先行するものや時期的には中世末の遺物などが点数としては少ないながらも散見される。

１）土師器

出土遺物の構成として単純に点数から考えると、土師器の割合は出土遺物全体の約58.1％と約６割を占めており他の遺物を優越する。出土した土師器全体における器種別の構成比較では坏が約43.6％と最も高く、次いで埦（円盤状高台埦、輪高台を有する高台付埦も含む）が約36.5％、皿が約12.1％の順で続き、これら３器種で全体の９割を超える。このうち埦類については底部片のみを確認した個体が多かったものの量的には坏と大差ない点数が出土している。

甕に代表される比熱痕跡が明瞭に残る煮炊具の類は量的にも少なく全体の１割にも満たない。Ａ区で器形全体を把握できる個体が数点出土しているものの、Ｂ区では１号周溝墓に副葬された甕と、２号溝状遺構内と包含層中から口縁部のみが出土したに過ぎない。この煮炊具が少ないという傾向は筆無遺跡の今回の調査範囲における特長であり、生活空間としては考えにくいところである。

法量的観点から

出土した土師器の大半を占める皿・坏・埦の中から、口縁部から底部までの器形を把握できる個体が一定量確認できた皿・坏（墨書土器を含む）の法量について検討を加える。

なお、皿・坏のデータ抽出に際しては、残存率が概ね１／３以上の個体すべてを対象としたが、底径と口径の形状比（口径／底径）と第３図に示した口径と底径の２要素の相関図については、器形の全容が把握できた皿29個体、坏27個体から得た数値のみを取り上げ分析を行った。

皿

計測値全体としては、底径：約5.5～9.2㎝、口径：8.5～11.0㎝、器高：1.1～2.7㎝の数値幅が認められた。平均値は底径：約6.6㎝、口径：約9.3㎝、器高：1.6㎝であり、平均値をもとに算出した形状比は約1.4である。抽出した29固体については底径：約6.5～7.5㎝、口径：約8.5～9.5㎝の間に集中する傾向が見られる。器高の平均値は約1.64㎝であり、約７割の個体が平均値±0.2㎝の範囲内に含まれている。底径と口径の形状比は1.19～1.38の幅があり、平均値は約1.32である。

相対的には法量的には大きなばらつきは認められないが、10㎝を超えるやや大きめの口径を有する個体では形状比がやや小さくなる。

坏

計測値全体としては、底径：約4.6～14.4㎝、口径：11.3～15.8㎝、器高：3.0～5.5㎝の数値幅が認められた。平均値は底径：約6.7㎝、口径：約13.4㎝、器高：4.4㎝、形状比は約1.8である。

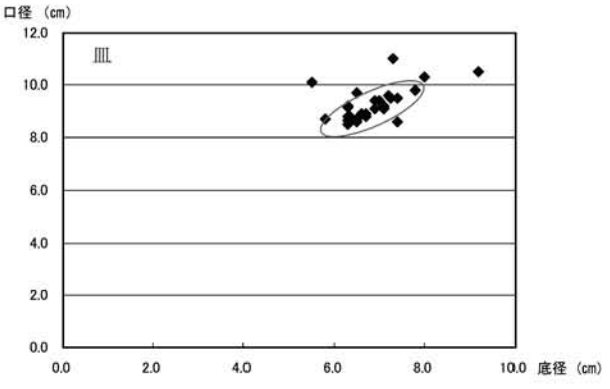
第Ｂ図に示した抽出個体による口径と底径の２要素の比較では、底径が６㎝、口径が13㎝を中心とした前後約１㎝の範囲内に集中し、口径が14㎝を超える個体については底径にややばらつきが見られる。また、時期的な同時性が指摘できる「宋」の墨書が確認された坏については、約2.0～2.34の間の形状比が得られており、平均値との比較においては、体部がやや開き気味で口径に比して底径を小さく収める傾向が認められる。

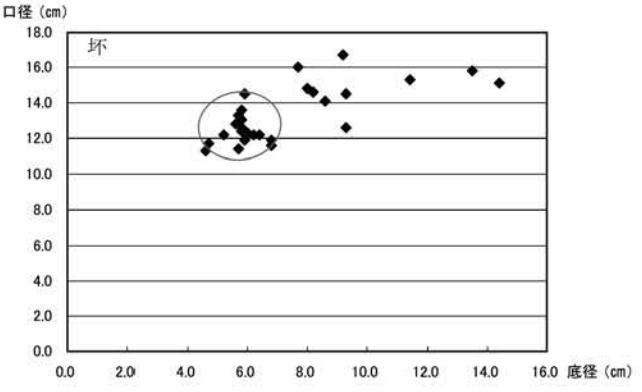
技法的観点から

皿・坏の底部外面に残された回転台からの切り離し痕に着目すると、ヘラ切り離しによるものが大半を占める。数値的には糸切り離し底の底部を有する個体については皿：約5.9%、坏：約2.4%であり、ヘラ切り底と糸切り底の判別が可能であった皿・坏とを合わせた個体総数に占める割合で見るとヘラ切りによる切り離しは約３%に止まっている。中世日向におけるヘラ切り離しから糸切り離しへの技法的移行期については12世紀中頃を画期とする見方があるが、ヘラ切り離しから糸切り離しへの技法的転換は急なものではなく２つの技法が並存しながら緩やかな変化を遂げた。Ｂ区の１号土坑墓内にⅣ類の白磁碗とともに副葬されていた２枚の皿の底部に異なる技法が見出されたことは、ヘラ切りと糸切りの２つの技法が併存したことの時期的裏付けである。また、出土した陶磁器の中で大宰府分類の白磁碗Ⅳ・Ⅴ類の出土量が他を優越する筆無遺跡においてヘラ切り離しによる皿や坏の占める割合が極めて高いことも糸切り離し技法の初現期を考える上で興味深い様相である。

糸切り離しの技法については、底径が大きめの坏に多く見られるというもう一つの傾向が見出せる。この傾向については、大径の底部が小径の底部に比して回転台との接地面が広く、ヘラ切り離しでは平滑面を容易に確保しがたいことがその要因としてあげられる。ヘラ切り離しに比べ、糸による水平方向の切り離しでは平滑な面を確保することが比較的容易であり、底部を再度平滑に調整する作業は軽減される。作業効率という観点からの取捨選択あれば、２つの技法が併存した時期において効率が高い技法へと淘汰されていく意識の流れは自然ではないだろうか。

最後にヘラ切り離しの底部に残る板目圧痕については、回転台から切り離したあとで板状の成形台の上で底部内面を押さえ気味にナデ調整し、底部を極力平滑に仕上げようとした際の所産であろう。糸切り離しの底部にはこの痕跡は認められず、面的な再調整をし個体は確認されていない。





第３図　皿・坏の法量分布図

黒色土器について

内黒と両黒の２つのタイプが確認されたが、このなかで両黒の皿（388・389）、坏（390）、高台付埦（396・397）は胎土そのものが黒色を呈している。これは酸化還元炎による焼成によるものであり、焼成後のミガキによる器表面の処理も極めて丁寧である。また、396と397の底部内面に見られるミガキは、その方向を縦横の直交する２方向のみに限定しておりその他の個体とはやや異なった処理過程が認められる。これらの個体は瓦器埦と並行もしくは移行期に位置付けられる遺物と考えられる。

墨書土器について

Ａ区とＢ区から合わせて75点の墨書土器が出土したが、このうちの29点では「山」と「水」を組み合わせて一つの文字として表記した「宋」と判読できる合わせ文字、もしくは「山」、「水」のいずれかの文字を判読することができた。この数は割合としては全体の約38.7％を占め、「本」もしくは「奉」と判読できる445を加えた文字と判別できる25点を合わた数は54点となり全体の72％で文字が確認されている。しかし、墨書土器全体としてはやはり「宋」の文字の存在が特筆される。

「宋」の文字については第Ⅲ章で若干の考察を加えたが、筆跡に着目すると客観的に比較して少なくとも８人以上の手になる文字が認められる。この時代において文字を書くという行為は日常的なものではなく、行為としてはごく限られた人間のみが行っていたはずである。しかし、筆跡を詳細に検討すると始筆や終筆に書としての筆使いが見られなかったり、画数を意識した文字の折れや筆運が見出せなかったりするものがある。これは「宋」を文字として認識したというよりも、むしろ一つの形としてそれを捉え「書く」ではなく「描く」という行為としてそれを表現した結果と判断できる。そこには文字を初めて書く子供がその字形を視覚的に認識し、筆順等を無視してその形を模倣する行為と通じるものが感じられ、おそらくは「宋」の合わせ文字を象形化された形として器に描いたのであろう。祭祀的な意味合いを強く感じさせるこの「宋」という特殊な文字。個々の遺物に遺されたこれらの文字は、この地に生きた当時の人々の祈りの心を象徴するものである。

２）須恵器

須恵器については９世紀代を中心とした甕・壺などが出土している。これらの須恵器の中で点数としてはさほど多くないが壺と横瓶の存在に着目したい。

壺と器種認定した遺物は16点であるが、器形の全容が把握できた個体はＡ区で出土した117の短頸壺とＢ区で出土した受け口状の二重口縁を有する492の２点のみである。このほかの個体はいずれも口縁部や底部といった部位のみであるが、口縁部７点についてはすべて受け口状の二重口縁部である。口径の推定復元が可能であった494～499の６点については、約9.1～13.8㎝までの個体差があるが、平均口径で比較すると約9.6㎝（494・495・496）と約13.7㎝（497・498・499）の２つのグループに大別できる。これらの口縁部は開き角に若干の差があるが、「く」の字の屈曲はいずれも明瞭である。

横瓶の破片は４号溝状遺構の埋土と包含層中から出土したが、古墳時代の胴部両端を平滑に仕上げる樽型の横瓶とは異なり、側面から見た形が繭玉状を呈するいわゆる俵型のタイプである。両個体とも、外面に格子目タタキ痕、内面に同心円当て具痕の調整痕が認められ、胴部両端の閉じ方も共通していることから同時期の遺物と考えられる。

須恵器としては壺・横瓶のほかにも大小の甕が数多く出土しており、外器面に平行タタキ痕、内面に同心円当て具痕と平行当て具痕が見られるタイプが大半を占める。特に内面の当て具については胴部中位付近を境界として部位による使い分けが明瞭である。これらの甕は年代観としては９世紀前半から10世紀前半の時代幅に位置付けられるが、壺・横瓶については９世紀後半が下限と考えられる。

３）陶磁器類

出土した陶磁器類は大宰府分類における白磁碗Ⅳ・Ⅴ類に代表される12世紀代の遺物を中心に構成されるが、そのほかにも古い様相を呈す一群も出土しており、時期的な観点から遺物を見ていくと９世紀代と12世紀代に２つの画期が存在すると考えられる。

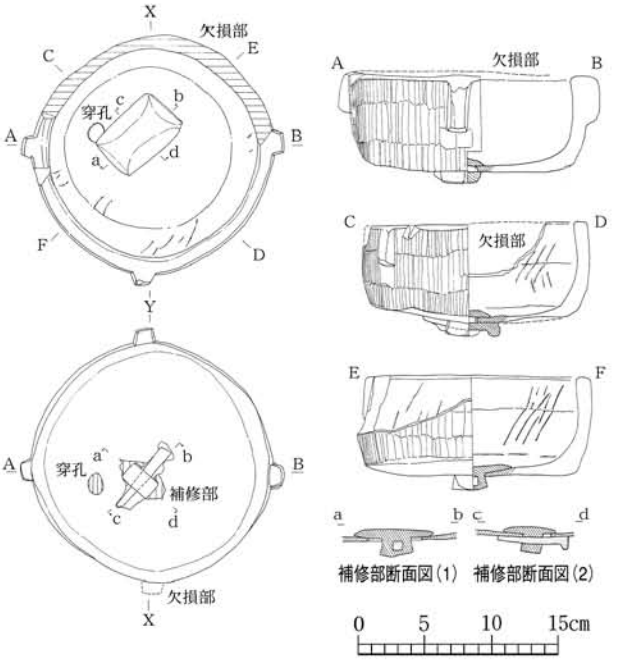
９世紀代の遺物に比定される古い様相を呈す一群としては緑釉陶器・灰釉陶器・白磁碗、越州窯系青磁があげられる。緑釉陶器は器種としては埦・皿が確認された。底部外面に圏線状の沈線が施されており、蛇の目高台を意識したものと考えられる。輪高台を有する個体は確認されていない。時期的には９世紀中頃を上限とし、大半が洛西タイプに属する個体である。灰釉陶器は口縁部と底部の２点が出土した。胎土中に黒斑が特徴的に認められ猿投窯の製品と考えられる。時期的には猿投窯の黒笹90号窯式段階に比定でき９世紀後半を下限とする。白磁として９世紀代に帰属するものは白磁碗Ⅰ類の底部片が１点のみである。しかし、出土した白磁片の中には乳白色の釉調を呈する体部細片があり、Ⅰ類に属する個体がそのほかにも存在する可能性があるものの確定要素に欠ける。越州窯系青磁は碗Ⅰ-1a類のみが出土している。同類の他のタイプやⅡ類の混在がなくⅠ-1a類のみに限定されている。層位的な観点から見ると、緑釉陶器・灰釉陶器・白磁碗Ⅰ類については遺物包含層であるⅢb層中の下位からの出土に限定されているが、越州窯系青磁については同層中の中位からも出土している。

12世紀代を中心とする遺物は白磁碗Ⅳ・Ⅴ類と皿Ⅱ・Ⅵ類に代表され出土点数が量的にも優越している。量的に一定の割合を占める碗Ⅳ類は、光が透過するほど薄手に仕上げた器壁に釉を丁寧に施したものから、器壁が厚く釉が発泡した粗製の物まで製品としての個体差がかなり大きい。この傾向はⅤ類にも共通したことが言える。そのほかにもⅣ・Ⅴ類に時期的に先行するⅪ類が２号溝状遺構の埋土中の上位や包含層中から出土している。これらの大量の白磁の存在は、越州窯系青磁に変わり同安窯系や龍泉系の青磁が隆盛を極め白磁を優越していく前段階に当たり、中世初頭に展開した遺跡の姿を反映したものであると考えることができるであろう。

４）石製品～石鍋およびその加工品について～

滑石製品としての石鍋は縦耳の把手を有する個体と鍔を有する個体の２タイプを確認した。しかし、今回の調査で確認した滑石製品の大半は石鍋転用と考えられる様々な二次加工製品である。第74図に示したとおり様々な形状の製品があり、用途不明の個体も多いが、671～673については、八児遺跡から出土した底部を補修した石鍋にその用途について手掛かりを求めることができる。

八児遺跡から出土した石鍋は、被熱による亀裂等が生じたか、もしくは底部を局部的に損傷し補修が必要になったと考えられる。補修には削り出したつまみ状の突出部に穿孔を施したのスタンプ状の滑石板（約5.8cm×約4.0cm）を使用している。底部内面からその突出部を底部外面に抜き差し、穿孔部に鉄製のピンを差し込みかしめている。熱を受けることを前提とした補修方法であり、滑石と鉄の熱膨張を利用したものである。筆無遺跡から出土した類似する二次加工品もこのような用途を目的として加工された製品である可能性が指摘できる。



第４図　八児遺跡の石鍋（S=1/6）

実際にはこれだけの補修では煮炊きの際にその間隙から水分が漏れるが、煮炊きを繰り返すことで付着した調理具材等の有機物が被熱し徐々に炭化して補修材との隙間を埋めていくことにより再度使用が可能になったと考えられる。現在でも陶器製の湯呑み茶碗を初めて使う際に水漏れを防ぐ目的で、米の研ぎ汁を一晩入れたままにしておくなど昔からの知恵が生きている。当時、この補修法が一般化したものであったかは不明であるが、昨今同じような形状をしたスタンプ状の滑石製品の存在が注目されている。これらの補修部品が製品として流通していたか、またはその方法のみが伝播し、消費地において廃棄する石鍋片を再加工したものであるかは現段階では言及する資料に乏しく、その解明には類例の蓄積と今後の検討を待ちたい。

4　近世

検出された遺構の中では１～４号土坑の存在が特筆される。２基ずつが隣接して配置されていることから、遺構を単体として捉えるのではなく、２基で１セットとして使用していたと考えるべきであろう。これら４基の土坑は、陶器甕がその内部から出土したことから貯蔵を目的として設置されたと考えられるが、１・３号の床面で検出した４個の石を根拠として個々の使用目的の相異も想定できる。

４個の石は方形の土坑床面の壁側に配置されており、平滑な面を上にして床面よりもレベル的に高くなるように据えられていた。おそらくは柱の礎石もしくは板等をその上に置くための基礎と考えられる。ただ、板状の物を置いて台を設置したと仮定すると、長辺の石と石の間隔がやや広すぎる感がある。上からの加重に対する負荷に耐えるためには中間付近にも石等を据える必要があることから、柱を据えるための石とするのが妥当であり、仮に板状の設置物を置いたとすれば負荷がさほど掛からない軽量の物を置いたと見るべきであろう。いずれにせよ４個の石の配置には床面から浮かせるという意図が明確に存在する。短絡的には小物類を整理するための棚等の設置物を想定するが、もう一つの側面として素掘りの土坑であるが故に避けられない湿気に対応する意図をもって棚等が設置されたことも想定され、貯蔵物の特性に応じて使い分けがなされていたと考えてよいであろう。これらの土坑と掘立柱建物跡・溝状遺構等からなる居住空間が、この地域の18世紀中頃の住空間の構成要素となるものであるかはさらなる検討を要する。しかし、これらの遺構をセット関係で確認できたことは、今後の検討材料として一つの好資料を提示することができたと考える。

なお、この筆無遺跡周辺は地元では「シタンヤシキ」と呼ばれ、おそらくは「下ノ屋敷」をその語源とすると考えられる。今回の調査で確認された近世の屋敷跡がその呼称と直結する遺構である確証はないが、屋敷地として認識されていた場所であったことは確実であろう。

以上、筆無遺跡の調査で確認できた遺構・遺物について時代ごとに考察を試みまとめとしたが、すべての遺構・遺物についての詳細な検討を加えることはできなかった。しかしながら、鹿児島県曽於市から都城市へと流れ下る大淀川中流域に展開した筆無遺跡は縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世の各時代における人々の営みを垣間見せてくれた。なかでも古代末から中世初頭の遺構・遺物は、島津荘成立前後にこの地に生きた人々の姿を映し出すとともに、都城盆地における該期の地域的様相を考える上で大きな手掛かりとなるであろう。今後の周辺地域の調査成果の蓄積により、点として存在する遺跡や史跡等の関係がより明らかなものとなることを期待するものである。

【参考文献】

縄文

安富和男・梅谷献二　1983「原色図鑑衛生害虫と衣食住の害虫」全国農村教育協会

可児通宏　2005「縄文土器の技術」考古学研究

金丸武司　2005「九州における縄文の大土木工事」『南九州縄文通信』№16

桒畑光博　2006「東南部九州における縄文から弥生への土器変遷」『大河』第８号

桒畑光博　1999「平畑遺跡の再検討（１）－縄文後・晩期土器の編年－」『宮崎縄文研究会第９回例会資料』

小林正史　1999「煮炊き用土器の作り分けと使い分け」『食の復元－遺跡・遺物から何を読みとるか－帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集２』岩田書院

佐原　真　1979「土器の用途と製作」『日本考古学に学ぶ』２　有斐閣

堂込秀人　1997「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」『鹿児島考古』第31号　鹿児島県考古会

林　匡夫・森本　桂・木元新作　1984「原色日本甲虫図鑑（Ⅳ）」保育社

藤尾慎一郎　1993「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第27号　鹿児島県考古会

藤木　聡　2005「宮崎県域における縄文時代の石斧と石材」『stonesources』№５　石器原産地研究会

藤木　聡　2003「宮崎県域の錘具の変遷の分布」『考古学研究室創設30周年記念論文集　先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会

前迫亮一　2002「南の磨消縄文土器」『犬養徹夫先生古稀記念論集　四国とその周辺の考古学』犬養徹夫先生古稀記念論文集刊行会

前迫亮一・水ノ江和同　2001「九州地方南部における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸問題』

水ノ江和同　1997「北部九州の縄文後・晩期土器　～三万田式から刻目突帯文土器の直前まで～」『縄文時代』第８号

水ノ江和同　2001「九州北部における縄文時代集落の様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』

水ノ江和同　2002「九州の縄文集落」『犬養徹夫先生古稀記念論集　四国とその周辺の考古学』犬養徹夫先生古稀記念論文集刊行会

水ノ江和同　2005「九州の縄文後期集落」『西日本縄文文化の特徴』

山崎純男　2005「土器圧痕からみた食と生業」『土器研究の新視点～弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理～』土器の技術・調理研究会

山崎純男　2007「九州縄文時代生業活動の展開」『九州における縄文時代早期前葉の土器相』第17回九州縄文研究会福岡大会

高城町教育委員会　2004「細井地区遺跡群」『高城町文化財調査報告書』第14集

都城市教育委員会　1994「黒土遺跡」『都城市文化財調査報告書』第14集

都城市教育委員会　2006「坂元Ａ遺跡　坂元Ｂ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第71集

田野町教育委員会　2006「本野原遺跡三」『宮崎市文化財調査報告書（田野町文化財調査報告書）』第53集

弥生

石川悦雄　1979「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk.Ⅱ）」『宮崎考古』第９号　宮崎考古学会

中村直子　1992「南部九州における弥生土器の編年研究に関する問題」『南九州地域における原始・古代文化の諸様相に関する総合的研究』鹿児島大学法学部

中園　聡　1993「様式論と南部九州の弥生時代中期土器」『鹿児島考古』27　鹿児島考古学会

新富町教育委員会　1983「鐙遺跡・藤掛遺跡」新富町文化財調査報告書２集

鹿児島県教育委員会　1985「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（34）

鹿児島県教育委員会　1960「山ノ口遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書　第７集

古代・中世

中世墓資料集成研究会　2004「中世墓資料集成　－九州・沖縄編（2）－」

日本中世土器研究会　1997「中近世土器の基礎研究Ⅻ」

都城市教育委員会　2000「池ノ友遺跡（第１次調査）」都城市文化財調査報告書　第49集

都城市教育委員会　2000「郡元地区遺跡群」都城市文化財調査報告書　第51集

都城市教育委員会　2004「馬渡遺跡」都城市文化財調査報告書　第62集

宮崎県教育委員会　1995「学頭遺跡・八児遺跡」県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書

宮崎県教育委員会　2003「八幡遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第70集

宮崎県教育委員会　2004「池島遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第84集

近世

鹿児島市教育委員会　2001「大龍遺跡Ｂ地点」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（34）

都城市史編さん委員会　2005「都城市史」通史編　中世・近世

都城市史編さん委員会　2003「都城市史」史料編　近世３

宮崎県教育委員会　1995「八幡遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第70集

図　　版

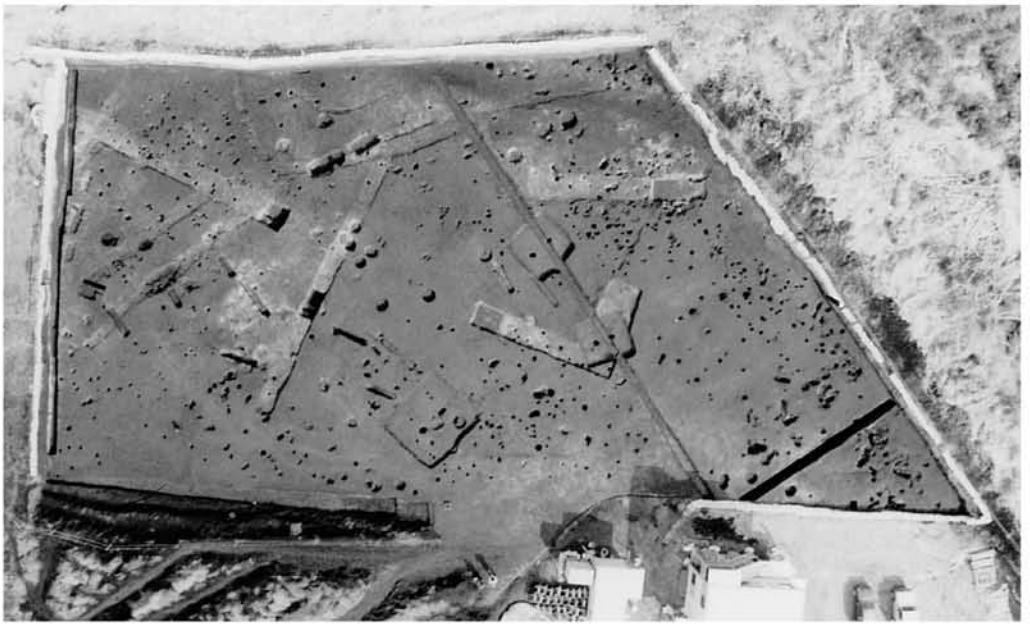
筆無遺跡遠景（都城市安久方面を望む）

図版 2

A区

B区（B地点）

B区（C地点）



B区
（D１地点、北半分）

B区
（D１地点、南半分）

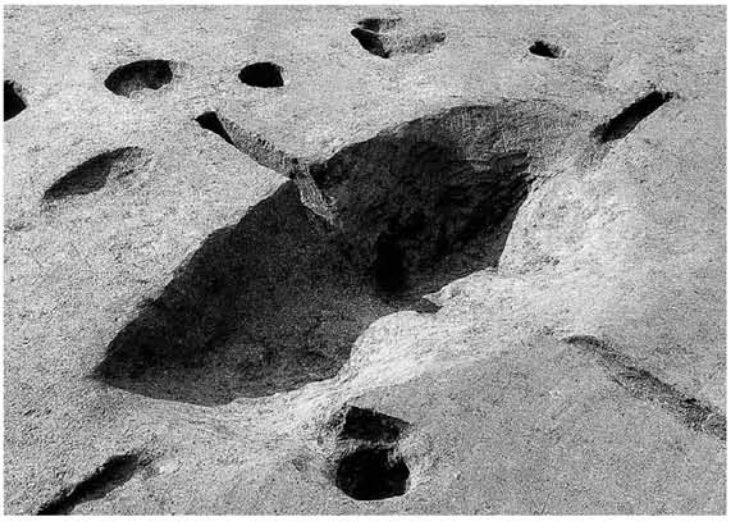
B区（D２地点）

図版４

Ａ区
上段左：１号道状遺構完掘状況（古代）
上段右：１号土坑墓（古代）
下段左：畝状遺構断面（中世）

Ｂ区　遺構検出状況（Ｃ地点西半分丘陵部、右上の谷を挟んでＡ区）

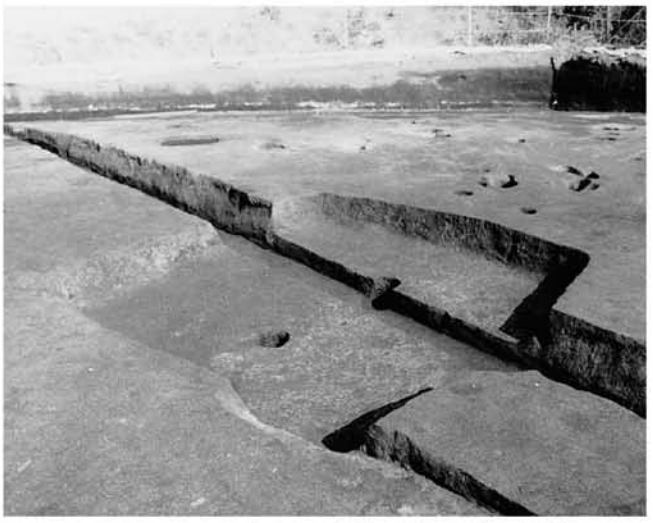
Ｂ区　１号土坑遺物出土状況（縄文）

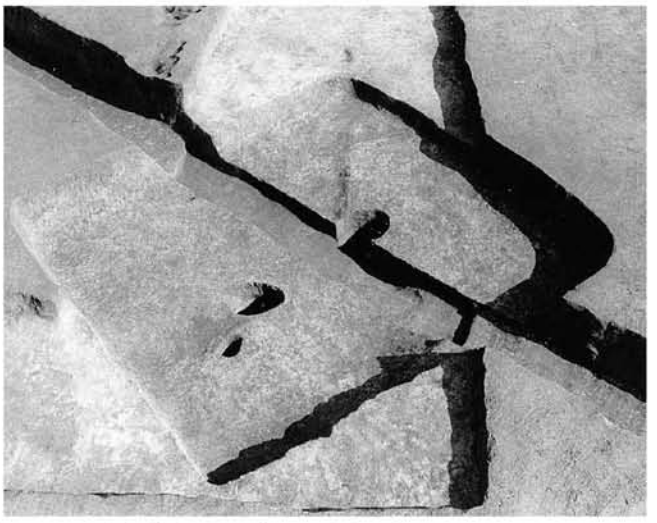


Ｂ区　３号土坑完掘状況（縄文）

Ｂ区　１～３号竪穴住居跡分布状況（弥生、Ｄ１地点北半分）

図版６





Ｂ区　１号・２号竪穴住居跡完掘状況（弥生、Ｄ１地点北半分、左：１号、右：２号）

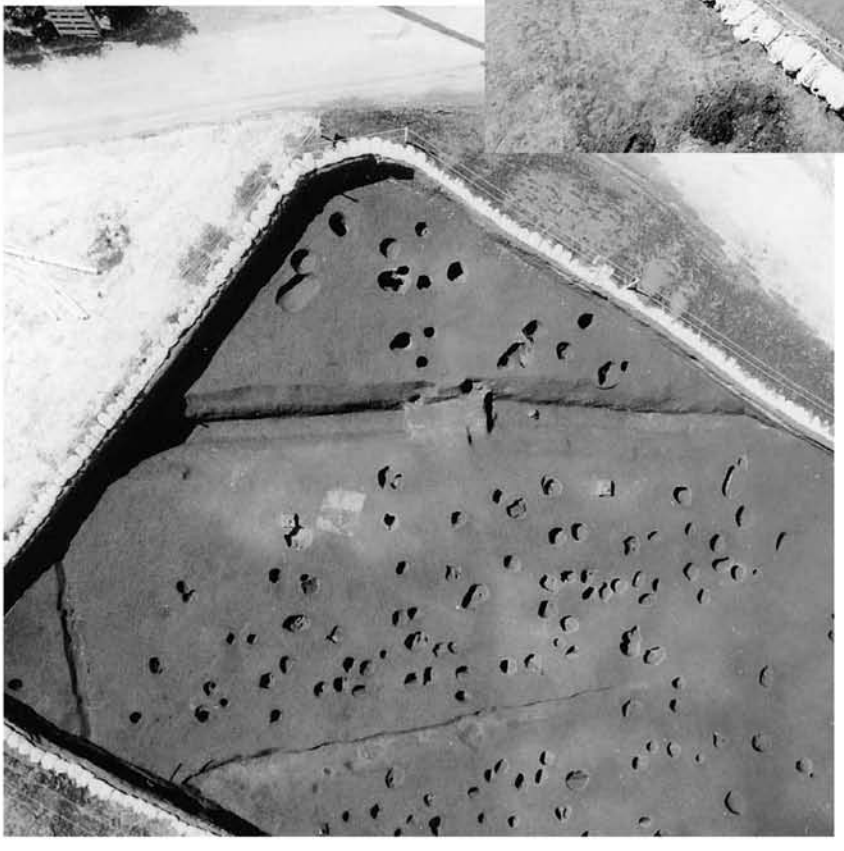
Ｂ区　３号竪穴住居跡遺物出土状況（弥生、Ｄ１地点北半分）

Ｂ区　遺物出土状況（SA1、遺物番号134）

Ｂ区　１号土坑遺物出土状況（弥生、遺物番号135）

Ｂ区
ピット集中区
（古代・中世、Ｂ地点）

Ｂ区
２号溝状遺構遠景
（古代、Ｄ１地点、部分）



Ｂ区
４号溝状遺構
（中世、Ｂ地点、部分）

図版８

Ｂ区
２号溝状遺構（古代）
左：完掘状況（Ｂ地点）
右：埋土堆積状況（Ｄ１地点）

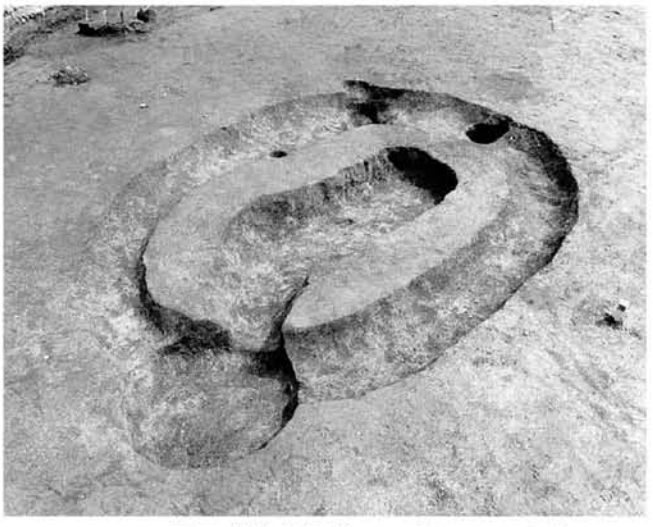
Ｂ区　４号溝状遺構
出入口想定部分（中世、Ｂ地点）

Ｂ区　３号溝状遺構（手前）と１号道状遺構（奥）
（古代、Ｄ１地点、部分）

Ｂ区　２号道状遺構
（中世、Ｄ２地点）

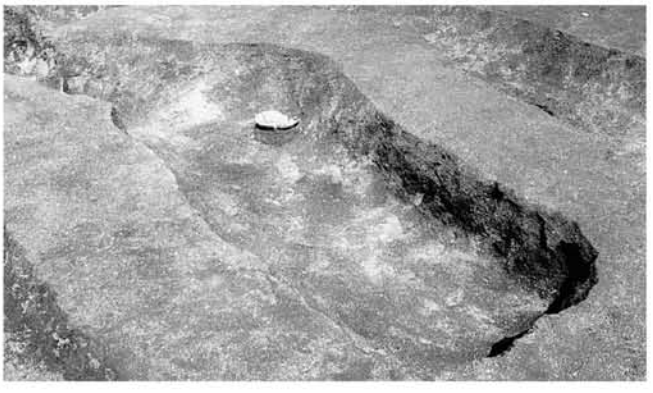
B区　1号周溝墓完掘状況（古代・C地点）

B区　2号周溝墓完掘状況（古代・B地点）



B区　3号周溝墓完掘状況（古代・B地点）

B区　1号周溝墓出土遺物（土師器甕）



B区　3号周溝墓の中央土壙内遺物出土状況
上段：完掘状況　下段：出土状況近影

B区　1号周溝状遺構（古代、C地点）
上段：検出状況　下段：完掘状況

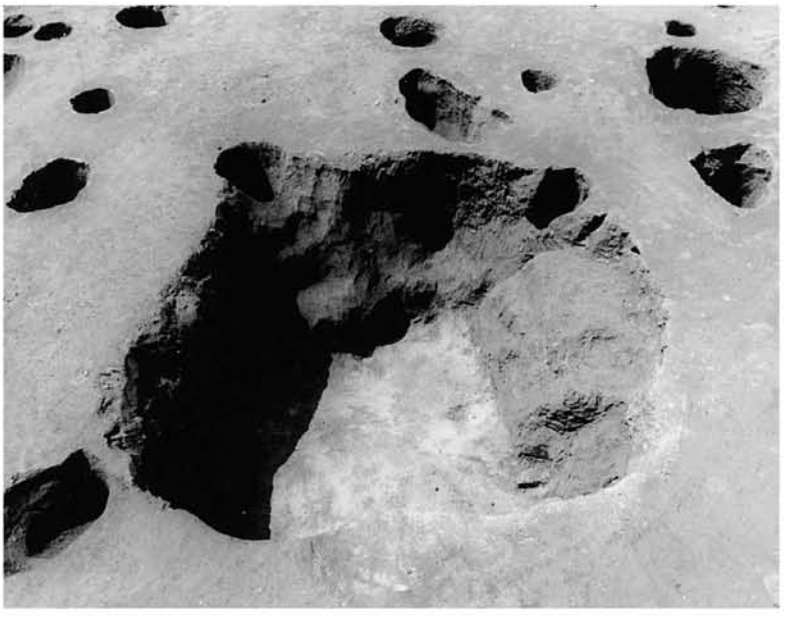
図版10

Ｂ区　１号土坑墓
（中世、Ｄ１地点）
左：完掘状況
下：副葬品出土状況

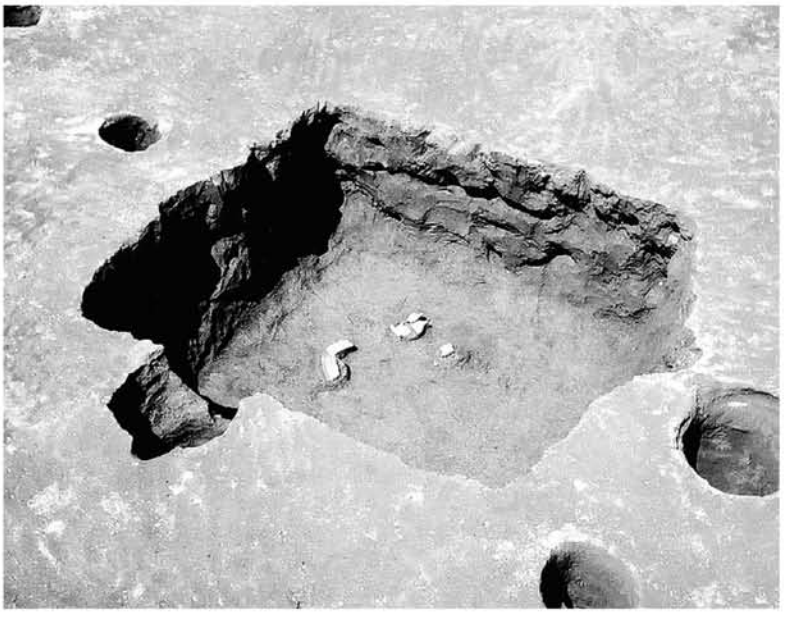
Ｂ区　湧水の状況（左写真の水際付近で流れ込みによる縄文土器が集中して出土、Ｄ２地点）

Ｂ区　土層堆積状況（Ｄ２地点、上段右の写真の中央土層観察ベルト）

B区　１号・２号溝状遺構埋土堆積状況（近世、Ｄ１地点、左：１号、右：２号）



B区
１号土坑完掘状況
（近世、Ｄ１地点）

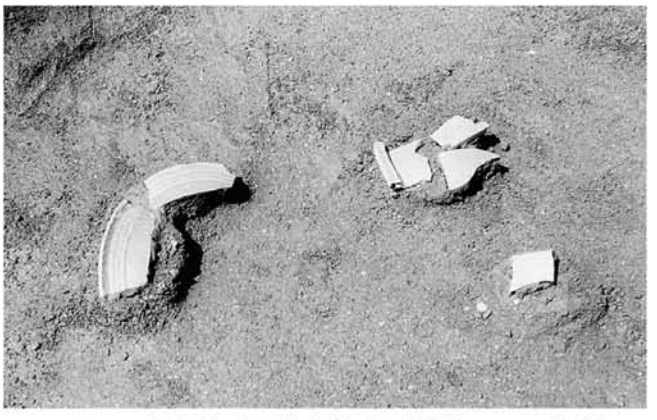


B区
２号土坑完掘状況
（近世、Ｄ１地点）

図版12

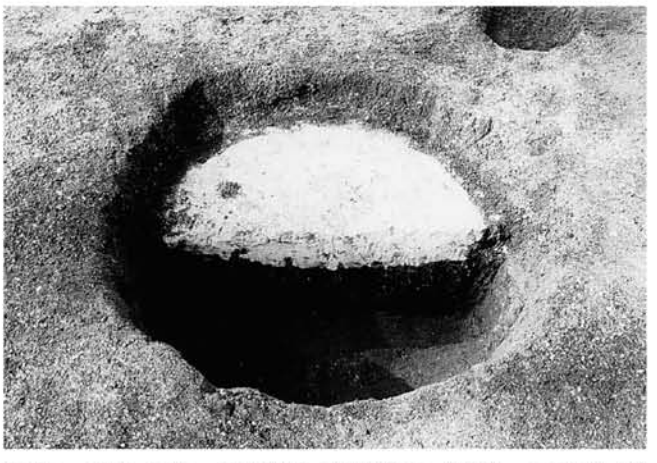
B区　３号・４号土坑完掘状況（近世、Ｄ１地点、手前：４号、奥：３号）

B区　３号土坑床面検出状況（近世、Ｄ１地点）

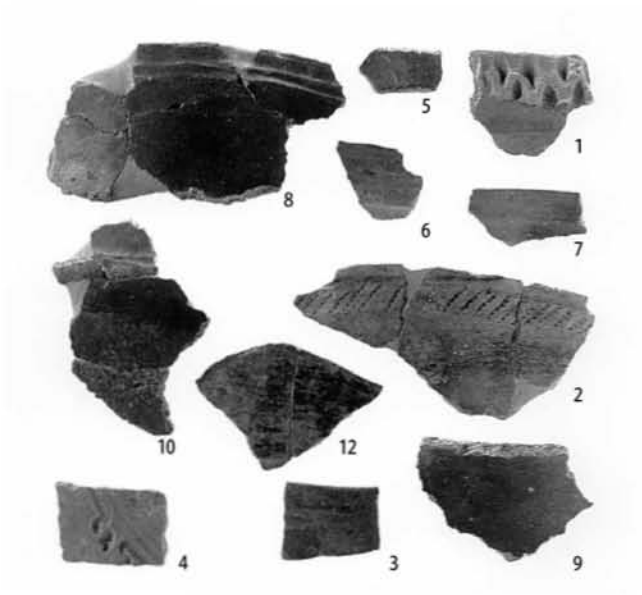


B区　３号土坑床面検出状況（近世、Ｄ１地点）

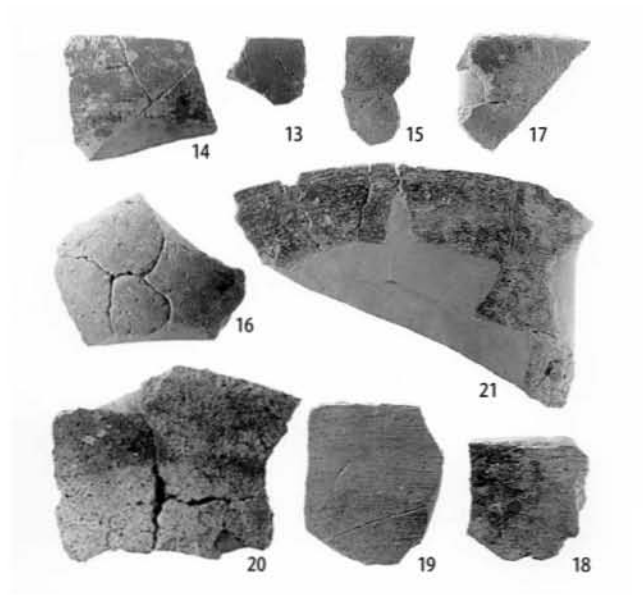
B区　５号土坑　茶臼出土状況（近世、Ｄ１地点）



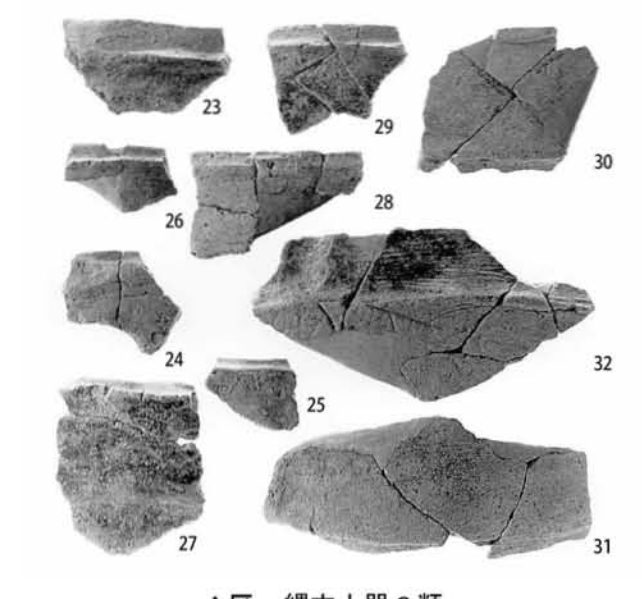
B区　８号土坑　白色粘土充填状況（近世、Ｄ１地点）



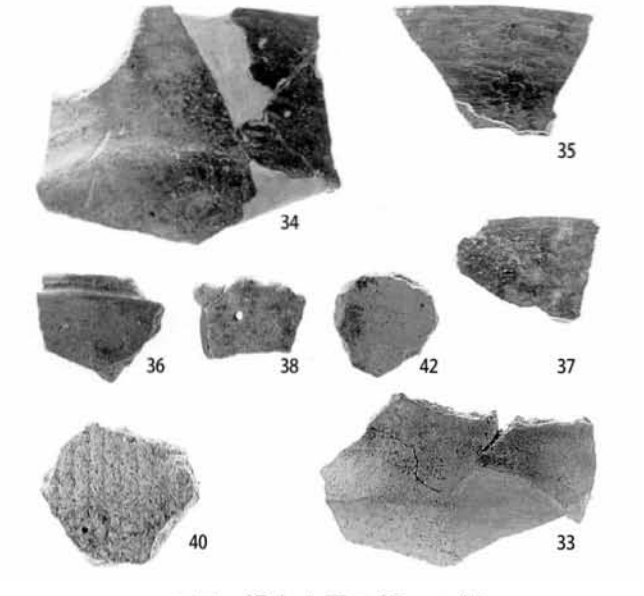
A区　縄文土器１類～４類



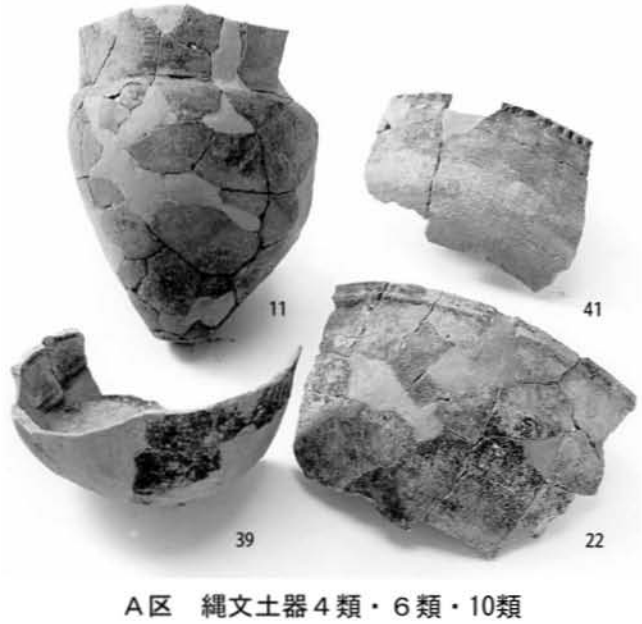
A区　縄文土器５類



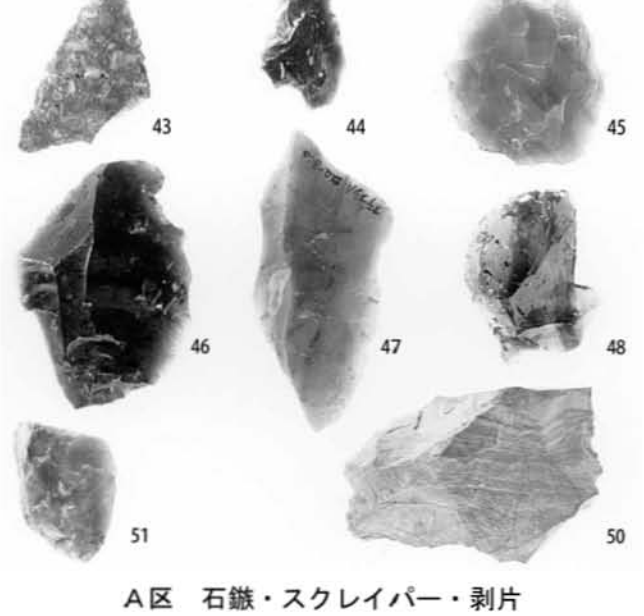
A区　縄文土器６類



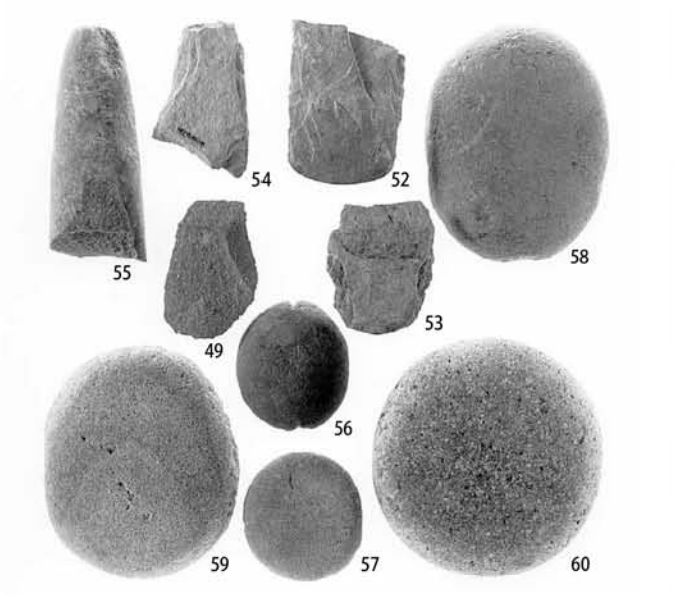
A区　縄文土器７類～９類



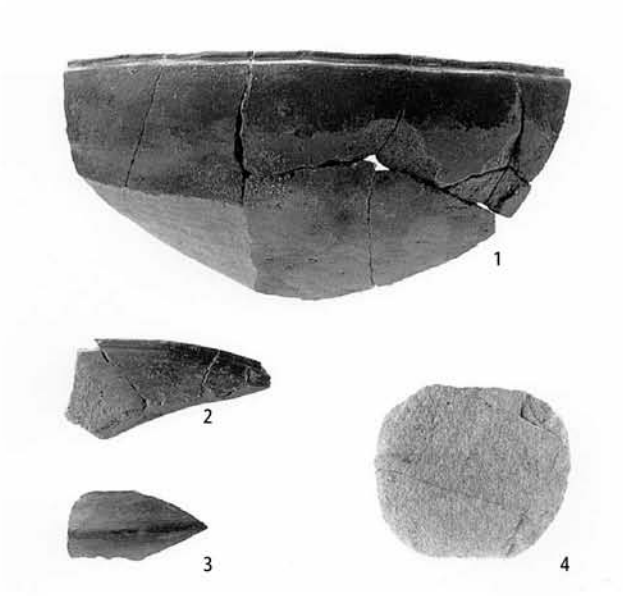
A区　縄文土器４類・６類・10類



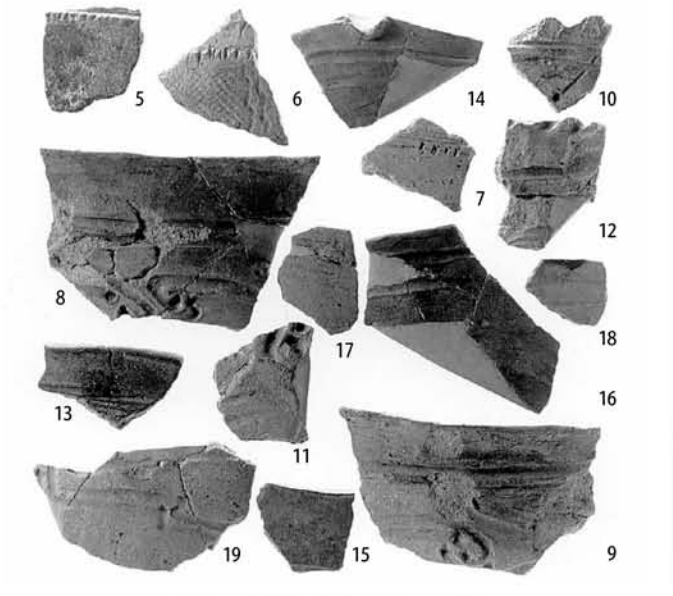
A区　石鏃・スクレイパー・剥片



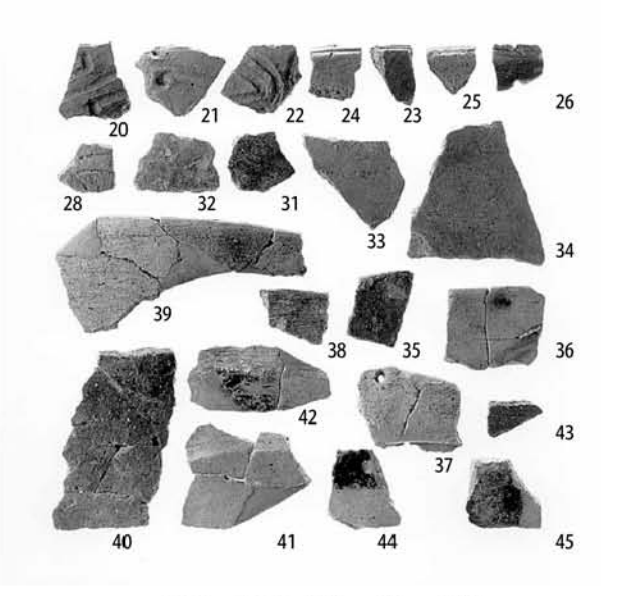
Ａ区　石斧・石錘・敲石・磨石



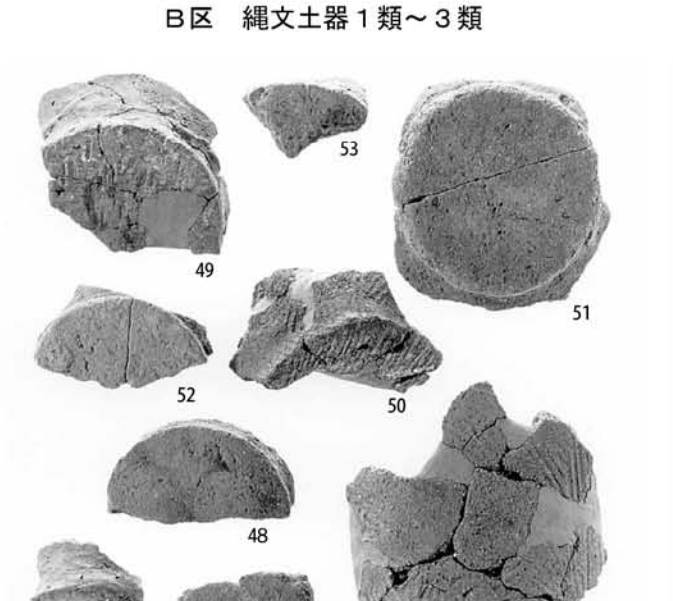
Ｂ区　ＳＣ１出土遺物



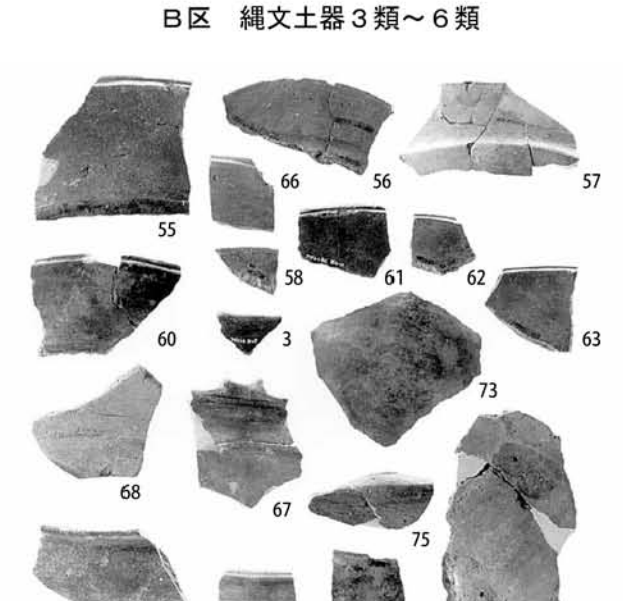
Ｂ区　縄文土器１類～３類



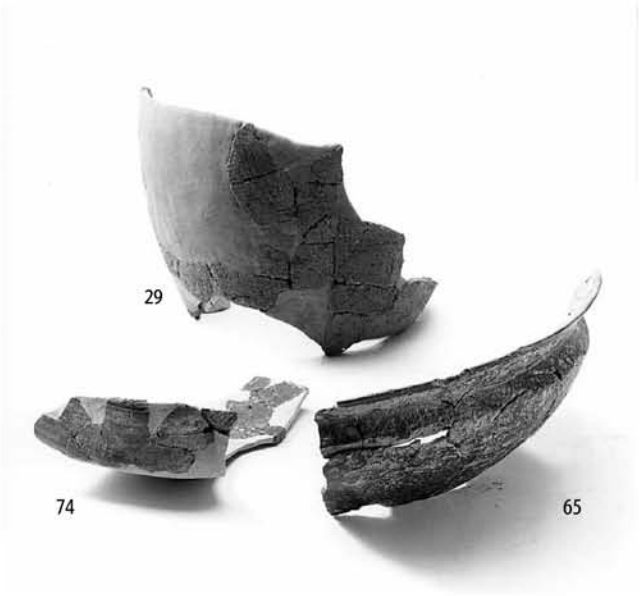
Ｂ区　縄文土器３類～６類



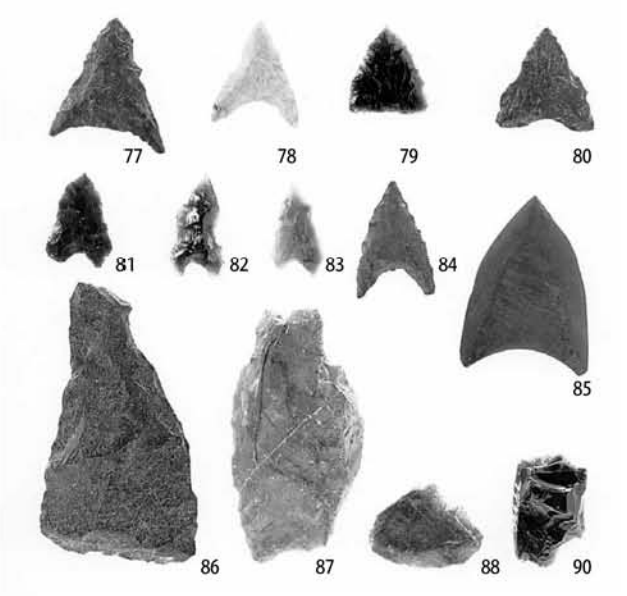
Ｂ区　縄文土器５類（底部）



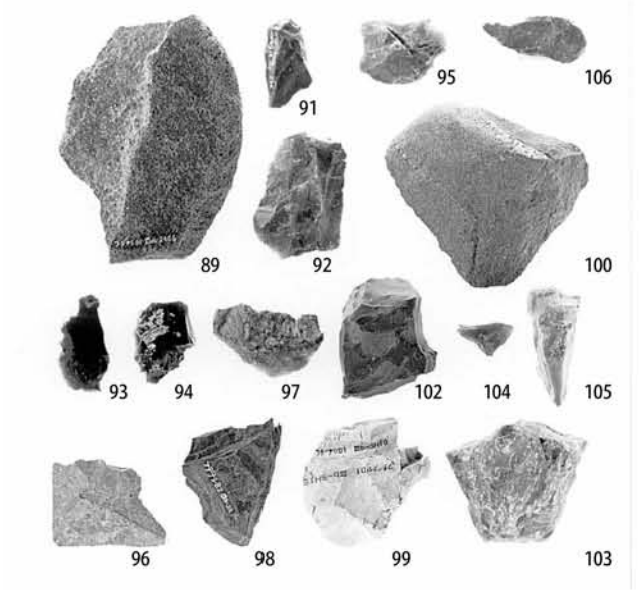
Ｂ区　縄文土器７類～12類



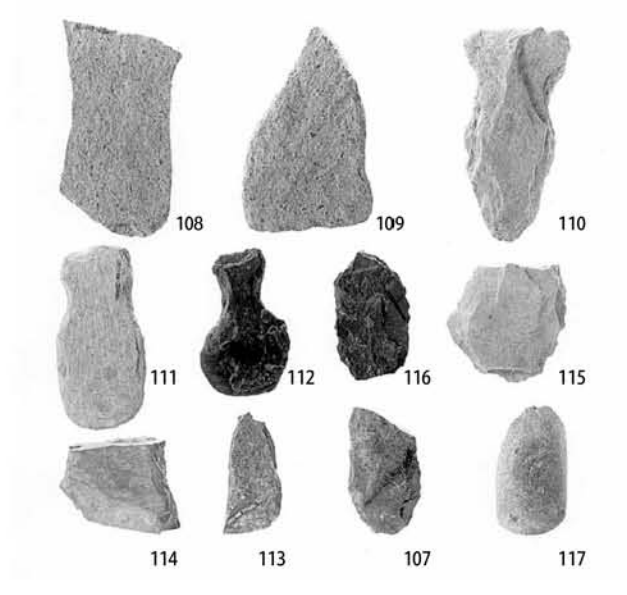
B区　縄文土器５類・９類・12類



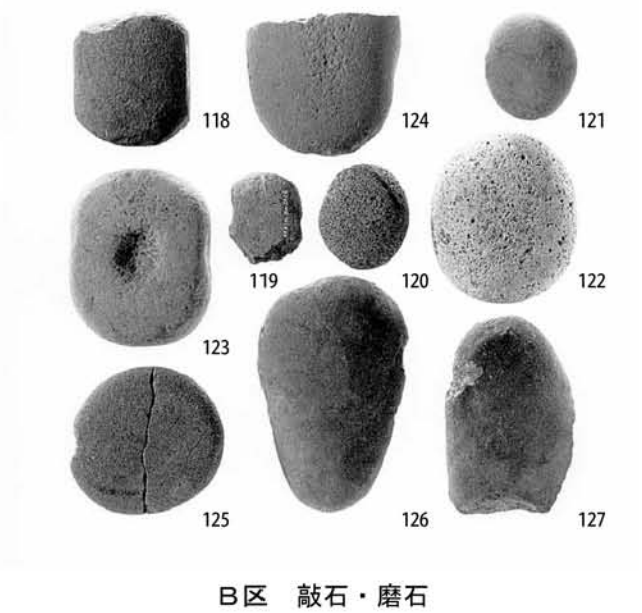
B区　石鏃・石匙・スクレイパー・楔形石器



B区　スクレイパー・剥片・石核



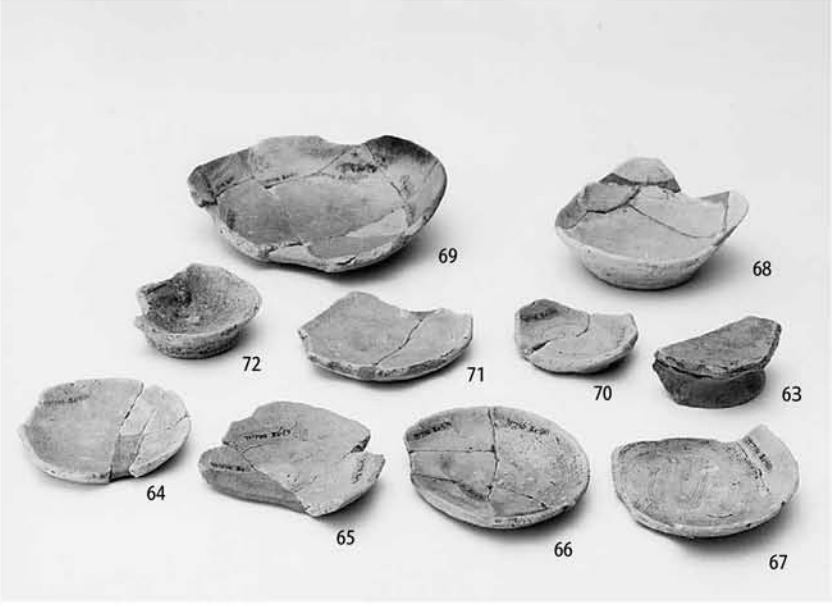
B区　打製石斧・磨製石斧



B区　敲石・磨石

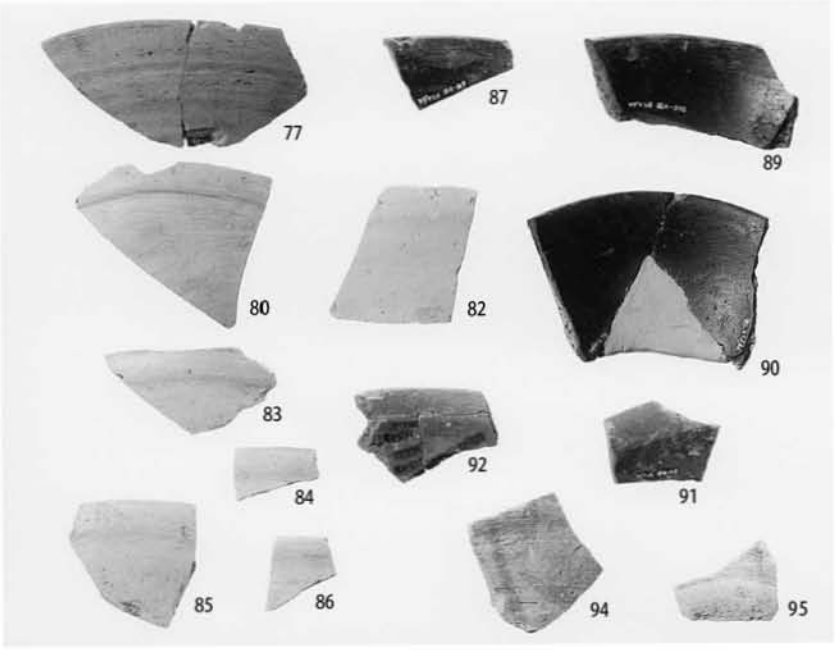
B区　磨石・石皿

A区
1号土坑墓出土遺物
（埦）



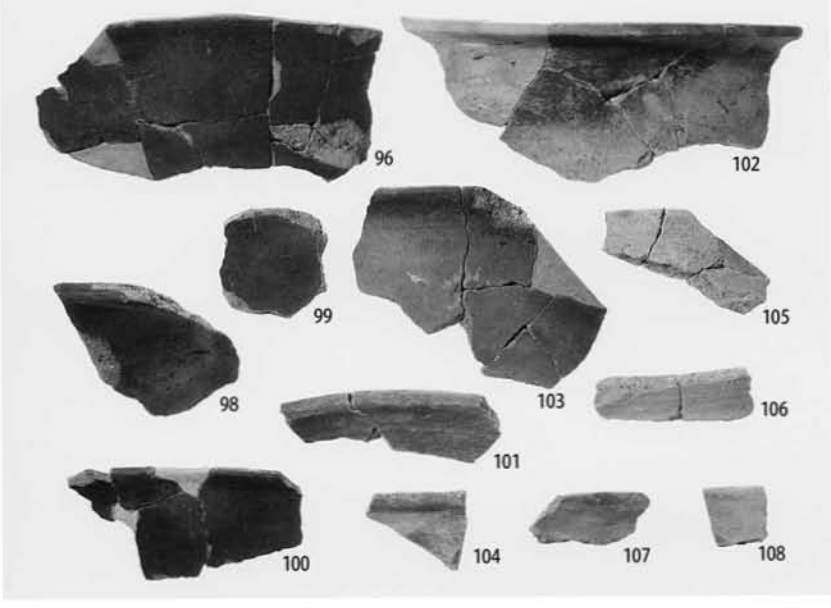
A区
1号道状遺構出土遺物（63、高台付埦）
包含層出土遺物1（皿・坏）

A区
包含層出土遺物2
（高台付埦・黒色土器）

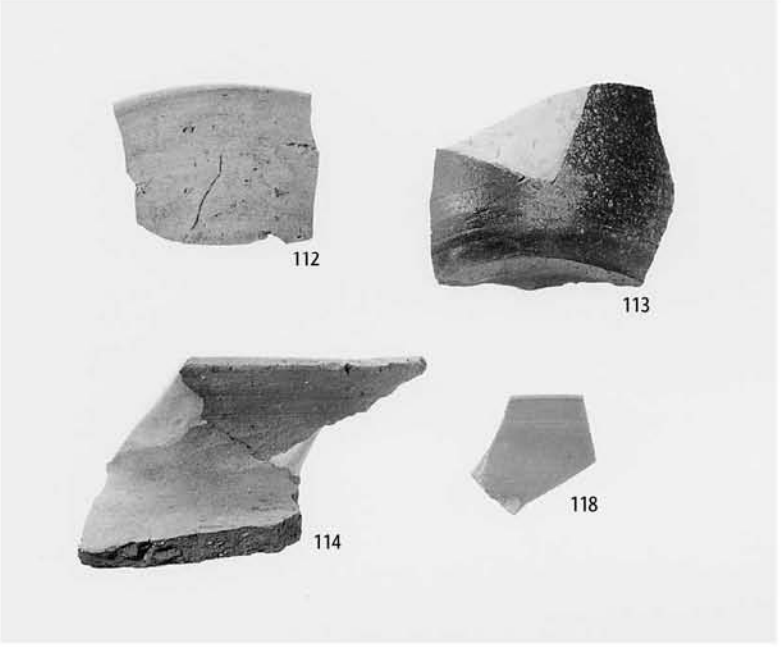


A区
包含層出土遺物３
（高台付椀・黒色土器・墨書土器）

A区
包含層出土遺物４
（土師器：鉢・甕）



A区
包含層出土遺物５
（土師器：鉢・甕）



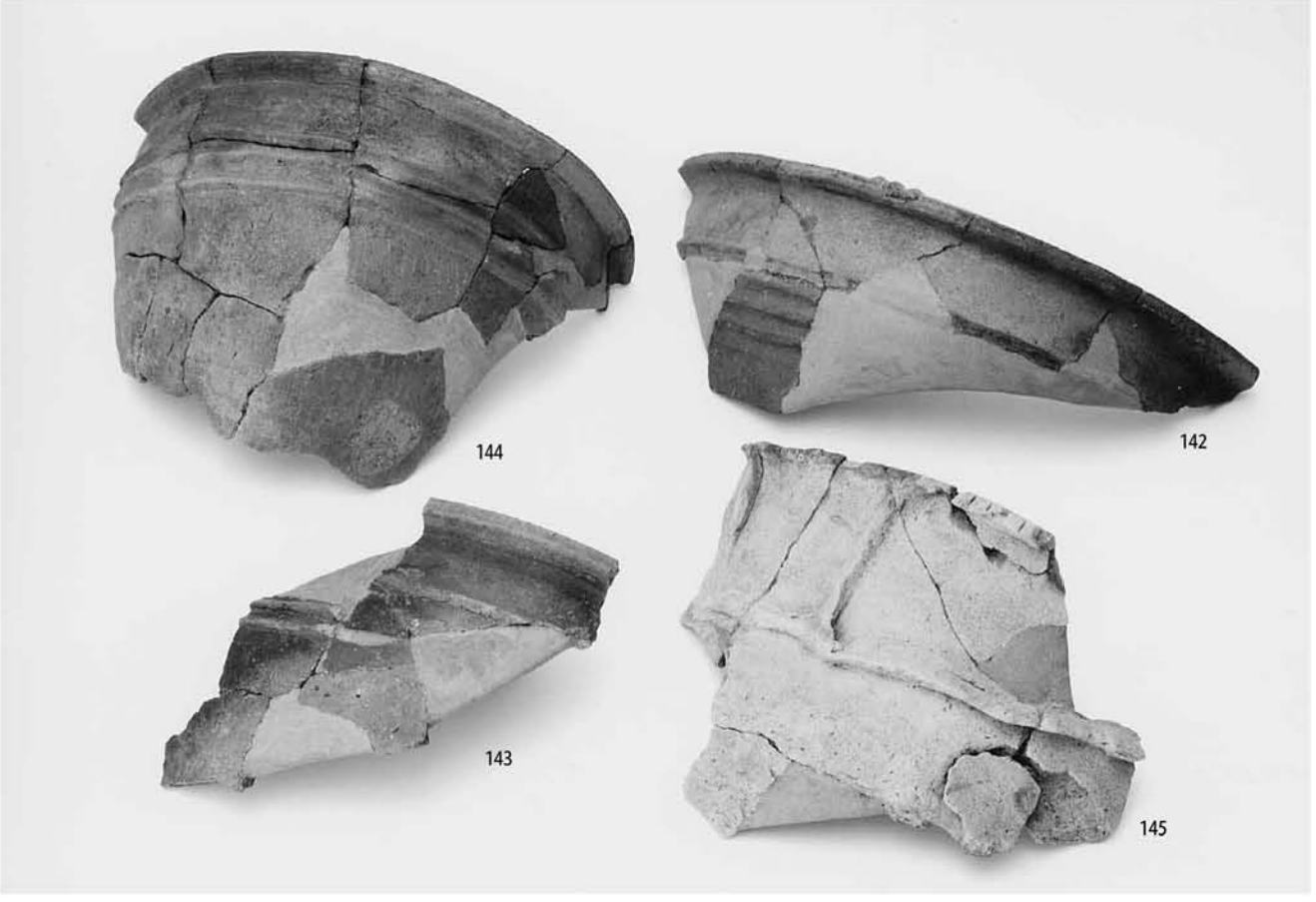
Ａ区
包含層出土遺物６
（須恵器・越州窯系青磁）

Ａ区　包含層出土遺物７（須恵器、高台付碗・坏・壺）

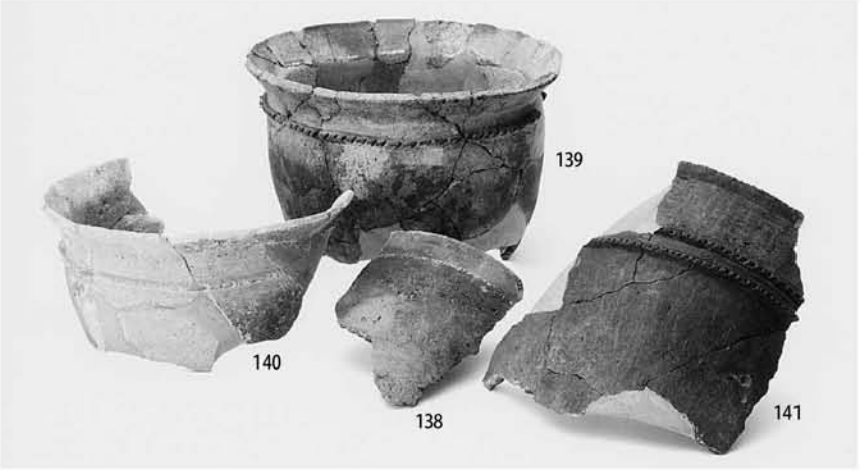
Ａ区　包含層出土遺物８（刀子）

B区　１号竪穴住居跡出土遺物

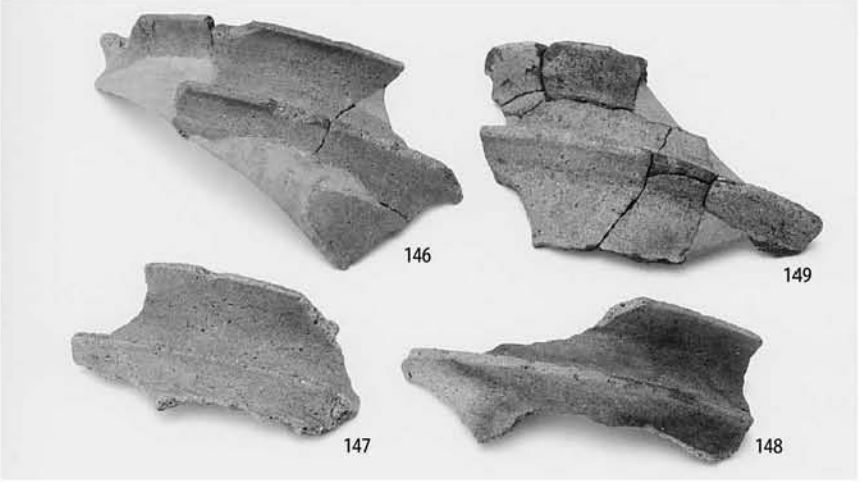
B区　２号竪穴住居跡出土遺物



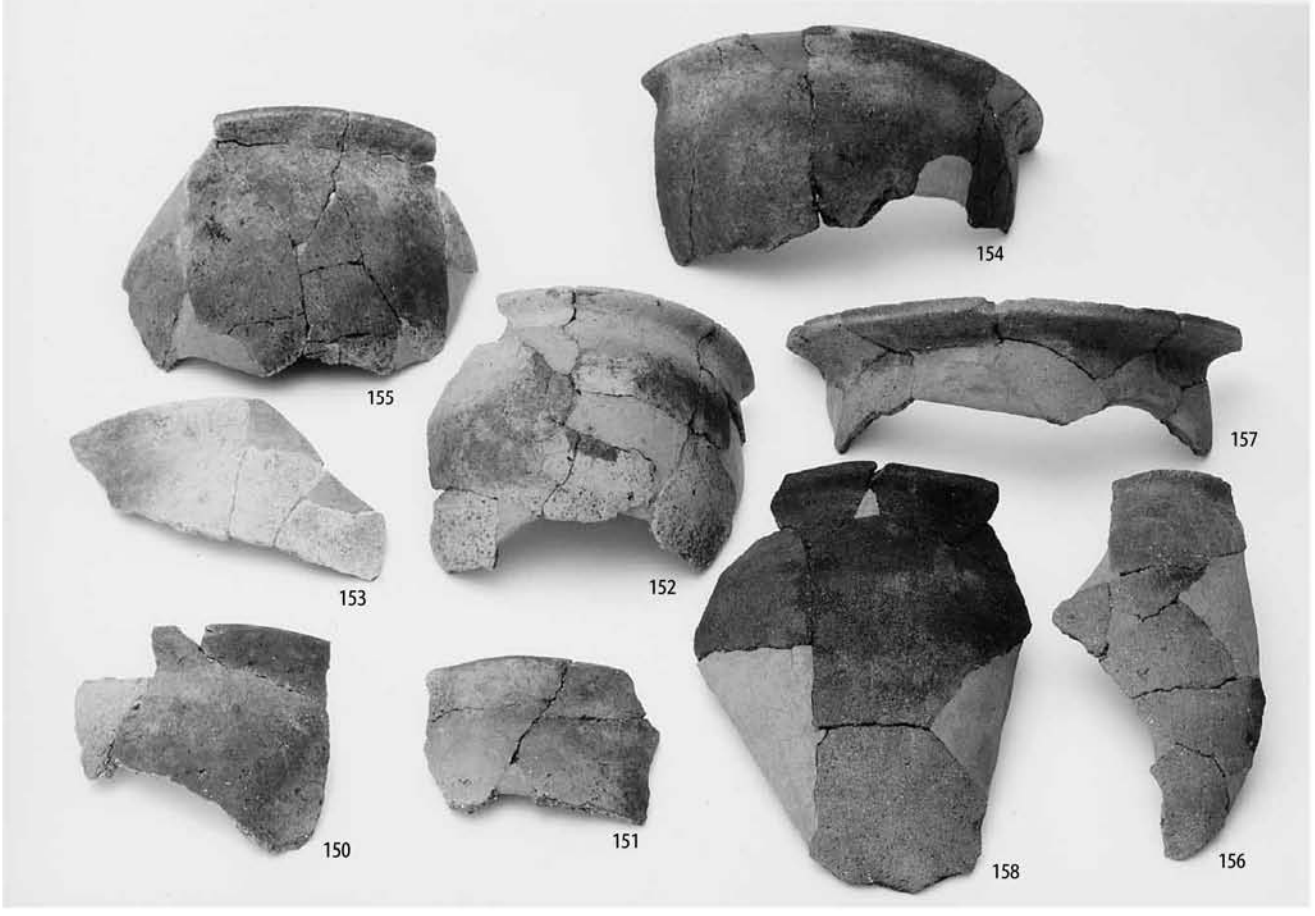
B区　包含層出土遺物１（弥生土器：甕）



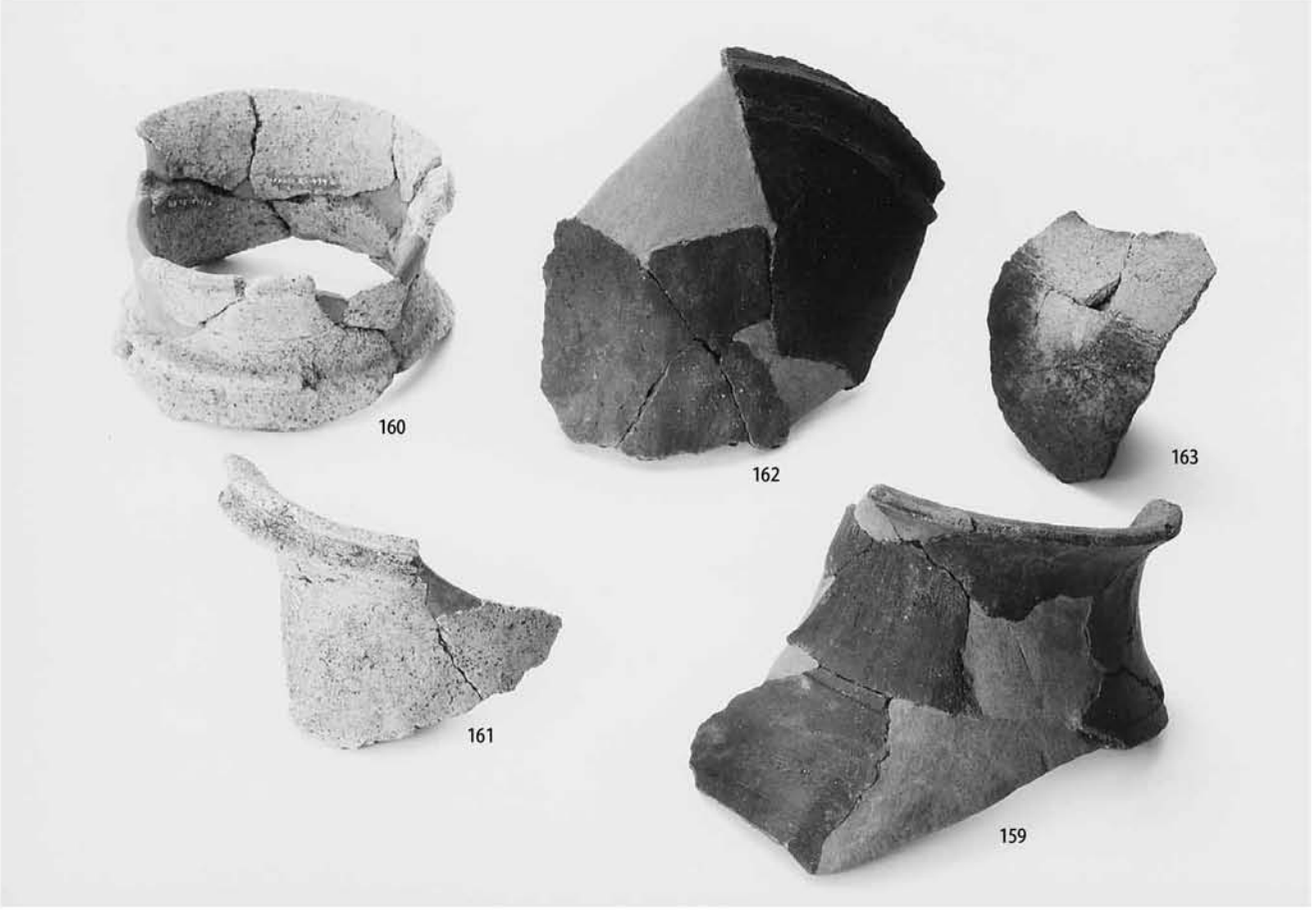
B区　包含層出土遺物２
（弥生土器：甕）



B区　包含層出土遺物３
（弥生土器：甕）



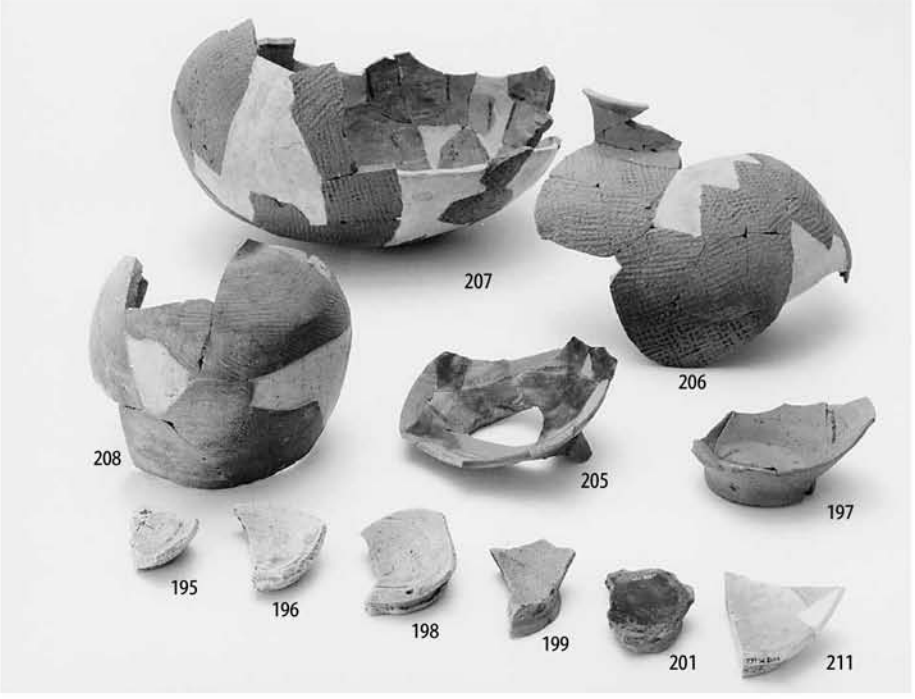
B区　包含層出土遺物４（弥生土器：甕）



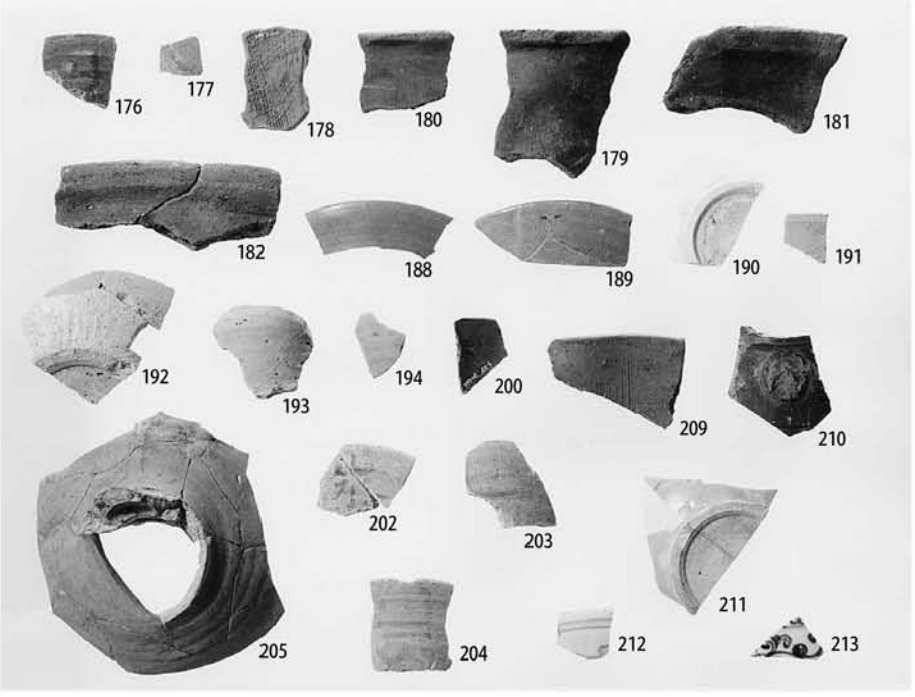
B区　包含層出土遺物５（弥生土器：壺）

B区　包含層出土遺物６（弥生土器：底部）

B区　２号溝状遺構出土遺物



B区　４号溝状遺構出土遺物



B区
２・４号溝状遺構出土遺物

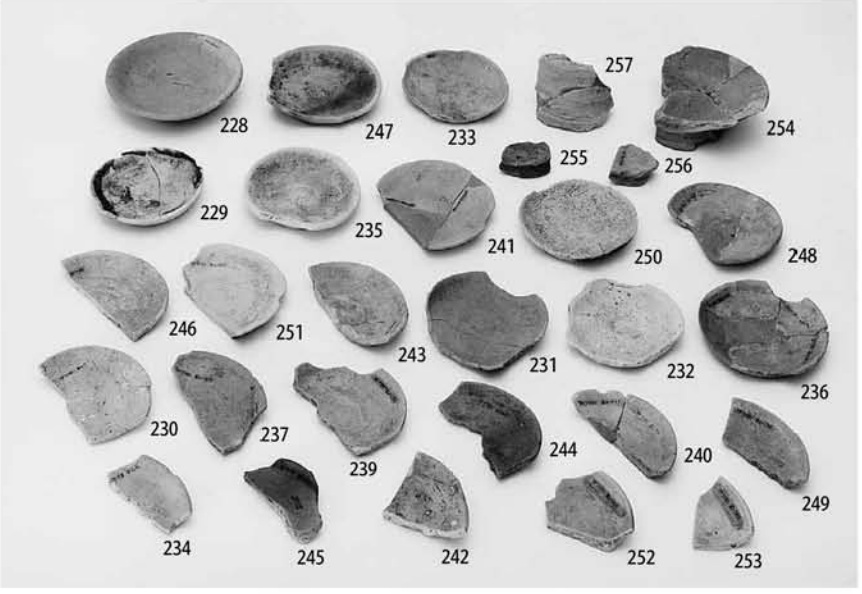
B区　２号溝状遺構出土遺物（須恵器：甕）

B区　周溝墓出土遺物（高台付埦・甕・鉢）

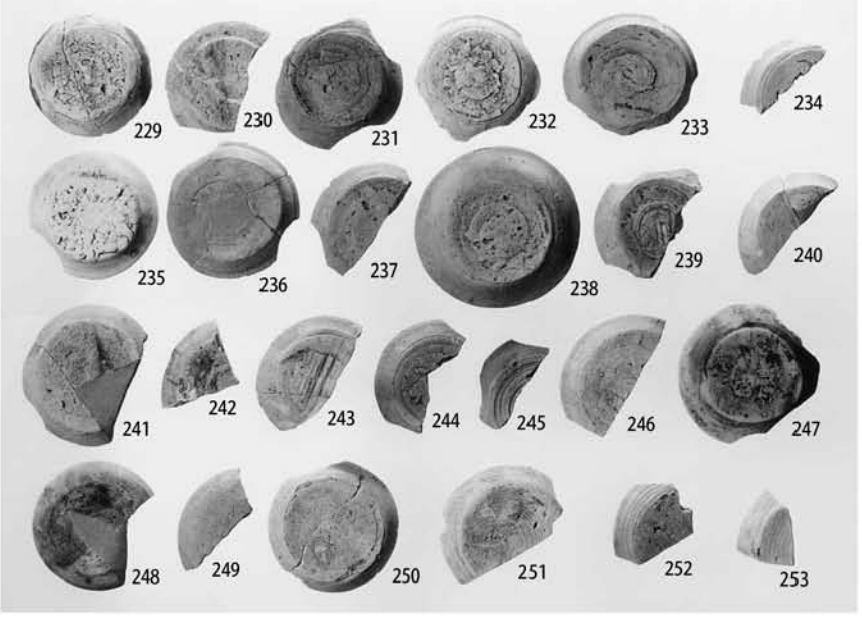
B区　１号土坑墓副葬品
（刀子：布付着）

B区　１号土坑墓副葬品
（刀子）

B区　土坑内出土遺物



B区　包含層出土遺物１
（土師皿の内面）



B区　包含層出土遺物２
（土師皿の底部外面）

258

259

260

261

262

264

265

266

267

268

270

271

274

275

276

282

283

284

285

286

287

291

297

298

299

302

304

308

310

311

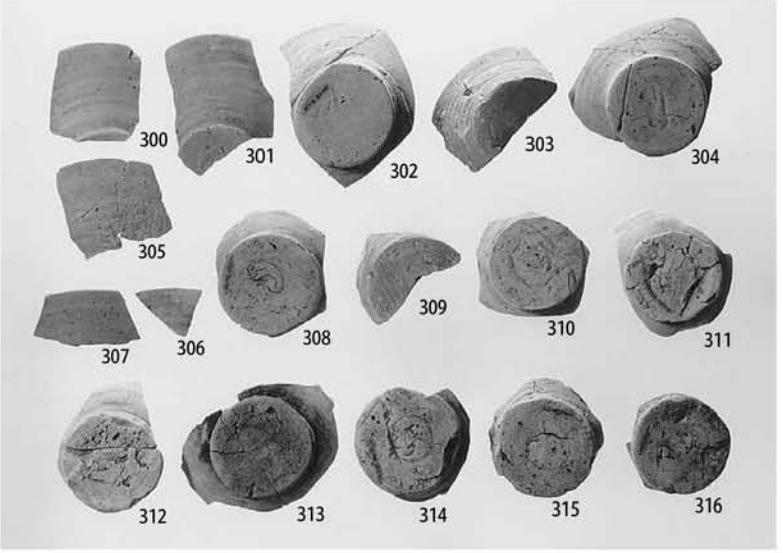
313

352

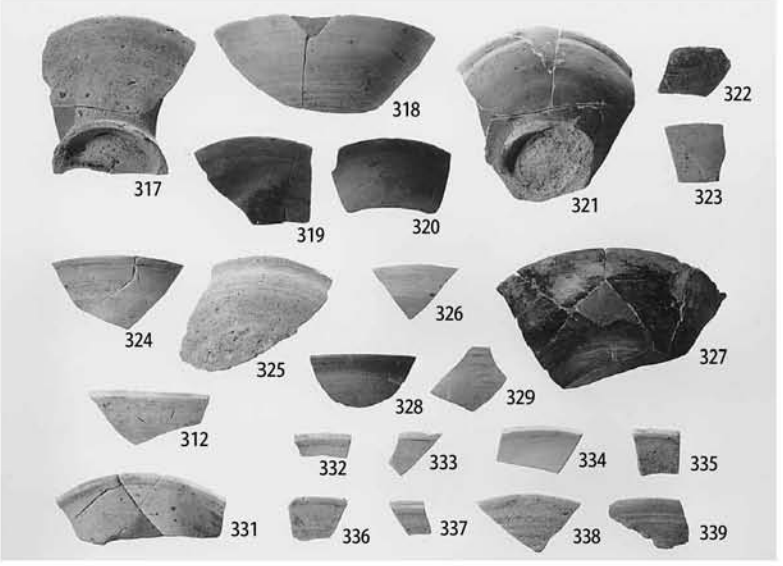
354

360

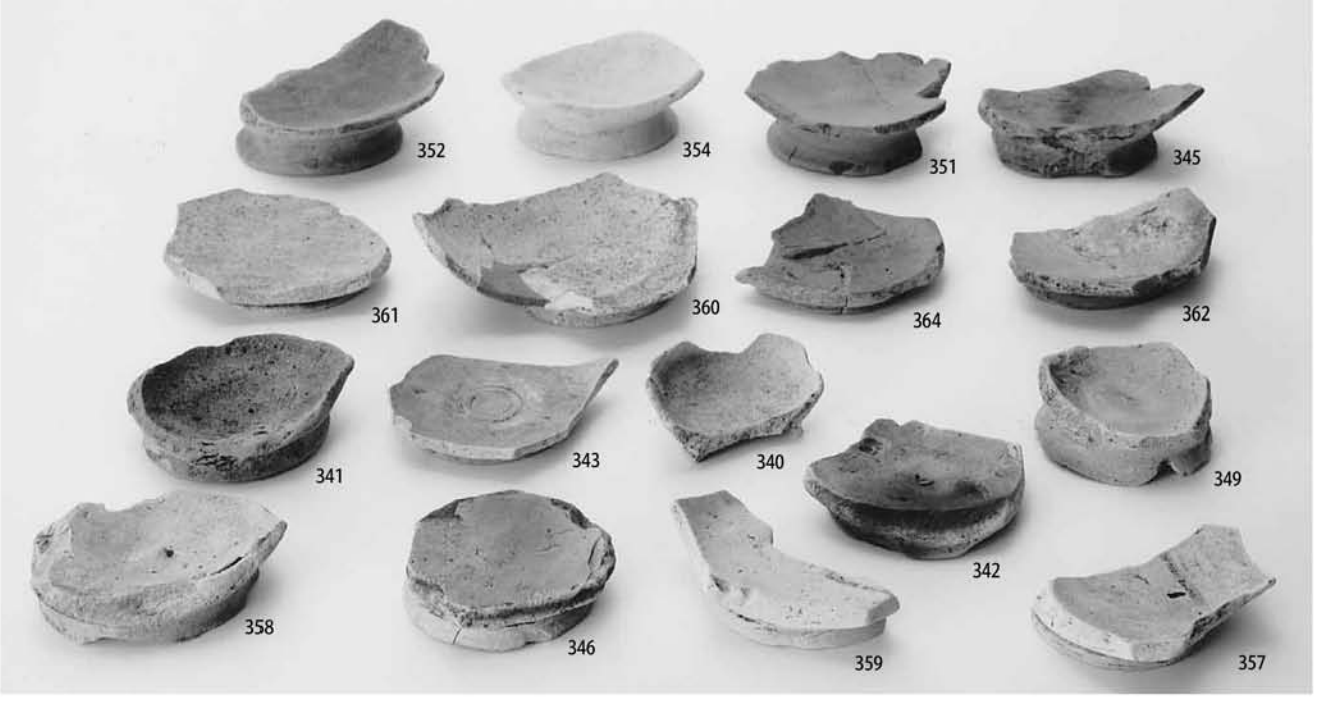
B区　包含層出土遺物３
（坏・埦・高台付埦）



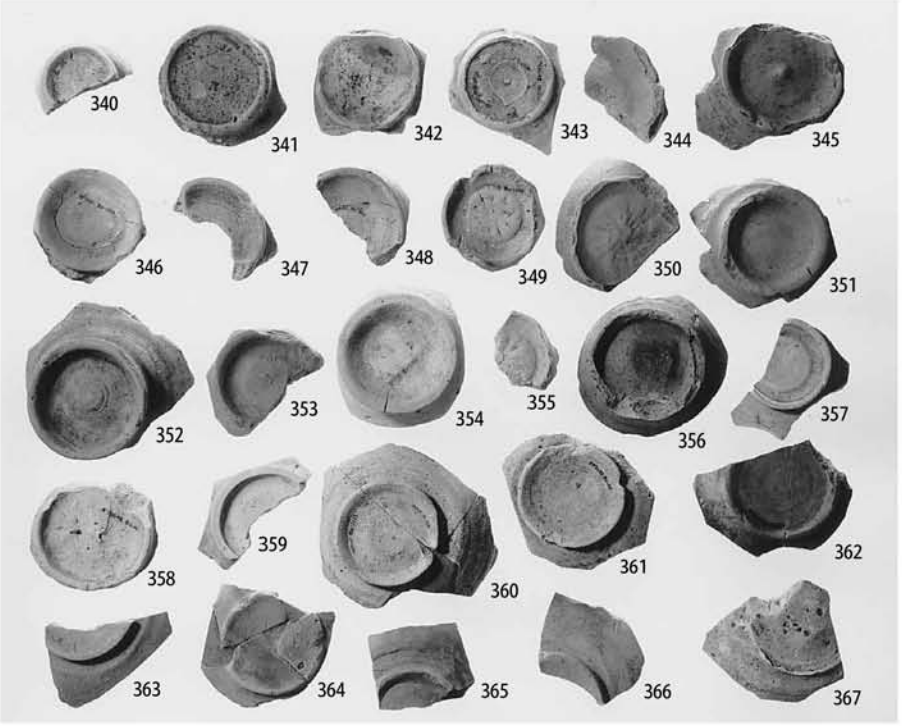
B区　包含層出土遺物４
（土師埦の底部外面）



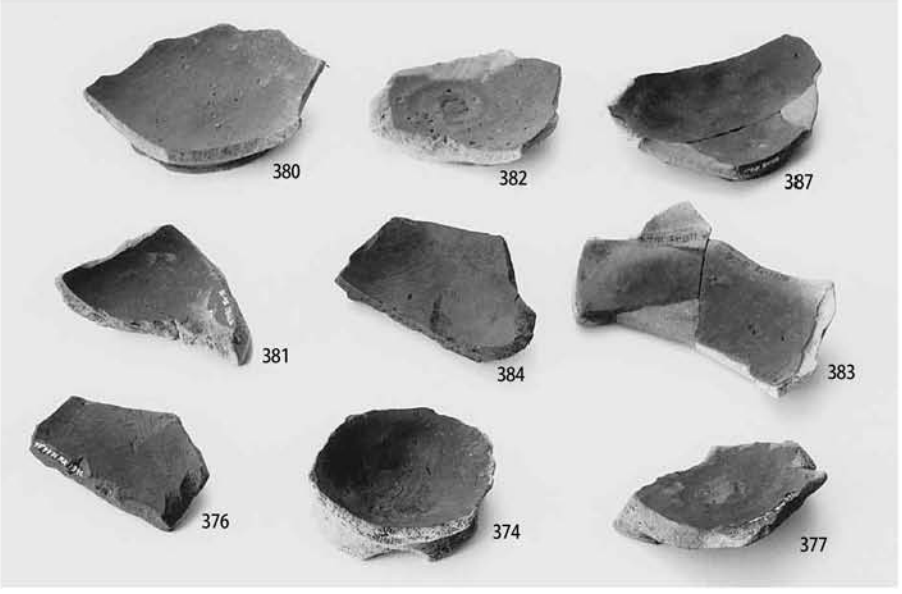
B区　包含層出土遺物５
（高台付埦）



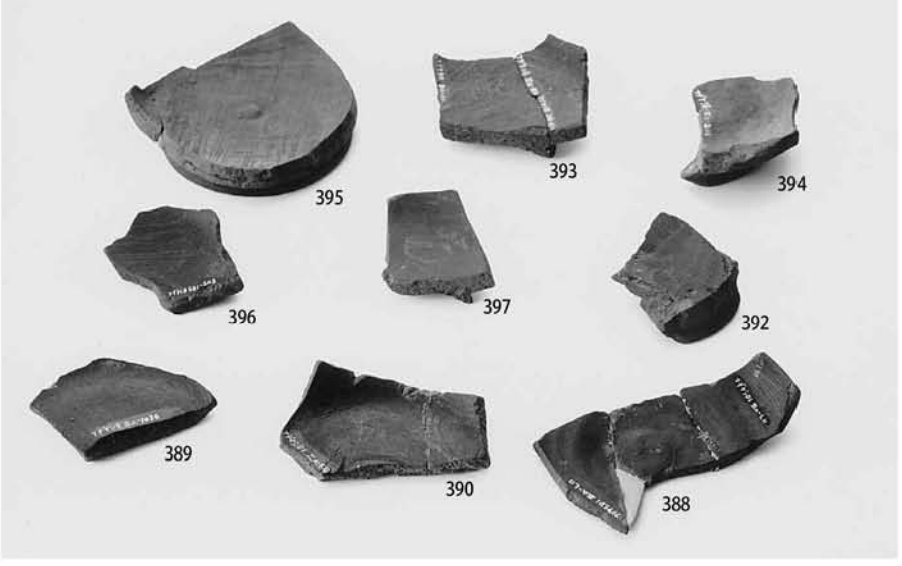
B区　包含層出土遺物６（埦・高台付埦）



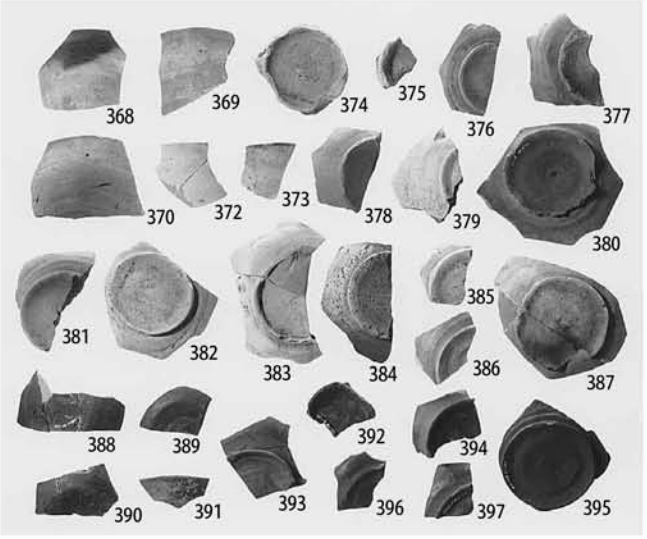
B区　包含層出土遺物７
（高台付椀の底部外面）

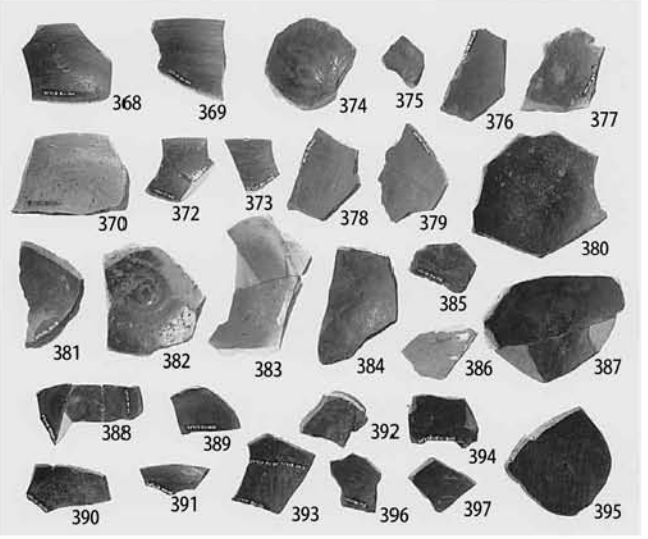


B区　包含層出土遺物８
（黒色土器：内黒）



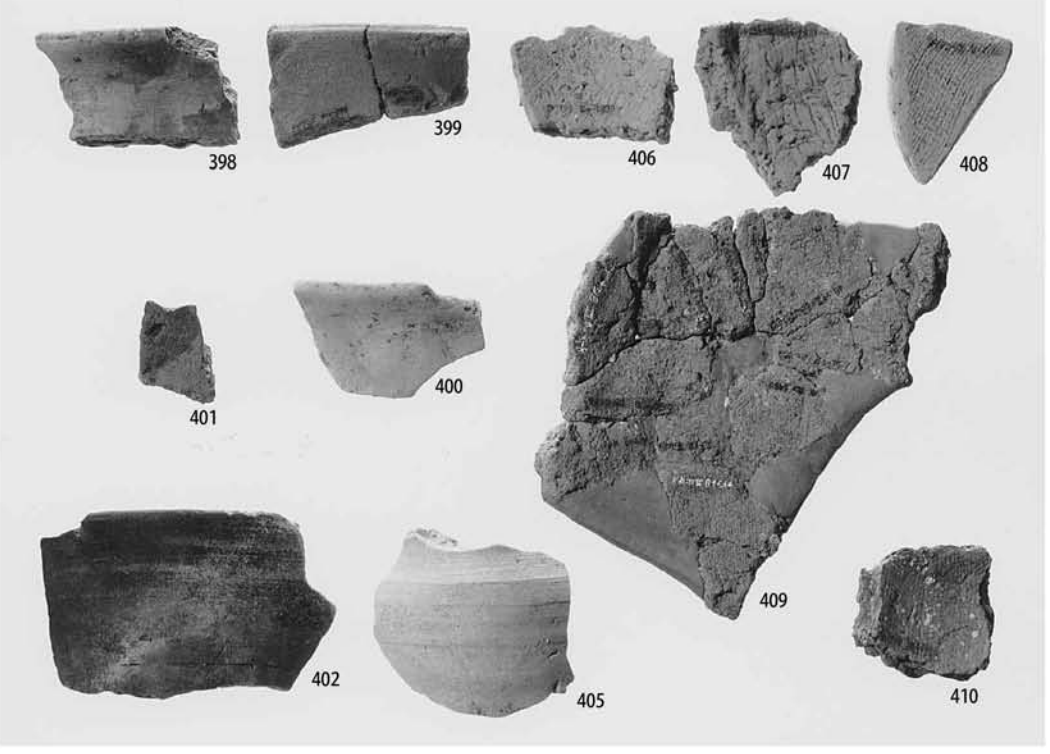
B区　包含層出土遺物９
（黒色土器：両黒）



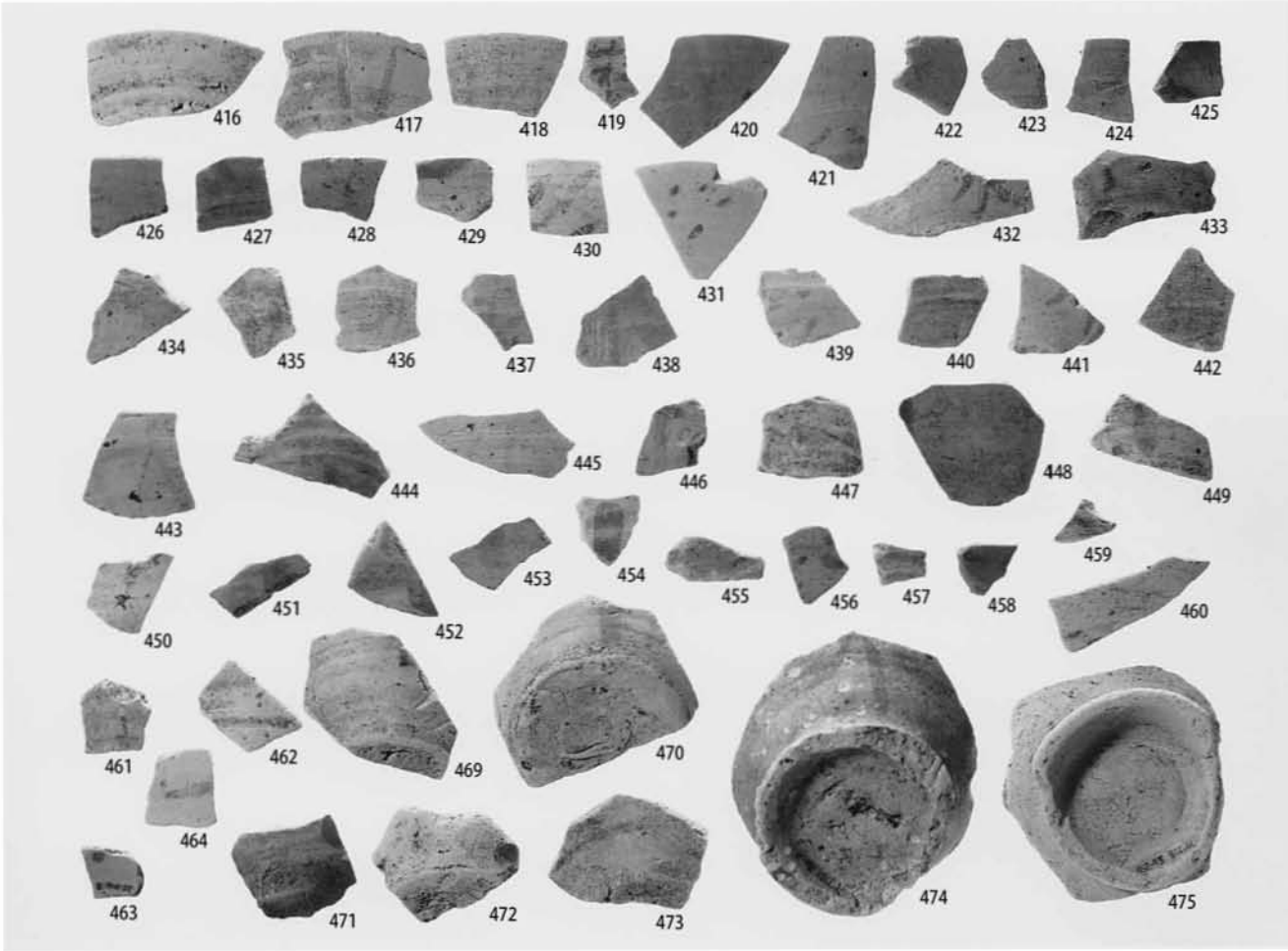


B区　包含層出土遺物10（黒色土器、左：外面、右：内面）

B区　包含層出土遺物11（鍋・鉢）



B区　包含層出土遺物12（甕・鉢・壺・布痕土器）

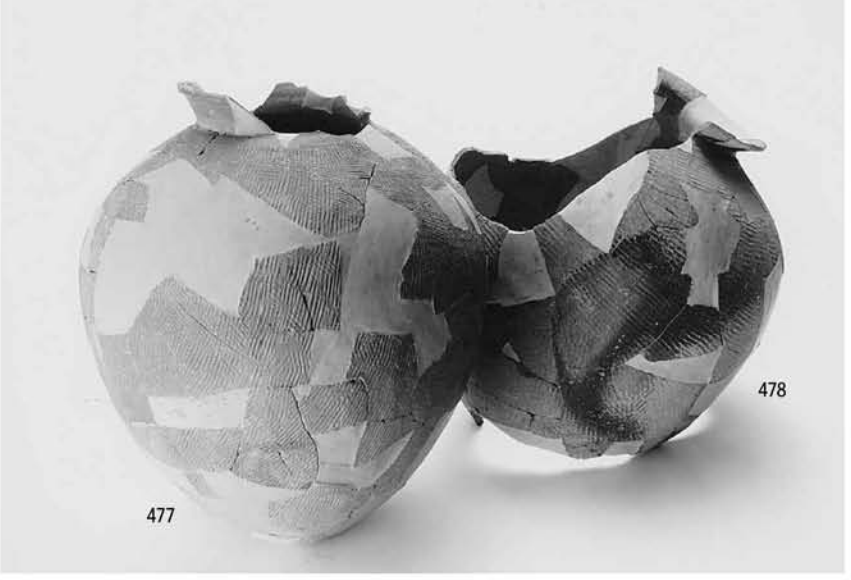


B区　包含層出土遺物13（墨書土器）

B区　包含層出土遺物14
（墨書土器「山水」、坏）

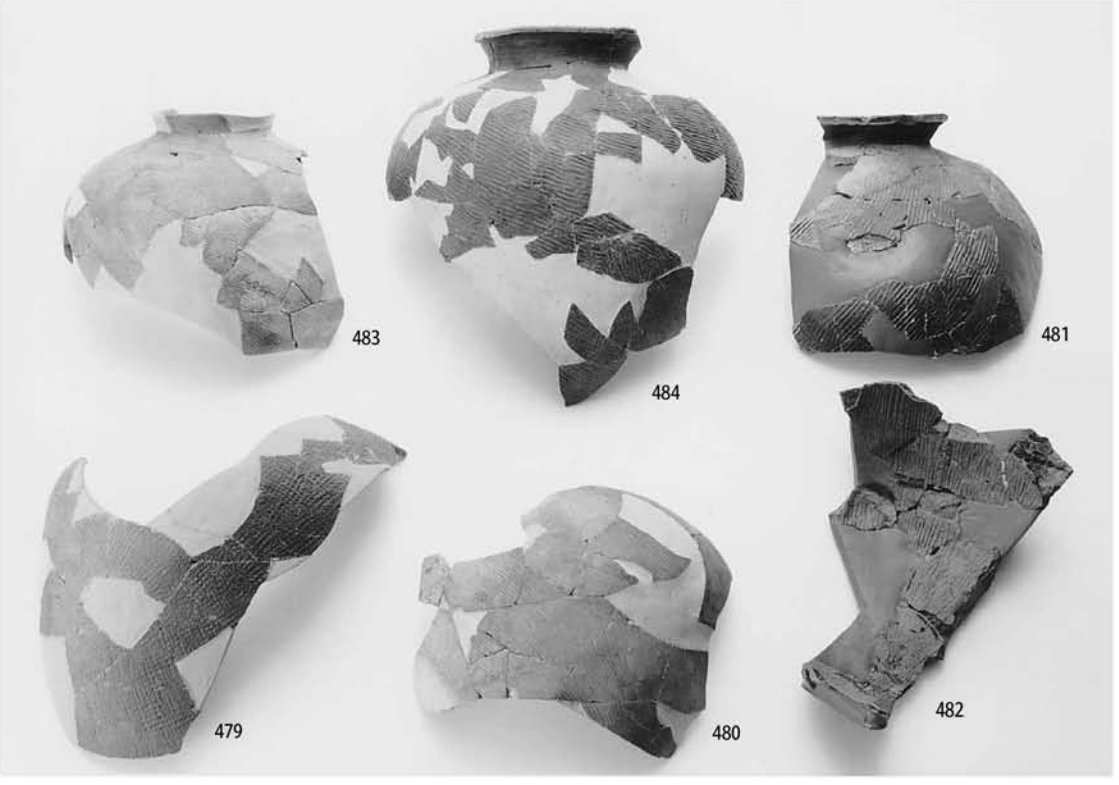
B区　包含層出土遺物15
（墨書土器「山水」、坏）

B区　包含層出土遺物16
（須恵器：大甕）

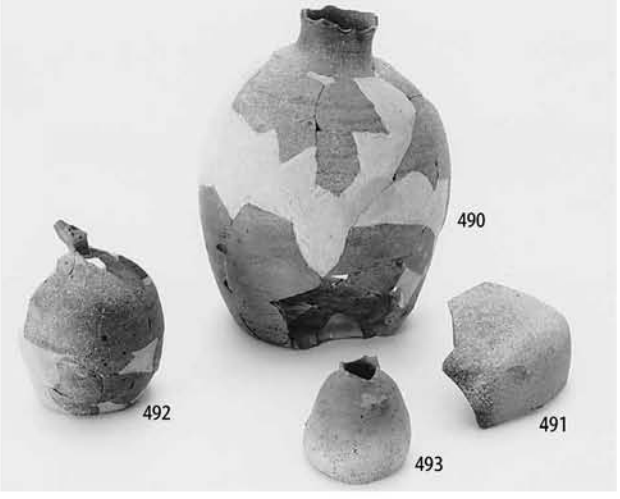


B区　包含層出土遺物17
（須恵器：甕）

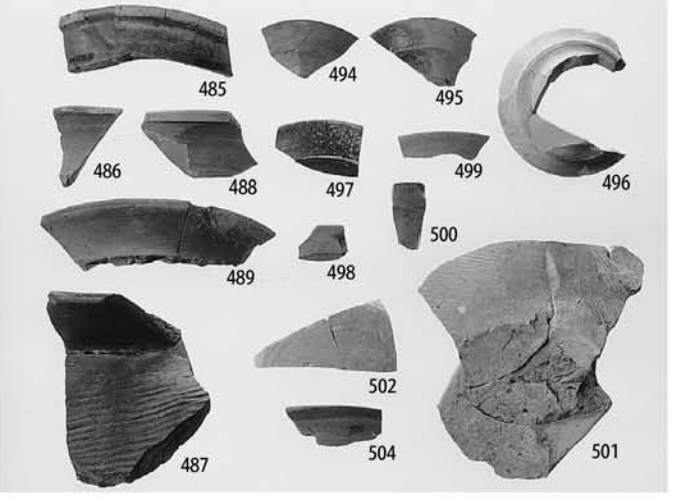
B区　包含層出土遺物18
（須恵器：横瓶）



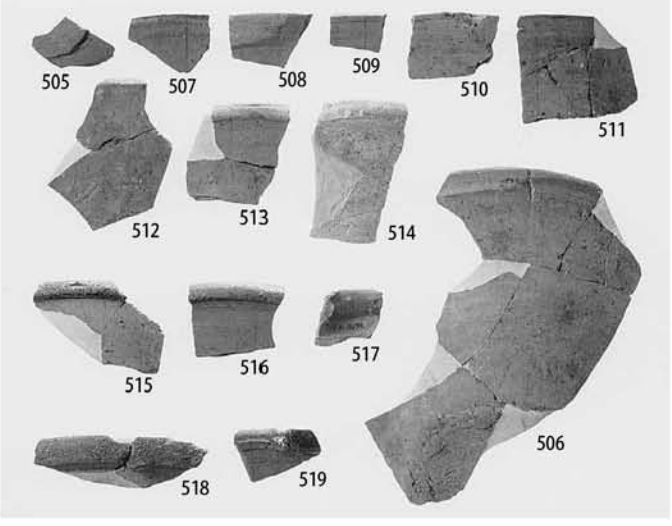
B区　包含層出土遺物19（須恵器：甕）



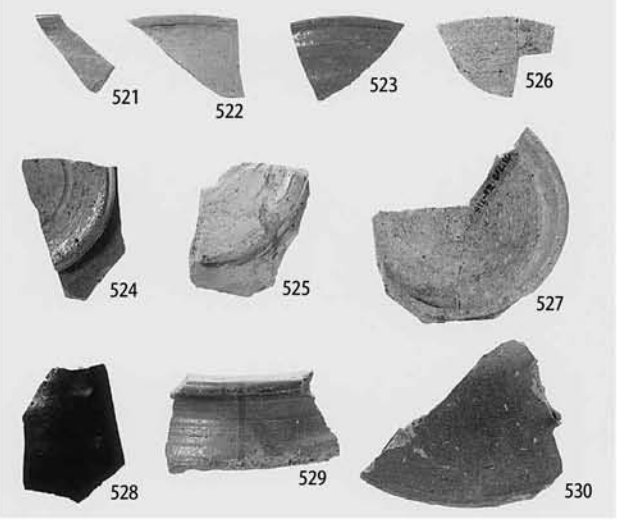
B区　包含層出土遺物20（須恵器：壺）



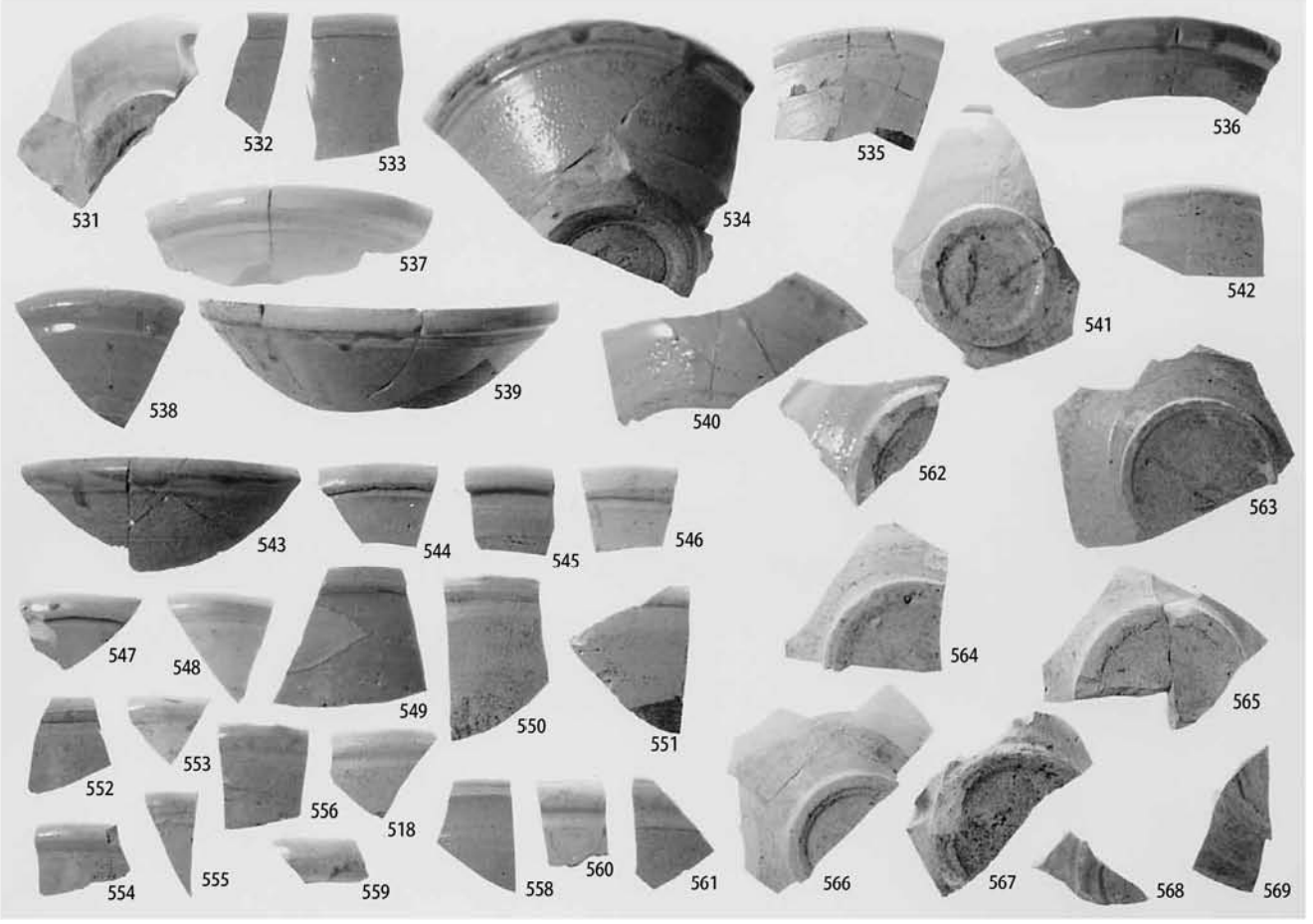
B区　包含層出土遺物21（須恵器：甕・壺・坏）



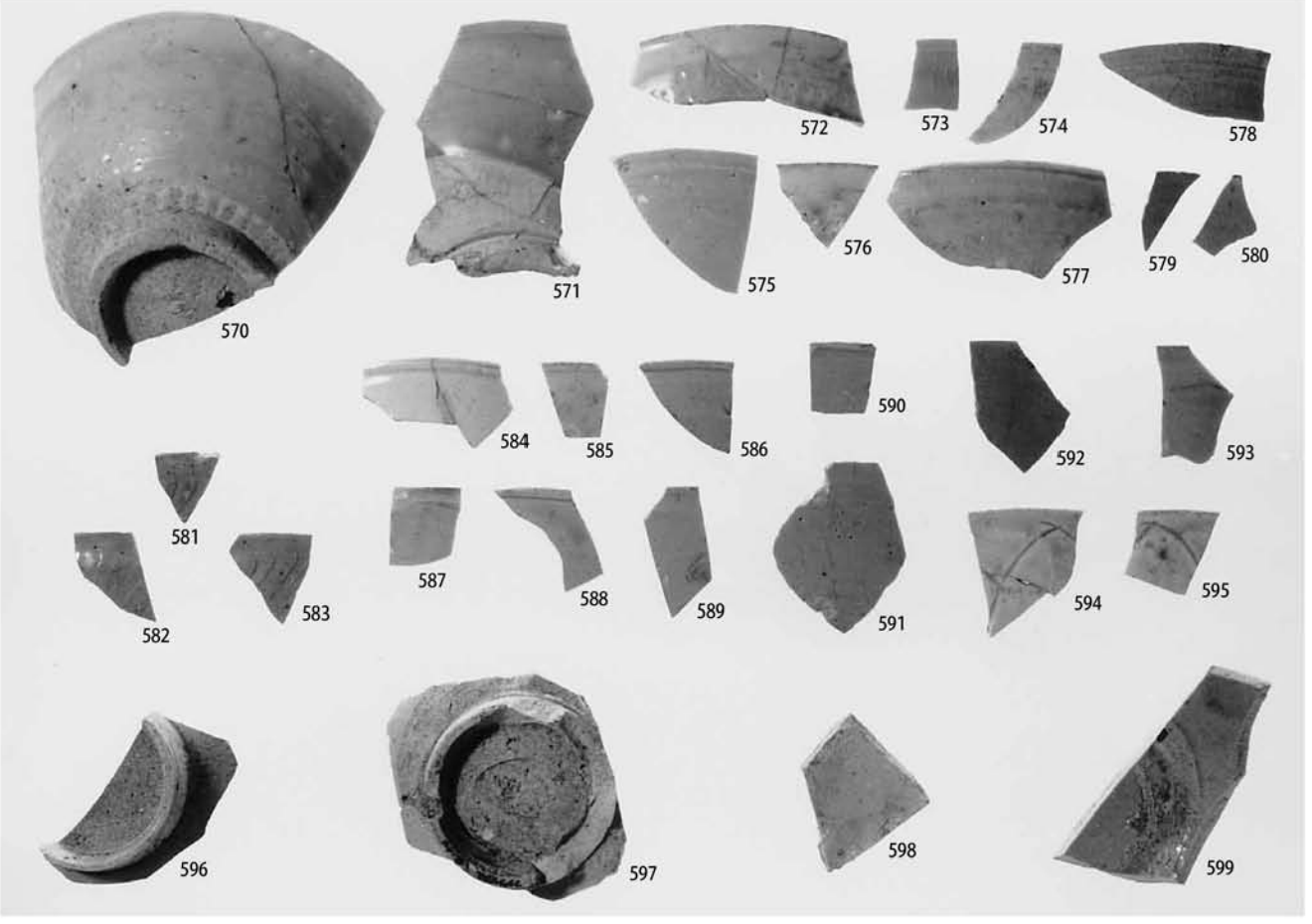
B区　包含層出土遺物22（東播系須恵器）



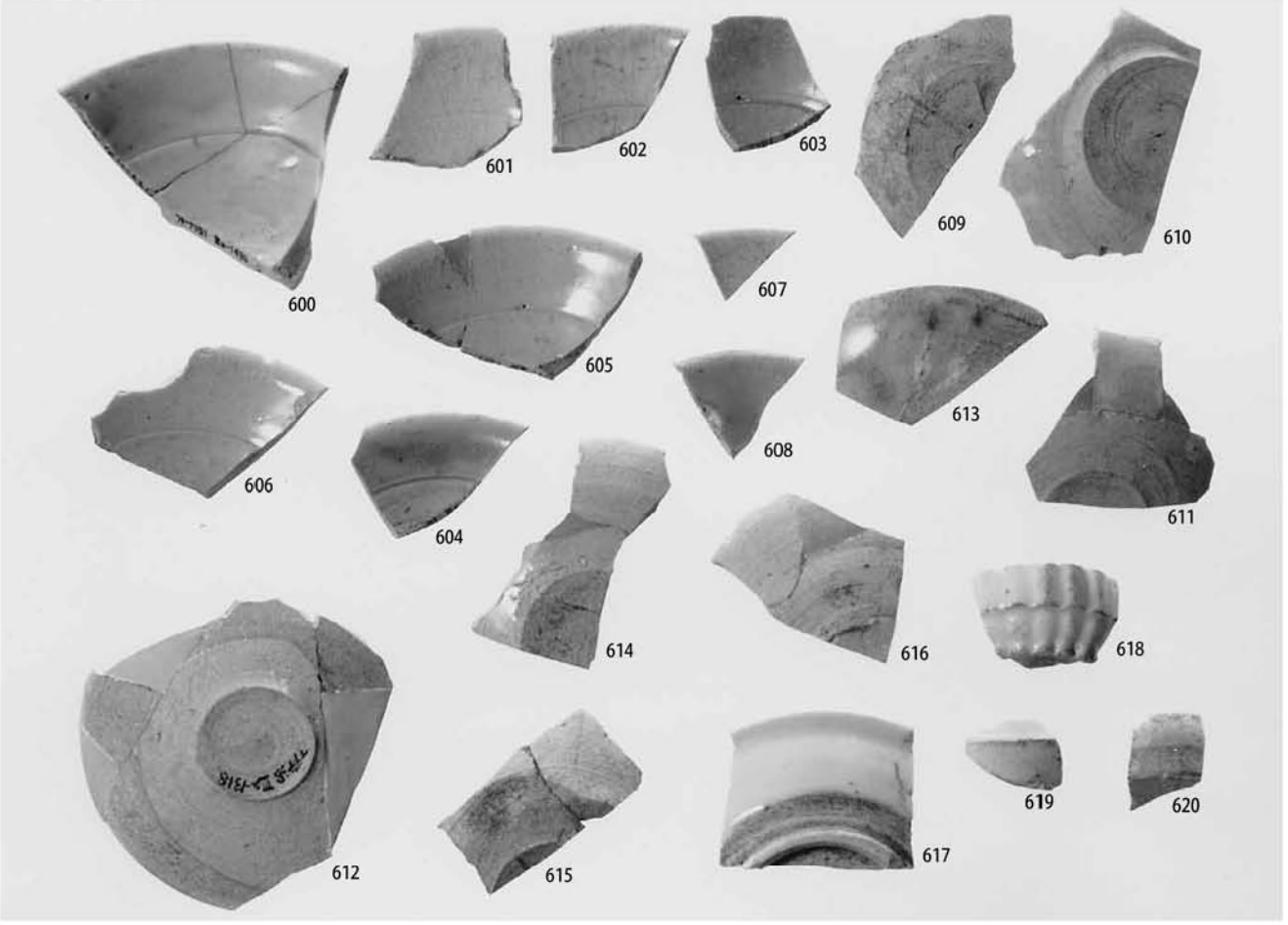
B区　包含層出土遺物23（緑釉・灰釉etc.）



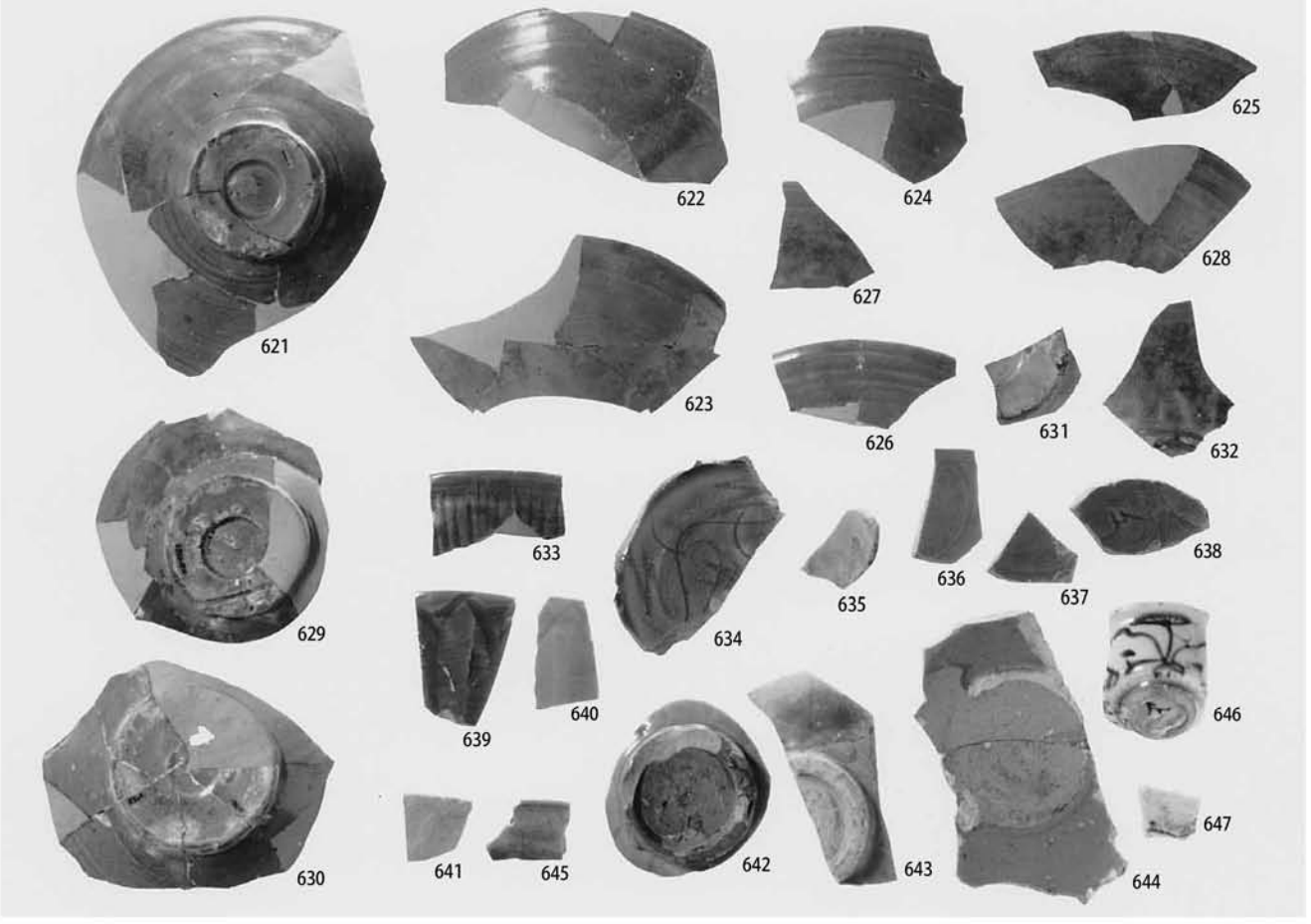
B区　包含層出土遺物24（白磁碗Ａ～Ｃ類）



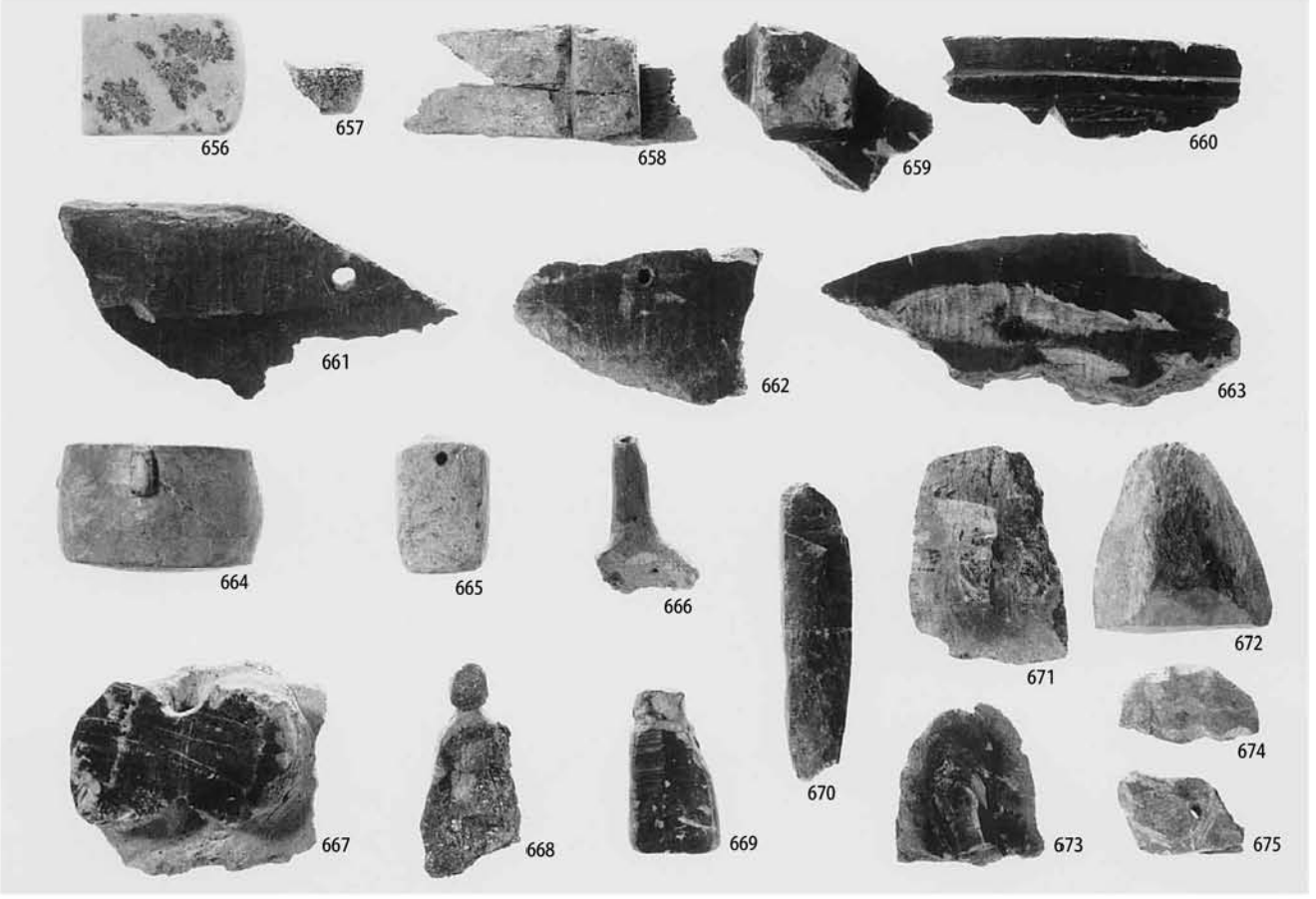
B区　包含層出土遺物25（白磁碗Ｄ～Ｉ類）

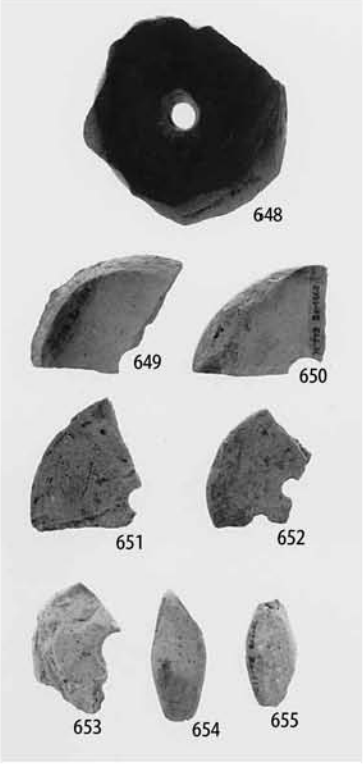


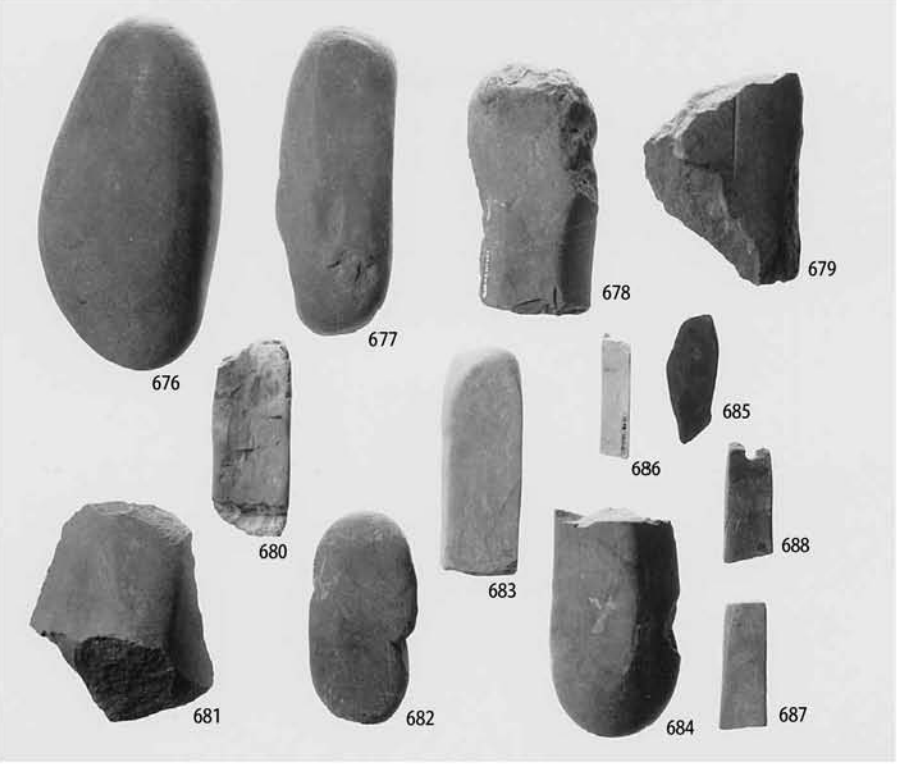
B区　包含層出土遺物26（白磁皿・白磁合子）



B区　包含層出土遺物27（青磁・青花）

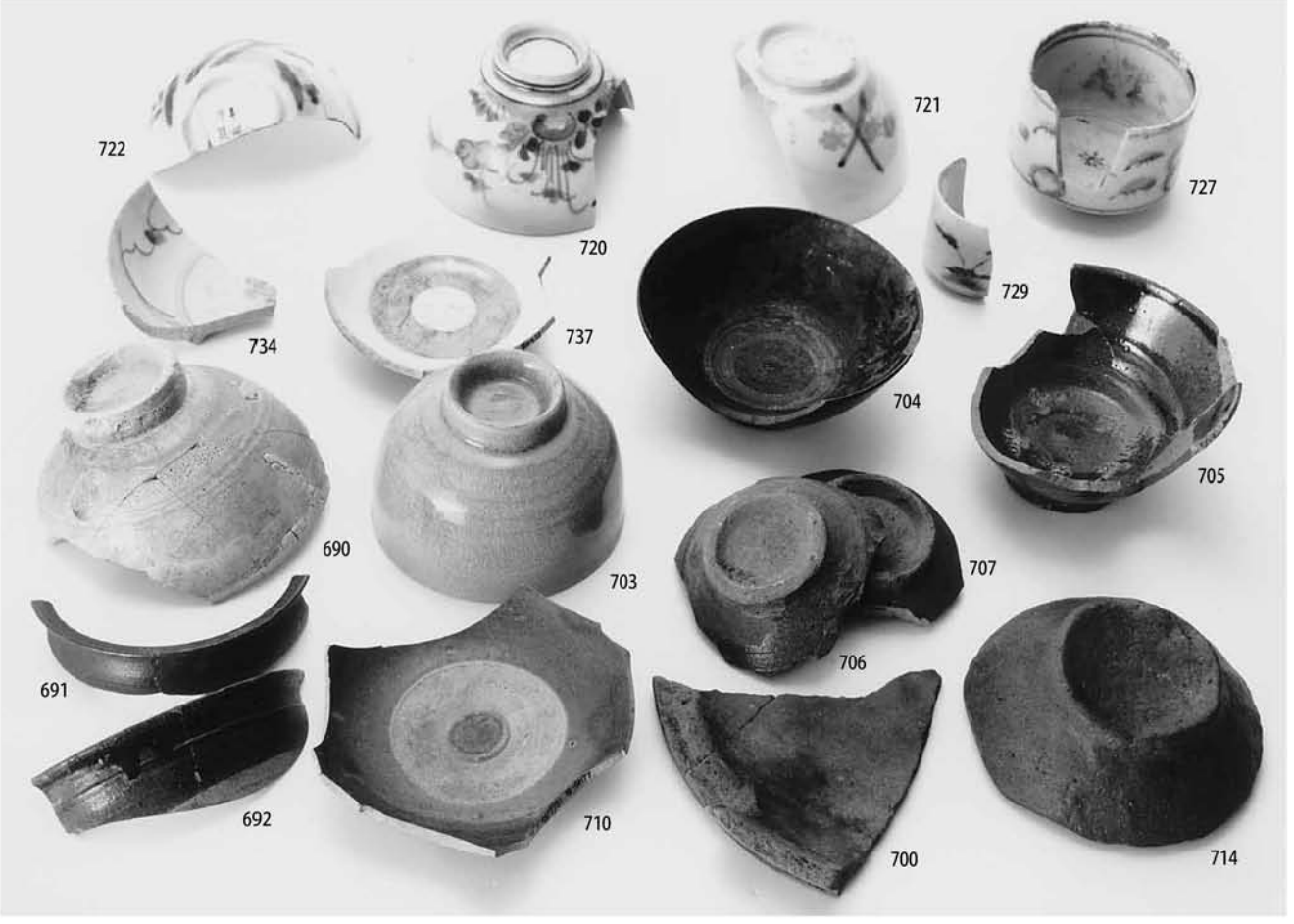




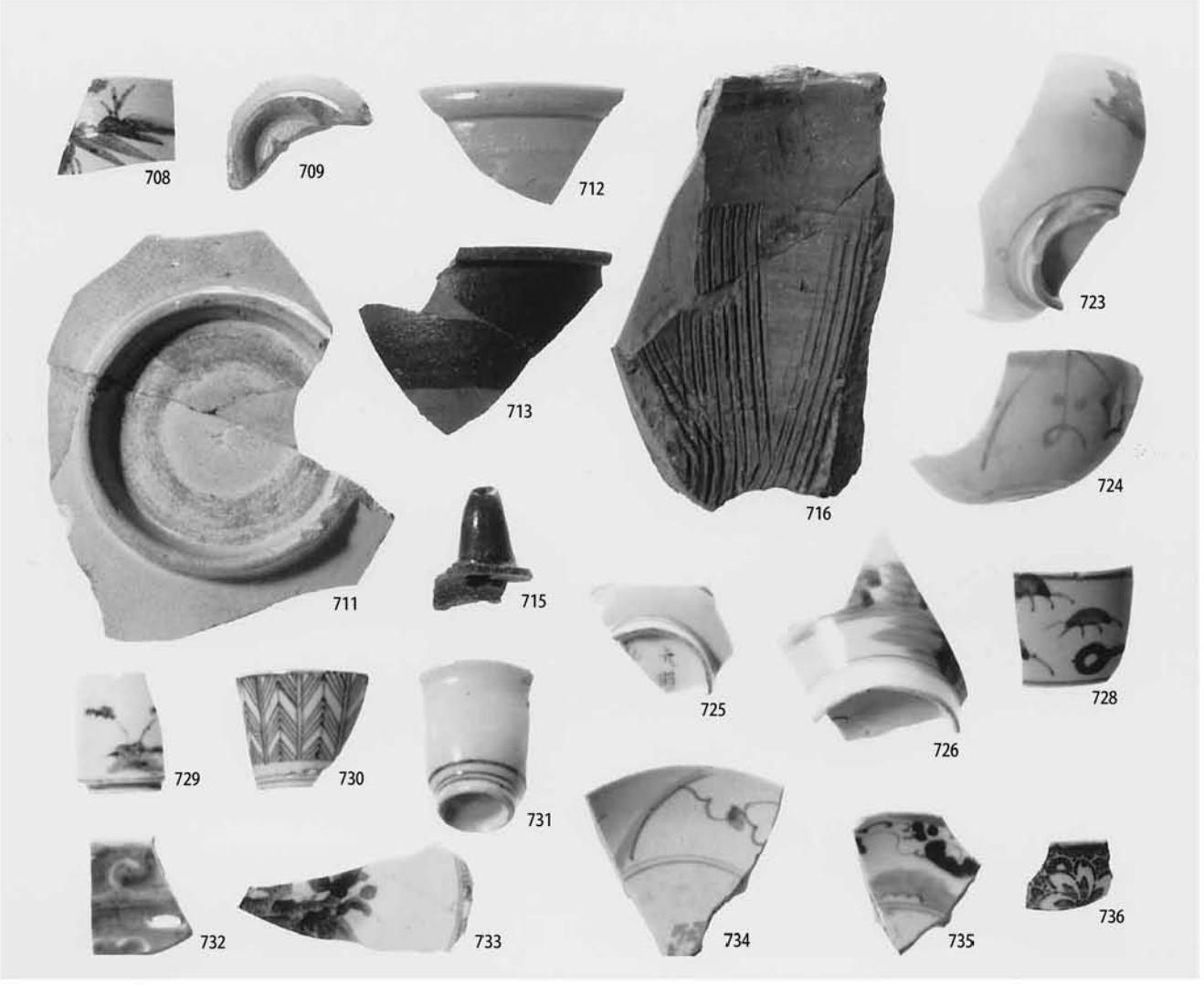


B区　包含層出土遺物28・29・30・31
上段28：石製錘具・滑石製品
中段29：紡錘車・土錘
中段30：砥石
下段31：刀子

B区　近世の遺物１（甕・鉢・擂鉢・蓋）

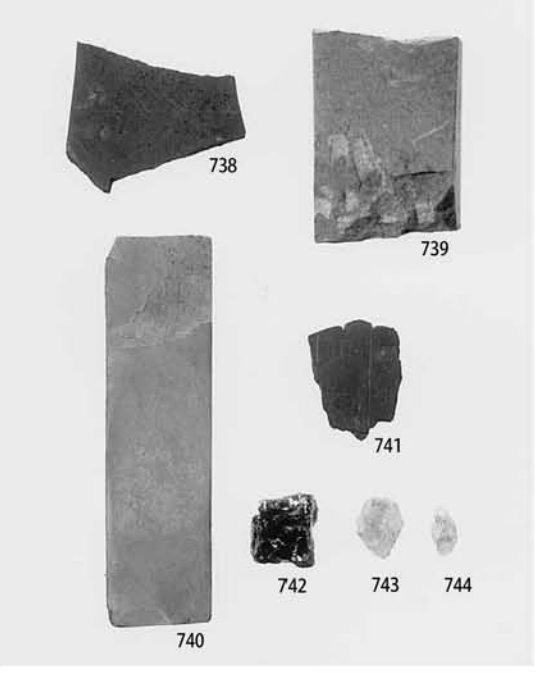


B区　近世の遺物２（碗・筒形碗・火入れ・皿）



B区　近世の遺物４（碗・筒形碗・小坏・皿・鉢・擂鉢）

B区　近世の遺物５（５号土坑出土、茶臼）



B区　近世の遺物６（砥石・石盤・火打石）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ふでなしいせき
書　　名	筆無遺跡
副 書 名	都城東環状線　今町工区　地域連携推進事業（地方道）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第166集
執筆･編著者名	福田泰典・飯田博之・丹　俊詞・柳田裕三
発 行 機 関	宮崎県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
発行年月日	2008年２月22日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地	北緯	東経	調査期間		調査面積		調査原因
筆無遺跡（ふでなしいせき）	宮崎県都城市今町 9270-3番地他（A区） 9296-1番地他（B区）	31° 41′ 50″ 付近	131° 02′ 02″ 付近	A区	2003.11.15 ～ 2004.03.25	2,400㎡	17,280㎡	都城東環状線 今町工区 地域連携推進事業（地方道）
				B区	2004.01.15 ～ 2004.03.25（B地点）	1,280㎡		
					2004.07.21 ～ 2004.12.22（C地点）	3,400㎡		
					2004.06.07 ～ 2005.02.25（D1地点）	5,600㎡		
					2005.06.13 ～ 2006.12.20（D2地点）	4,600㎡		

種　別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
散布地	縄文時代（後期～晩期）	・土坑　３基	・縄文土器（後期・晩期）	・土坑内から縄文土器がまとまって出土
	弥生時代（中期～後期）	・竪穴住居跡　３軒 ・土坑	・弥生土器（甕・壺）	・意図的配置が考えられる３軒の竪穴住居跡を検出
	古代～中世（９ｃ～14ｃ代）	・掘立柱建物跡　５棟 ・溝状遺構　６条 ・土坑　57基 ・周溝墓　３基 ・土坑墓　１基 ・道状遺構　３条 ・畝状遺構	・緑釉陶器（碗・皿） ・灰釉陶器（皿） ・墨書土器 ・白磁（碗・皿・合子） ・青磁（碗・皿） ・石製品（銙具・滑石製石鍋） ・金属製品（刀子）	・古代と中世の方形掘立柱建物跡を検出 ・削り出した出入口を伴う溝状遺構を検出 ・古代の周溝墓を３基検出 ・土師皿、白磁碗、刀子を副葬する土坑墓１基を検出
	近世	・掘立柱建物跡　２棟 ・溝状遺構　２条 ・土坑　８基	・陶磁器（碗・皿・甕・擂鉢・甕etc.） ・石製品（茶臼・砥石・火打石）	・掘立柱建物跡２棟、溝状遺構２条、「室」と考えられる大型土坑４基を２基ずつのセットで検出

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第166集

筆　無　遺　跡

都城東環状線　今町工区　地域連携推進事業（地方道）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年２月22日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171　　FAX 0985-72-0660

印　刷　㈱印刷センタークロダ
〒880-0022　宮崎市大橋２丁目175
TEL 0985-24-4351　　FAX 0985-27-9337